

スーパーキングの野望

宝剣

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は決意した、再び生を受けた少年は決意したのである!!

これは、緋弾のアリアの世界に崇高なる使命（エロ）を受けた少年が降り立つお話である。

目次

舞い降りる伝説、その名はエ（ry	
彼の地に降り立つ新たな主	1
スーパーキンジX	14
兄の死……そして伝説へ	28
強襲科くスパキンの一日く	42
ただの主人公ではない！オリ主だ！	55
バトルオブエロティック	72
エーロ主さんのどっれいー♪	86
作戦を開始する！	100
女騎士、墜つ！	115
性騎士、いや、ライカと志乃だよ	
スパキンと不死の吸血鬼	135
金銀井は最高！	163
調教は始まったのだつ！	174
堕ちた教師くスパキンの罠く	194
カナ……どうしてカナは男なの!?	213
BLとかねえわ、やるならTSじゃね	
ギンギラギンーにち○こ立つく	229
覚醒 オリ主キンジ	248
華麗なるスパキン	275

太陽少年キンジ

—

285

止まらないパトスと心中

—

298

巫つ女巫女にしてやんよ!

—

313

快樂の虜

—

325

舞い降りる伝説、その名はエ（ry

彼の地に降り立つ新たな主

「フフフ、ついにこの日がやって来たか……」

どうも皆さん、神の手によって超強化された遠山キンジに憑依した伝説のオリ主の伝説がそろそろ始まります。

この世に俺が生を受けて早五年、よくある理由で死んでよくある展開で転生したのは緋弾のアリアの世界、そこで俺は主人公たる遠山キンジに憑依した。

もちろんチート能力もある、一つは原作キンジの肉体に憑依転生、二つ目はキンジ、すなわち俺の今生の肉体のスペックの超強化、三つ目に暗示能力、それ以外にも沢山、これらをもらった理由はただひとつ、この俺の手によって緋アリキャラによるハーレムを作ることだ。

本日はその最初の第一歩、原作でも正妻ポジションだった星伽白雪との初めての出会いの日だ。

あの清楚な佇まいの大和撫子な巫女さんを、俺色に染めてやる!!

そのためには第一印象が大事だ、慎重にいかねば……。

「兄さん、この神社が目的地？」

「その通りだ、キンジ」

俺の質問に答えたのは遠山金一、原作でのキンジの兄でありすなわち今の俺の兄だ。

原作通り、性的興奮により発動する我らが遠山家の特異体質であるHSSを使いこなす凄腕の武偵だ。

そして金一に聞いた通り、目的地星伽神社に到着した。

ククク、コレよりスーパーキンジの伝説が始まるのだ!!

さて、原作通りに白雪との接触は完了、仕事の話があるからと大人組と別れた俺は先程まで白雪と話していた。

そのとなりに妹の風雪ちゃん4歳がいたが今は置いておこう。

原作では何人も姉妹が出ていたが今俺たちが5歳なのを考えると他の星伽姉妹は赤ん坊か……。

「あの、と、遠山様、お茶をお持ちしました」

「ん？ああ、ありがとう白雪ちゃん」

「あ、いえ、そのような……」

「……」

うーんまだまだ固いな、やはり原作でも打ち解ける切っ掛けとなった花火の日を待つしかないか。

俺はお茶をのせてきたお盆を抱えてあたふたしている白雪を見ながら思考を練る。

白雪の隣に座っている風雪は静かにそして育ちのよさを匂わせる落ち着いた佇まいで正座しているがこうして並んでるのを見るとどちらが姉か分からない。

いまだにワタワタしている白雪を見て茶を啜る。

ムッ、これは!!

「美味しいな、ありがとう」

「えっ、いえ、その」

「白雪ちゃんが淹れたの？」

「あ、はい、そうです」

「お代わりお願いできる？」

「はい、少々お待ちをー」

このようにポイント稼ぎも怠らずに褒めたあと、お代わりを淹れに行く白雪を見送って風雪の方を見る。

さて、まずはこの子から行こうか……。

「風雪、こつちへおいで」

「はい」

神様印の暗示をかけ、風雪に俺に対する軽い好意を植えつけた。

それに俺の言葉に対する抵抗感を薄めたので手招きを受けた風雪は大人しく俺の前に来る。

俺の鼻くらいの身長風雪を胡座をかけた膝の上にのせると背中を預けてくる、お礼に頭を撫でると少し嬉しそうに表情を緩める……ヤバイな、メチャクチャ可愛い。胡座の上に座っているためかもろに風雪の柔らかい尻がチンコに当たり気持ちいい、流石にまだチンコは立つことはないが中の人である俺の気分はウハウハだ。この間にも頭を撫でる俺に身体を預けてくる風雪だがこれが将来はクール美人に育つというのだから

堪らないな。

そうして風雪を可愛がっていると戻ってきた白雪はコレを見て驚いたが仲良さそうに会話する俺たちを見て少し羨ましそうにしていたために白雪も手招きする。

もちろん目を合わせる、又は声を聞かせるだけで発動する暗示もバツチリとかけてある、こちら風雪と同じく軽い好意と抵抗感を薄めたので大人しくこちらにきて俺の隣に座る。

ククク、こうしてじつくりと植えつけた好意を育てて行くのだ。

二人の頭を撫でながらこの星伽神社滞在中の行動スケジュールを確認し俺はニヤニヤしていた。

「おし、花火を見に行くぞ、白雪、風雪!!」

「え、怒られるよキンちゃん」

「そうですよキンジお兄様」

「バレなければ無問題さ♪」

止めようとする二人を連れて花火に出掛けた俺は二人を連れて花火大会を回った。

最初は外を怖がっていた箱入り娘の二人だが連れ回している内に固さもとれ最後は楽しんでいた、が、しかし。

戻ってきた俺たちを待ち受けていたのは少々お怒りのマイブラザー金一と白雪の親、首根っこを捕まれて土蔵に閉じ込められた俺たちは朝まで出しませんと説教を食らった。

少し落ち込んでいる二人だが……この瞬間を待っていたんだ!!

「白雪、風雪、ごめんな、俺のせいで……」

「!!そんな、キンちゃんが悪くないよ」

「お兄様、悪いのは三人ともです」

軽く落ち込んだ振りをして二人の落ち込む気持ちをこちらに向ける、ちなみに風雪がお兄様と言っているのは仕様だ。

「ありがとう、二人とも」

「ンツ!?!」

「あつ……」

二人を抱き締めそれぞれの唇を奪う、フハハ、コレで二人のファーストキスは俺のもの!!

盛り上がる心そのまま目を合わせ暗示をかけながらそれぞれの唇を奪う。

数分ほどそうしていただろう、顔を話した時に二人を見るとそこには欲情した女の顔をした幼女が二人いた。

第四の我能力、性魔術を使用したためだ。暗示と併用したことにより未発達の子女だろろうが発情させたり、感度をあげたりできる。

「あつ……キンちゃん」

「お兄様、私……」

巫女服の発情した幼女がこちらを潤んだ瞳で見つめる、その手の知識のない二人は戸惑っているだろうがここで快楽を植えつけ仕込むのが今回の目的だ、作戦通りに人の来ない裏庭の土蔵に閉じ込められたがここまでうまく行くとは……。

とにかく二人の性感帯を開発するためにまずは風雪を抱きよせ、その巫女服の前から手を入れてマンコをゆっくりと愛撫する。

「ンツ……」

胸は揉むほどないので撫でるように愛撫し、性魔術を更にかけてながら触っていると声が漏れ始めた、その頃になると風雪のマンコからとろとろと愛液が溢れてきた、そしてついには喘ぎ声を上げ始める。

「……あつ、ンア……。んちゅ……。ん。お兄様……」

袴に滑り込ませてマンコの表面を弄っていた指をつぶりと幼女マンコに浅く差し込む。

快楽で弛緩した身体を預けてくる風雪のマンコに指を出し入れしてほぐしていく、使うのは当分先だがこうして開発をじつくりと進めるのだ。

五分ほどたつ頃には愛液が止めどなく溢れテラテラと俺の指と風雪のマンコを濡らす。

「あつ……いや……」

「どうしたんだ、風雪？」

「んっ、あつ、その、あつ、恥ずかしくあつ！」

「何も恥ずかしいことなんてないさ、これはね、気持ちいいって言うんだ」

「ンツ……気持ち、良い？」

「そうだよ」

ククク、幼い子供を染めていくのはたまりませんなあ。俺の言葉を信じてだんだんと快楽に身を委ねていく風雪を見ながらそろそろイカせることにした。

指の出し入れを早め、胸への愛撫を続けながら性魔術を強くかける。快楽に身をよじる風雪の顔が蕩けていく。

そして……。

「あつ、おにい、さま、何か……ンツ来る。頭が……ンア真つ白に……」

「それはな、風雪、気持ち良くてイクって事なんだ、ほら、イクって言ってみるんだ」

俺の腕をつかみ頭を振る風雪に染み込ませるように淫語を教え込む、既にびちゃびちゃになったマンコから指を抜き、まだ皮を被っている淫核をぎゅつとつまみ止めを指した。

「ンアアアアアアアアアア!!イクうううツ!!」

性魔術により感度の上がついているところに敏感すぎるクリトリスに刺激を受けたことにより潮を吹きながら絶頂する風雪、絶叫を上げるが防音結界を張っているので問題なし、快楽で暴れるその肢体を抱き締めながら待っていると。

一分ほどの間は跳ねていただろうか、絶頂の余韻が落ち着くまでにそれだけかかった。

行きも絶え絶えな風雪を床に寝かせてやる。

余りの快感に少し眼がどっかに行っているが今は置いておく。

さて、次は……。

「キンちゃん……はあ、何、を……」

「苦しそうな風雪を少し可愛がっただけだよ、次は白雪だからな」

今度は白雪を抱き寄せて愛撫を開始する。

魔術をかけて直ぐにした風雪とは違い暫く放置していた白雪は既にマンコがびちゃびちゃになつていた、それを見て笑みが込み上げるが真面目な顔で白雪に告げる。

「二人が落ち込んでいたからね、気持ちよくして上げるんだよ、白雪も気持ちよくなりた
いだらう？」

「あつ……うん、私も……」

先程の風雪の乱れ方を見て気持ちよくなれると思つたのか期待が顔に浮かんでいるのがわかる。

今度は向かいつあつて抱き合い、対面座位の姿勢でキスをしながら白雪のマンコを愛撫する。

既に濡れ濡れのそこを指でなぞるとピクンピクンと反応する白雪が可愛くて舌をいれた。

突然のディープキスに目を見開くも暫くすると大人しく舌を絡めてくる。

まだまだ拙いキスだが確りと教育してやると誓いながら愛撫を続け、マンコをほぐして行く。

だんだんと身体が近づき白雪は俺の腰に足を回して更に密着してきた。

前からの愛撫が難しくなり後ろ、お尻の方から手を回して入り口付近を指で弄ぶ、そのたびに身体を跳ね、軽い絶頂を繰り返す白雪。

「んちゆ、んん、んむ……プハア！……はあ、はあ、キンちゃん……」

「そろそろ白雪もイカせてやるよ、ほら、こっちに背を向けて足を開くんのだ」

「んん、んあつ、は、はい……」

蕩けた表情で俺に従う白雪は背を預け、股を開く。

M字開脚のような姿勢になった白雪のマンコを更に激しく、それでいて処女膜を破らないように刺激して高めていき。

「んあ、ああつ!!キンちゃん……私、もうっ!!」

「ああ、イクんだ、白雪、さあ、イケッ!!」

「ンンンンンン!!アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!イクっ!イクううううううう!!」

先程の風雪と同じく絶叫しながら登り詰める白雪のあそこをイッテイル最中にクリトリスを刺激して更に追いやると激しく潮を吹きながら更に絶頂する。

もはやおとなしい女の子の姿はそこにはなくただ快樂に喘ぐ一人の女がそこにはいた。

イキ過ぎてぐったりした白雪を抱き抱えて、風雪も抱き寄せて俺は床に寝転がる。

しかし、気絶した白雪は俺に身を預けて寝息を立て始めたがまだ意識のある風雪が俺の袖を期待に満ちた顔で引っ張ってきたためにもう一度優しいクリ責めでイカせて

やったら氣絶した。

二人を抱き締めながら再度寝転がり、柔らかい感触と女の匂いが充満するこの土蔵で計画通りに行つたことを満足しながら俺は就寝するのであった。

翌日、朝になると大人たちが迎えに来る前に起きた俺は既に起きてる二人にオナニーを教えた、昨日のような感覚を得ることができると教えると、食いついてきたので、これは三人だけの秘密だと念を押して暗示もかけながら教えた、暗示の内容は1日2回はオナニーをする事で、これは俺のいない間も性感帯の開発をするためである。

やり方を教えた後は大人と兄さんが来るのをまち、その日に帰る予定である俺は二人に寂しそうな視線を向けられるが別れることになった。

原作知識によれば再会するのは10年後、すなわち高校入学した時だ、それも白雪だけで一つ下の風雪は更に一年待たなければならぬ、確りと仕込みを終えた俺は最後に手を振りながら白雪と風雪の二人と別れたのであった。

次の再会は10年後、それまでに原作のバトルイベントを乗り越えられるように戦闘の修行をしておかねばと策謀を巡らせながら……。

スーパーキンジX

あれから9年、エロ主ことスーパーキンジである俺も、ついに中学卒業を控える身となった……。

その間に同級生のヤクザの娘の金髪美少女を手込めにしたり、忍者の癖に忍ぶつもりのない後輩をいろんな意味で可愛がったりと原作キンジとは比べ物にならないくらい充実した生活を送ってきた。

未来の嫁を守るために修行に明け暮れ、己を鍛える日々、暴走すると面倒なHSSも制御できるようになった俺は中学三年生の時点でSランクの武偵として活躍している。

他にも、敵組織であるイ・ウーとの戦いやそのあとの戦役に備えるために短期留学制度を利用して海外に乗りだし外国語を納め、武器を集めた。

今の装備はベレッタM92F×2と兄さんに頂いた緋色のバタフライナイフに特典の一つである影のステルスによつて作った擬似四次元ポケットの中に大量のマガジン、影の異空間は時間の概念がないので保存に便利だ、このように着々と己を磨いている。

そして現在。

「邪魔だ退けやコラア!!」

「ぎゃあああああ!?!」

「くそ、あいつ武偵じゃないのかよ?」

「ハハハ!逃げ惑え愚民どもよ!!」

逃げ惑う犯罪者どもを撃ち倒しまくっている。

本当なら日本の武偵は不殺を貫かなければならないが、武偵の本場であるヨーロッパで修行した俺はその観念が薄い、流石に殺しはしないが頭以外の場所ならガンガン狙いながら連中を倒していく。

数分もする頃には当たりには痛みで気絶してたり胸部を銃弾で撃たれ昏倒している犯罪者の集団が転がっていた。

いやあ、この世界の防弾服はものすごく優秀だから貫通の心配をしなくていいからね。

遠慮せずにゴコれるし。

「あー、こちら遠山キンジ、武偵だ。警察官の皆さん、制圧が完了したので後は任せます」
「了解した、遠山武偵、ご苦労だ」

任務を終えた俺はさっさと帰路につく。

今回の任務は南米のマフィアが麻薬の密売しているとの情報が入ったのでその根城と思われる港の工場を強襲（アサルト）して制圧した。

原作キンジのような性に関してガキではない俺はHSS、ヒステリアモードに妄想だけできることができる。

まさにエロ主の面目躍如と言うわけだ。

それにせつかくの戦闘能力が30倍になる特殊体質を持っているんだからHSSじゃないとき、通常状態でも強くなればHSSになった時は更に強くなれると考えた俺は東京の祖父に鍛えてもらい腕を磨いた。

その上俺のHSSは特典のおかげで通常30倍のところを60倍にしている。

ノルマーレでこれなのだからベルセや、レガルメンテになると……WAKWAKが止まらねえぜ！

「ふふふ、それにノーマルモードでAランク上位クラスの戦闘力を手に入れたぜ」

そもそも、Aランクあれば武偵としてはプロで食っていけるのだ、その上戦闘力倍加能力があるのだから本気でやりあえばカナになった兄さんでも勝てるという確信がある。

コレで俺の未来は明るいぜ！！

卒業式……。

校長やPTA役員どもの長い話を聞き流し卒業証書ももらった俺は強襲科のメンバーと後輩や、戦妹である風魔陽菜とその友達の課報科の面々を連れて打ち上げに行き飲んで食べて騒ぎまくって遊び倒した。

俺はキンジとは違いクールなイケメンとして通しているため友達も多い、思えば原作キンジは顔は良いのにそのネクラなオーラで損をしていた気がする。

「師匠、拙者も必ずや師匠の後を追いつ、東京武偵高に行くで御座るよ」

「ふ、それは楽しみだな、陽菜。俺がいらない一年間の間もちゃんと修行するんだぞ？」
「もちろんで御座る!!」

原作では優秀だがドジな忍者として通っていた陽菜だが、俺が鍛えたお陰で基礎スベックを強化している。

武偵ランクもBではなくAだ。

あと、修行にはエロイ事も含まれていたが少しも疑問を挟まなかった、この娘はアホの娘だからな。

ちなみに俺は童貞ではない、冒頭で紹介したヤクザの娘の金髪美少女、鏡高菊代で卒業済みだ。

彼女が、親の後を継ぎ学校を辞める日に逆レされてしまった。泣きながら思い出が欲しいと迫る美少女には勝てなかったよ。まあ、すっかり俺の一物に惚れ込んでしまつて最後の方はアへ顔で腰を振っていたが。

懐かしい記憶を振り返りながら同窓生の皆や別れる後輩たちと盛り上がった俺はウーロン茶で酔い潰れた陽菜をお持ち帰りして中学校最後の日を終えるのだった。

二週間後……。

「ハイ」が……」

新たななる大地、俺が三年間過ごし、ハーレムを作るその場所の名は……。

東京武偵高校、ついにやって来たぜ!!

意気揚々とモノレールから降りた俺は視界に入った人口フロートの上に並ぶ建物を見て興奮する。

周りには俺と同じく入学する生徒、もとい生徒たちの姿が見える。此処に居る者は全て、全国どこかの武偵附属中の卒業生たちである。

一部は一般高の生徒も居るけどな。

「さて、白雪はどこだ？」

辺りを見回しながら待ち合わせをしていた白雪を探す。彼女は俺に合わせて此処に入学を決めたそうだ。原作と同じで綺麗に育つてるだろうから直ぐ見つかるはずだが……いた。

何やら受付の横にある建物の前でナンパされている。男三人に囲まれた白雪は相変わずワタワタしていた。

ふ、俺の嫁に手を出すとは、いい度胸じゃないか。

「おい、お前ら、俺の女に何してるんだ？」

ふ、決まったぜ！

突然の乱入者に唖然とする男三人を鍛え上げた格闘術で一分もかけずに伸した俺は「キンちゃん……」と驚いている白雪をそつと抱き締める。

「大丈夫か、白雪？待たせて悪かったな」

「キンちゃん……なの？」

「おや？白雪は俺の事を忘れたのか？」

「ううん、そんなことない、キンちゃんの事は私も風雪も1日も忘れなかつたよ」

最初は呆然としていた白雪は抱き締められて落ち着いたのか身を寄せて甘えてくる。

ウハッ！スツゲエ柔げえ、という内心をおくびにも出さずに白雪の手をとり受付へ、

プリントに書き込みを終えればそれぞれの科の試験会場へと向かい別れた。

もちろん今夜の約束も忘れない。

既に寮の鍵は持っているので楽しみである。

さて、まずは試験を合格しますかね!!

『試験終了やあ！生存者は一名、他のメンバーは全滅やな』

「もう終わりか?」

強襲科の試験に使われた廃ビルの中で、周りに倒した受験者の面子と隠れて配置されていた教師の倒れている空間に立っていた俺は、スピーカーから聞こえる強襲科の女教師である蘭豹の声を聞いて呟いた。

途中から数えていなかったがHSSモードの俺は出会った敵を全て倒して試験を合格した。

後日通知が届くとの事だがSランクは決まりだろうな、そんなことを考えながらビルを出るとそこにはでっかい斬馬刀を背負いM500（通称象殺し）と呼ばれる化け物銃を腰に引っ提げた蘭豹が待ち受けていた。

「おう、お前の戦い見とつたで、新入りのくせしてやるやないか！」

「いえ、先生ほど強くは有りませんよ」

ガツハツハツと肩をバシバシ叩いて来る蘭豹に謙遜しつつ改めて彼女を眺めてみる。

顔は美人、背も高いし胸とかもデカイ、一見スーパーモデルのようなスタイルの美女だが性格がな……。

こうしてる今も俺を値踏みするように見ながら戦闘狂らしく殺気を当ててくる。

もちろん流すが。

「アタシの殺気を流すなんてお前本当に面白いなあ、後で殺らんか？」

「美人のお誘いは嬉しいですが今日は先約があるので」

「な!？」

美人と呼ばれたのが嬉しかったのか少し顔を朱に染めながら照れる蘭豹は結構イケるな。

ハーレムリストに加えておくか……。

続々と待機していた教師の手によって運び出される受験生と俺に速攻でやられた教師を眺めながら俺は笑みを深めた。

試験も終わり白雪と待ち合わせ場所で落ち合った俺は寮の自室に白雪を連れ込んだ、運のいいことに同室の生徒はいなくなつた。

以前の寮案内の時に部屋替えを希望するように暗示をかけたが上手く行つたようだ。ニヤニヤしながら白雪の愛妻料理に舌鼓をうつた俺は早速二人で風呂に入った。

ここからは最強オリ主ではなくエロ主のターンだ!!

二人でシャワーを浴び、お互いの身体を洗う。

今は湯に浸かり足の間に白雪を入れて後ろから愛撫している。

「ン……アアッ!」

「今夜は楽しもうね……」

俺に身体を預けて大きく育つた胸を揉まれる白雪は喘ぎ声をあげる。

名前と同じく白く綺麗なスベスベの肌を堪能しながら胸を揉みしだき首筋に舌を這わせる。

ピンと立った桜色の乳首を指で弾くと嬌声をあげるその姿に俺のチンコはフルボツキして白雪の尻に当たる。

「ンアツ、キンちゃんのが、お尻に……」

「そうだ、これが白雪の中に入るんだ、だから確りと解さないとな」

「うん、アツ……熱い……」

右手で乳房への愛撫を続けながら左手は下腹部の下、白雪のマンコへと向かう。

既にとろとろのそこに俺は指を浅く挿入し白雪を高めていく。

浅い湯船に浸かりながら彼女の肢体を堪能し、手の空いている白雪に俺のチンコを扱く様に命令した。

「こ、ここう？キンちゃん」

「そう、そのままゆっくりと手を上下に動かすんだ」

彼女の柔らかい、白魚の様な指と手が俺のチンコをゆっくりと扱く感覚に思わず腰が浮いてしまう。

俺の愛撫に翻弄されながらも後ろ手に回した手で一生懸命に手コキをするその姿はもはや女子高生ではなく一人の女だ。

そろそろ我慢も限界になってきたのでここらで一度白雪をイカせる。

「アツ！来る！来ちゃう！スゴいのが！」

「イケツ!!イクんだ白雪!!」

「ンアアアアア!! イックウウウウウウ!!」

絶頂してぐったりした白雪を抱えて俺はベットに向かう。

セックス用の部屋に用意したキングサイズのベットに白雪を寝かせ、意識の飛びかかっている白雪のマンコについてチンコを挿入した。

「アアアアアアアッ!!」

「くうっ！締まるなあー！」

挿入の刺激で目が覚めた白雪のビクンビクンと跳ねる身体を抑えゆつくりとピストンを開始する。

処女を無くしたばかりだというのに白雪はもう喘ぎ声をあげていた。

それもそのはず、長年のオナニーによる開発と先程の風呂に混ぜていた強力な媚薬で彼女の体はすっかりと出来上がっていた。

処女特有と締まりを堪能しながら胸を口に含み愛撫による快感を与える。

滑り絡み付く膣内を俺の熱い肉棒が行き来する事で、何度も何度も絶頂する白雪。

「んウツ！アアツ！おっきい！のが、中に!!」

「ククク、イキまくってるな白雪！そんなに気持ちいいのか？」

「うん！気持ちいい！キンちゃんのが凄く!!」

フハハ、それは最高だな、普通は痛いだろうが処女膜が破れた傷は俺のチンコから分泌される回復薬の効果で塞がっていることだろう。

お陰で存分にこの身体を堪能できる。

正常位の体勢で俺に突かれ喘ぐ白雪は足を俺の腰に回し俺のチンコを奥へと誘う。

成人男性の平均より大きいこのマグナムを奥まで加え込んでくる白雪の名器に俺もそろそろ一発目が出そうだ。

「白雪！そろそろ出すぞっ！」

「うん！ちようだい、キンちゃんの、子種を！熱いのを私の中に!!」

「クウツ！出る!!」

「アツ！来た！ンアアアアアア!!イクツ!!熱いのが来たあ！」

どくどくと真つ白な精液が白雪の膣内に解き放たれ二人揃って絶頂する。

余りの気持ちよさに俺も腰が震え顔が歪む。白雪に至っては涙を流しながら快樂に溺れている。

「ハア、ハア、気持ち良かったよ白雪」

「うん、ハア、ハア、わたしもだよ、キンちゃん」

涙を流しながら俺に答えるその姿に、再度我がマグナムの撃鉄が上がった。

「きゃっ！また、大きく……」

「まだいけるよな？白雪」

「えっ……ンアツ!?キンちゃん!」

白雪を抱き抱えた俺はその身体を抱き締めて対面座位に姿勢を変える。

慌てる白雪に構わずその腰を掴み荒ぶるチンコを突き込んだ。

突然の再開に構えていなかった白雪は軽く絶頂する。抗議が来る前にその唇を塞いだ。

「ンンンンンンッ！ンンン！」

舌を絡める深いキスと極太のチンコによる強烈なピストンを受けた白雪は更に絶頂し、追い討ちにアナルへと指を入れると声にならぬ悲鳴をあげる。

その上俺の鍛え上げた胸板に乳首が擦れ全身で快樂を味わう。

俺も快樂に溺れた白雪を更にイカセ様と雁首を擦り付けるように愛液で滑る膣内を
 楽しむ。

余りの快感に白雪のマンコからボタボタと溢れてくる愛液がシートを汚していく

十分ほどそれを続けただろう、既に理性が蕩けきった白雪は貪るように此方の舌に自分の舌を絡めるキスをしながら腰を振って喘いでいる。

今は騎乗位の姿勢で抱き合いながら互いの身体を密着させセックスに没頭する。

「プハッ、ハア、ハア、白雪、また、出すぞっ！」

「ああ、キンちゃんのオチンポが、あっ！もっと、もっと、突いてえ！」

凄まじい快樂に身を委ねた俺たちは同時に達した。

「アアツ!!」

「きやああああああ!!」

もはや悲鳴のような嬌声をあげる白雪の膣内に獣の様な雄叫びをあげる俺の熱いそれを解き放つ。

「ふう、気持ち良かったよ白雪、ありがとう」

「うん、私もスゴく気持ち良かったよキンちゃん」

「ああ、愛してるよ」

「私も……」

そう言って目を閉じる白雪を抱き締めながら今度はバックの体勢に入る。

その日は膣内で4発、胸で2発、口で1発、手で1発と合計8回出した俺は気絶した白雪を抱き締めて眠りについた。

これから始まる高校生活に期待しながら。

兄の死……そして伝説へ

2008年12月某日、白雪とベットインする予定でウハウハの俺のもとに一本の電話が届いた。

『キンジ、落ち着いて聞きなさい』

「どうしたんだ？ 婆ちゃん」

たまに電話をかけてくる祖父母からであったがその声は真剣そのものだった、すわ何事かと真剣になる俺、まあ、リビングのソファには目隠しして縛った白雪を玩具責めしてるんだけどね。

『金一が殉職したの……』

「え？」

危なかつたぜ、カレンダーを確認した俺は内心で呟く、あまり正確には覚えていなかったが今日だったのか、兄さんがイ・ウーに潜り込むために社会的に死んだことになる日は。

まあ、前から任務で接触していたみたいだけどき、原作知識というものがある俺は知っていたしな。

「……葬式の日は？」

『落ち着いとるのう』

あ、爺ちゃんに変わった、電話の向こうからは婆ちゃんのすすり泣く声が聞こえてくる。

全く、俺はともかく育ててくれた爺ちゃん達には話しておけよ兄さんや。

「まあな、俺たちは武偵だ、こういうこともあるだろうと割りきってるよ。それで、誰にやられたんだ？」

『……シージャック事件に巻き込まれ、爆破され沈む船から乗員を逃がしたことにより逃げ遅れたそうじゃ』

この時点で違和感ありまくりだよな、たぶん爺ちゃんも気づいているだろう、あの兄さんが乗員を逃がして逃げ遅れる？

普通に考えて脱出した人間の数を見ただけで把握して逃がすから一人だけ残って死ぬことなど有り得ない。

それがHSS使いの兄さんなら尚更だ。

婆ちゃんはそのままで考えられなかつたんだろなあ。

とまあ、ここまで考えた時に最初の質問の答えが帰ってくる。

『葬儀は明後日じゃ、と言っても死体も上がつとらんがな』

「分かったよ……」

落ち込んだ振りをして電話を切るが、最後の一言でやっぱり爺ちゃんも死んでない事に気づいているのが分かった。

さて、この話はここで終わりとして……。

「白雪の調教を進めるか……フヒヒツ♪」

葬式の日には酷かった、何せジャックされて爆破されたクルージング・イベント会社とその時乗っていた一部の乗員共がマスコミの前で騒ぎ出したからだその上親族の俺たちまで責め始めた。

曰く『事故を未然に防げなかった無能な武偵』だと。

さすがにイラツときたので同中学出身の高校に卒業しなかった情報科Sランク卒業生、通称電子の神、田中くんに一億でその会社のスキャンダルなどの情報をばら蒔いて貰った。

原作キンジみたいに金に困っていない俺は上客なのだ!!

こうして憂さを晴らした俺は白雪の身体を楽しむ日々を送るのであった……まる!

明日から春休み、白雪が超能力研究科の合宿で明日からいないので今夜はとことん楽しむ予定だ。

終業式なので昼前に学校も終わり、クラスの連中と食べに行く、もちろん女子も連れていくので俺は白雪を誘った。

モノレール前で待ち合わせたあと数十人の大所帯で制服姿で東京の遊び場を練り歩く。

道中、白雪に惚れている車輛科の武藤が俺に絡んできたが間接技で沈めてやった。

原作と同じで一学期の時に決闘を申し込まれたが一撃で仕留めた、それ以降は何度も決闘を挑まれるという変わった展開になったが二学期の途中に仕事でパートナーを組み、007バリの死地を切り抜けてからは親友をやっている。

不知火は……普通の友達?

ハーレムに入れる予定の理子はある程度しか仲良くしていないが原作での彼女のイ

ベントは確りと回収する予定だ。

このようにまだ遭遇していない原作キャラはともかく学友の面々との付き合いは原作キンジよりは遥かに良い、白雪も俺について回るのを原作のように扱わずにむしろ見せびらかすため公認夫婦の様な扱いになっていてあそこまでヤンデいなのが助かる。今はカラオケを指して数クラスから集まったメンバーで街を歩いているのだった。

打ち上げが終わり、武偵校の寮に帰ってきた。

ソファに座る俺の前には恥ずかしげにスカートをたくしあげた白雪の姿が、その奥を覗けば微かな機械音が聞こえる。

そう、彼女は今日一日の間ずっとバイブをその膣内に収めて行動していたのだ。

黒のセクシーなランジェリーをずらし、バイブを抜いてやるととるとと愛液がこぼれ落ちてくる。

「ククク、濡れてるじゃないか」

「ハア、ハア、はい、ご主人様……」

ヒヒツ！堪りませんなあ、このように女を調教するのは。

一日中バイブに刺激されすつかり出来上がった白雪の膣内に指を入れて弄ると更に愛液が溢れ大洪水になる。

そこで俺は指を抜きながら彼女に命令を下す。

「マコに跪いて奉仕をするんだ」

俺の命令を聞くと白雪は跪いて俺のズボンを脱がす。現れたのは少し黒ずんだビツクマガナム、それを恍惚とした表情で眺めた白雪はそれに舌を這わせる。

丁寧なその奉仕はこの一年間で俺が仕込んだ賜物だろう。裏筋を下でなぞり、亀頭や雁首までも舐めた後口に含んでフェラチオを始める。

快楽を感じながら俺は足の指先を白雪の足に触れさせ、股の方へとゆつくりとあげていく、焦らすようにしてたどり着いたそこは白雪のマンコの表面、そこを指先でつつきながら彼女を弄ぶ。

懸命にフェラをしながら上目使いの彼女だが突かれる度に快楽に身を振らせ上り詰めていく。

それを見下ろしていると、突然白雪が身を話した、かと思えばその柔らかい乳房で俺の一物を挟み、パイズリフェラを開始した。

始まる前に先にいったら今夜は入れずに寸止め地獄と脅しているので必死だ。

「んじゅ、じゅるる、んちゅ、プハア……ぺちやぺちや……」

「そこだ、もつと唾え込んで、そうだ」

懸命な白雪のパイズリは至高の快樂をもたらす、故にに射精感が込み上げてきた。

そして。

「出るぞっ!!」

「んん!？」

どくどくとザーメンを彼女の口内に吐き出した、大量のそれを教えた通りに飲み込んでいく白雪。

「よし、気持ちよかったぞ、次は綺麗にするんだ」

「フフ、はあい」

フェエラでも感じるような淫乱に育てた白雪は、淫靡な表情で言葉遣いも変わり、再びチンコを唾え込んで掃除を始める。

尿道に残っている精液をじゅぼじゅぼと音をたてながら吸い上げ、舌で舐めて綺麗にする。

彼女が顔を離れたとき、そこには再び立ち上がり白雪の唾液でテラテラ光っている俺

のビックマグナムがあった。

「さて、そろそろ入れてもいいぞ、ただし自分で入れるんだ」

「ハア、ご主人様、白雪にお情けを……んん！」

座っている俺に跨がった白雪は自分でチンコを掴んで挿入していく。

すっかり俺の形を覚えたそこに俺のチンコは飲み込まれた。

「んん……ハア、ハア、入り、ました」

「よし、自分で動くんだ」

「はい」

向かい合った姿勢で俺の肩に両手を置いた白雪は腰を前後に振って快楽を得る。

その淫靡な腰使いは並みの男なら数分持たずに射精するのだろうか俺はその辺もコ

ントロールできるエロ主なのだ。

腰を振る白雪の美巨乳が目の前で揺れる。それを口に含み片方の乳首は指で摘まん

で愛撫する。

甘噛みする度に嬌声をあげる白雪の動きがだんだんと早くなる。

「んん、はあ、ンアッ……もつと、ンン！」

「ちゅばちゅば……」

「ンアッ……ご主人様、私、もう！」

絶頂する白雪の子宮口にチンコを突き立て精液を解き放つ、出している間も先端を擦り付けながら更なる快楽を引き出し白雪を染めていく。

「ふう、気持ち良かったよ。でも、まだ終わらないからな」

「ああ、ご主人様、もつとください」

「もちろんだ」

今度はバックの体勢になり、ソファの背もたれに手をついた白雪を後ろから責め立てる。

パンパンと音をたてながらまるでやかなお尻に肌をぶつけチンコを押し込む、先程の精液が愛液とともに溢れるほどのそれに白雪は声を上げる。

じつとりと汗ばんだ背中を舌で舐めると膣内の締まりがきつくなる。

もはやこの程度の刺激でも感じる白雪は正しく全身が性感帯になっていた、その背中に抱きつき、前に回した腕で大きな乳房を揉みし抱く。

更に片足を上げさせ半分振り向いた白雪の唇を奪い苛烈な責めを続ける。

「んちゅ、んむう……プハア、あつーらめ、そこはらめなお!!」

「くく、どこがダメなのか言ってみるんだ」

「そ、そこは、ンアッ!!」

クリトリスを摘まみ更に膣内の奥深く、ポルチオをガンガンとつくつくと無茶区茶な快感に負けた白雪は呂律が回っていない。

その状態で質問してもはや喘ぎ声しか帰ってこない。

本当に最高だ、既に調教は完了した、白雪は俺に抱かれる事では感じることはない、それに普段はキッチンと武偵としての仕事もこなせる、これが完璧な性奴隷の姿なのだよ！！

「アアアアアアア!!」

「もうイキツぱなしだな、白雪」

「アアアアアアア!!イキツ!!イッてるのお!!キャアアアアアアアアア!!」

一番の性感帯であるニケ所を責められている白雪はもうイキツぱなしだ、そこに更なる追い討ちをかけてやる。

「アアアアアアア!?!おし、お尻に何かガンアツ!!」

「寂しそうにヒクヒクしてたからなあ嬉しいだろう?」

「ああ!はい、嬉しいですご主人様あ!!白雪は!白雪はあ!」

「そうかそうか♪」

白雪のアナルに媚薬を塗りたくったバイブを挿入してズボズボすると更に膣内が締めまり凄まじい快感が走る。

「うっ！出るぞっ!!」

「アアアアアアンアツ!!キヤアアアアアアアア!!イツクウウウウウ!!」

声よ枯れると言わんばかりの絶叫に答えるように俺は中に出す。

凄まじい締めりの膣内は更なるザーメンの発射により真っ白に染まっていることだろう。

お互い痙攣しながら絶頂の波が過ぎると再び交わる。

こんどは白雪の腰が抜けてしまったのでベットにうつりうつ伏せに寝かせた白雪に覆い被さるようにして挿入した。

気持ちよすぎるのだらう、シーツを握りしめて快楽に耐えている。

それを見ると更に嗜虐心が湧いてきた、マンコをガンガンとつきながら尻をつかみ親指でアナルをグリグリと弄るとついに白雪の理性が折れた。

「ああ！もっ、う！イキ、たく、ないい！」

「ふふふ、虚ろな表情も良いなあ」

あまりの快楽に耐えかねた白雪はもうやめてくれと息も絶え絶えに訴えるがやめるつもりなどない。

「ホラッ！また出るぞ！」

「ああ！くる！来ちやうよお！」

「フーン！」

「キヤアアアアアアア!!らめえ、そこは、ンアツ!!らめええええええ!!」

ピンっと身体を弓なりにそらしていったら今度こそ白雪は気絶した。

何時もより激しくしたからだろうが、4回で気絶するとは……。

飛び散った精液と愛液と汗にまみれた己の女の姿をみると更に嗜虐心が湧き起こり、その身体を抱えて風呂場へと向かう。

今度は寸止め地獄に落として徹底的にイカせてやる。

「ンー……あれ? キンちゃん、私、アツ! キンちゃん!」

「ん? 起きたか、まだまだイカせてやるからな」

あのあと風呂場で再び挿入した所で白雪は目を覚ました。そのあとも今度は寸止め地獄に落として責め続けていると最後はおちんぽを連呼しながらイキ狂っていた。

再び気絶した白雪を運んだ俺は気絶した彼女にずっとチンコを突き刺し責めていたがやっと起きたみたいだ。

その後もイキ狂う白雪を存分に堪能した俺はその日の発射数は10回を越えたのだった。

強襲科～スパキンの一日～

ム！目が覚めた……。

体を起こして隣を見ればそこには既に白雪の姿は無く、もう合宿に向かったのが分かった。

昨日はあんなに激しくしたというのに、体力ついたよな白雪も、何て考えながら顔を洗いうがいを済ませキツチンへ。

ちやんとご飯は作って行ってくれたようだ、流石は良妻賢母の卵。

ちやつちやと食事を済ませ時間を確認すれば12時を回った頃だ、丁度良いので強襲科の午後練に参加するか。

ちなみに午後練とは午後の練習ではなく午後の訓練という意味で使うのだが武偵高らしいだろ？

チャリに乗っていざ出陣！

はい、やって来ました強襲科の訓練所！

中に入れば一年の連中が挨拶をしてくる、ここ武偵高では普通の学校の比ではないくらい上下関係に厳しい、まあ、戦闘者らしい考えで上司の命令は絶対だという軍での考え方を元に教育されるのでこうなるのは必然とも言える。

球拾いならぬ葉莢拾いの一年が後ろに控える中、空いていた射撃レーンに立ちベレッタを構える。

まずは狙うのは肩や腕などの間接部分、ここら辺は不殺主義の日本の武偵は狙えるように教育されるので従う。

ヨーロッパの武偵は相手が殺人犯くらいになると迷わず殺すのだが。

おっと、全弾命中か、フッフ、やはりこの体のスペックは素晴らしい、思い通りに動くのだよ、それに俺の射撃を見ていた奴等が尊敬の眼差しで俺を見ているのが心地良いぜ。

「あ、あのー！」

「ん？」

内心で高笑いを上げていた俺に背後から声がかかった。後ろを向くとそこには金髪

をポニーテールにした女子生徒の姿が、どこかで見たことあるなあと思えば……おう、何てこった、原作キャラの火野ライカちゃんジャマイカ。

中学を卒業したばかりであろうに、高校の訓練に来ているとは……熱心なんだね。

「と、遠山キンジさんですよね？」

「ああ、そうだが、君は？」

「失礼しました！アタシ、火野ライカつて言います。それで、遠山先輩に頼みがあるんですけど」

何と、俺に頼みとな。それは面白い、美少女の頼みは断れないんだよ俺。

「……まずは話を聞こうか、そのベンチで良いか？」

「はいー」

話を聞くに彼女は強襲科二年最強の男Sランク武偵、スーパーキンジこと俺の戦妹になりたいらしい。

嬉しい申し出なんだがなあ、残念なことに俺には既に風魔と言う性妹、もとい戦妹がいるんだと教えた。

残念がつっていたがそこでアメを与える、訓練になら付き合つてやると言うと言とうと物凄く食いついてきた。

そのあとは射撃を教えたり格闘訓練に付き合ったりしてやりお茶に誘ったらOKを貰えた……彼女はこれから自分がどうなるか、知らないのだろう、フヒヒツ！

「こ、ここうですか？」

「そうだ、歯は立てるなよ？ 丁寧に舐めるんだ」

「はい」

ククク、火野ライカ、彼女は今俺の前に跪いてチンコを舐めている。

あのあとお茶を飲み喫茶店へ向かった俺は、巧みな話術を駆使して彼女の緊張を解いた瞬間に暗示をかけて家に連れ込んだ、今は前戯の時間だ。

俺の目の前にいる彼女は暗示によって俺に対する好意を刷り込んだ、かなり強烈なのをお見舞いしたので恐らく今自分が何をやっているのか分かってないだろうがな。

言われた通りに丁寧なフェラチオをするライカ、金髪の美少女が熱っぽい上目遣いでこちらを見ている。

生来強気なのであろう彼女は中学の時に犯した菊代と性格が似ている、しかし体つきはこちらの方が良い、Dは有るだろう胸に強襲科の訓練で引き締まった体つきは今から味わうのかと思うとチンコが滾ってしかたねえぜ！

「んんう……ん！んふう」

「そうだ、その調子だよ、だいぶ上手くなったな」

そう言つて頭を撫でると目を細めて喜ぶ。

最初は拙いフェエラだったが、暫くするとコツをつかんだのか調子が出てきた。

やはり彼女はエロの素質があるのだろう、流石は俺の目だ、狂いなど無いのだよ！

「よし、もう良いぞ」

「プハア……もう良いんですか？」

一旦フェエラを止めると彼女は教えていないのにチンコを掴み、鈴口の部分を親指でくりくりしながら質問してきた。

男の感じるところを無意識に探り当てるとは、本当に素質がある。

「次はこつちだ」

「あつ……」

彼女を抱き寄せると切なそうな声をあげる、そのまま愛撫にはいる俺、まずは服に手を入れ形の良い胸を揉む、時折乳首を摘み適度に快感を与えて解していく。

背中を俺に預けてか細い喘ぎ声をあげるその姿は処女とは思えぬほど淫靡で艶やかだ。

首筋にキスを落とし胸への愛撫はそのままに次はマンコを弄ると反応が激しくなった。

「アッ！」

「どうしたんだ？急に声をあげて」

「あつ、その、私……」

こう言う初心な反応がエロチックなんだよね。

喘ぐライカに気を良くした俺は69の姿勢に移行する。

ライカの綺麗な処女らしいピツタリと閉じたピンクのマンコに音をたてながら吸いつく。

「じゅるる、ジュバ、ジュルルル！」

「ンン！クアアッ！」

「フウ、ライカ、フェラが止まってるじゃないか」

「ハア、ハア、すいません、でも、気持ちよくて……」

「なら仕方ないなあ……ジュルルル！」

「ンンンンン！」

お仕置きにクリトリスに吸い付いて皮を向きながら責め立てるとライカは絶頂する。

ようやく媚薬が聞いてきたようだ、先程より格段に反応のよくなったライカのマンコを更に責め立ててイカせまくる。

「ジュルルル！ジュブブブ！！」

「アッ！アアア！ンクウ！」

「ジュルルル！ふむう、コリコリ」

「アッ！アアア！ンアアアアア！」

皮を向き終わったクリトリスを甘噛すると潮を吹いて絶頂する、先程からフェラの手が止まっているが仕方ないだろうなあ、気持ちよくてそれどころではないのだ。

「ハア、ハア、せんばあい……」

「立てるか？次は壁に手をつけて尻を突き出すんだ。そう、それだ」

ライカの体を起こして立ちバツクをするときの体勢をとらせる、形の良い尻を掴み愛液が溢れ変えるマンコ、出はなくその少し下の股にチンコを突き込んだ。

垂れてくる愛液がローション代わりになり、柔らかい股の間に挟まれたチンコを滑らせる。

「おお、柔らかい」

「んっ！ふう、ふう、熱い、それにあそこが擦れて……んん！」

「あそこじゃないぞライカ、おマンコって呼ぶんだ、良いな？」

「ハア、ハア、おまんこ？」

「そうだよ」

潤んだ目のライカはこちらに振り返りながら教えた言葉を反復する。

股を滑るチンコがマンコに擦れ、時折クリトリスに当たれば嬌声をあげて更に愛液を垂れ流す。

それを数分続けた所でライカがイッた。

絶頂のあと地面にへたり込んだライカをベッドに連れていく。

仰向けに寝かせたライカの股を開かせクンニでマンコを舐め回し更に一度イカせた。

準備は万端、期待に満ちたライカの表情を見ながらマンコに龟头を擦り付けチンコを濡らす。

「入れるぞ、良いな？」

「はい、先輩来て……」

ゆっくりと沈めていきついに処女膜にたどり着く、そこでもう一度確認に目を合わせるとコクリと頷いたので一気に破った。

「んあああああっ!!」

入れられた瞬間絶叫するライカだがそれは痛みではなく快樂によるものだ、入れた瞬

間に絶頂を確認しピストンを開始する。

「ぱちゅぱちゅと音を立て腰をふる俺に足を絡めたライカは快楽にヨガリ狂っている。

「なん、でえ！気持ち良いのお！私……処女なのにい！！」

「それはお前が淫乱だからだよ！」

「んん！私、が、淫乱？……」

「そうだ？じゃないと入れた瞬間にイク分けなだらう？」

「淫乱？淫乱……アハッ！」

確認するように呟いたライカはついに快楽に溺れた、笑顔になったかと思えば、俺に合わせて腰を振りだした。

ついにセックスを受け入れたライカは何度も絶頂を繰り返しイク続ける。

ヌメル膣内が一突きごとにキュンと締められ俺のチンコを刺激する。

強襲科の生徒らしく締めまりが良いライカの膣内は絶世の名器だ。

「出すぞ！ライカ！！」

「来て、来て！先輩！！」

「うおおお！」

「ああ！ああっ！イックううううう！ダメえイクのお！！」

射精中すらも絶頂を繰り返しイク続けるライカはチンコを抜いたとたんに激しく潮

を吹きあげた。

次は、体を跳ねて痙攣するライカをうつ伏せにして組伏せるような形でチンコを挿入した。

「アアアアアア!! まって、先輩!! イッた! 私! 今いっばかりなの!!」

「ならもつとイカせてやるよ」

「アアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

身体中をスパークのごとく快感が走っているライカはシーツを握りしめて快楽に耐えている。

「おマンコが! 溶ける! 先輩のが! 熱くてっ!」

「くううううう!」

互いに蕩けるような快感が腰を走り絶頂に近づく。

一突きごとに愛液を飛ばすライカのマンコを激しく行き来する俺のチンコを締め上げてくる膣内を雁首でえぐり子宮口をコンコンとノックする。

その都度絶頂を繰り返したライカはもう声も出ない。

「ああ! 腰が! 溶けるのお! 気持ち良いのお!」

「くく、そうか、気持ち良いか、ライカ!」

「もっろ! もっろっいいえ!!」

絶頂に耐えかねたライカの理性が飛び、獣のごときセックスが始まる。

もっともっとと呂律の回っていない言葉を連呼してイキ狂うライカに更なる快楽を与えんとアナルをグリグリと指で刺激すると、膣内の締めまりがきつくなり、それを広げようと更に強烈なピストンを続ける。

既に三回ほど射精が続いているがまだまだいける、この極上の名器を俺の形が忘れられなくなるまで蹂躪するのだ。

バックで出したあとは、ライカを抱き抱え所謂駅弁スタイルで最奥を突きまくる。

元々子宮口を叩けるサイズのチンコが自重も加わることによつて更に深く刺さりあまりの快感に頭を振つてライカはイキ続ける。

「ふう！最後だ、出すぞ！」

「ああ！あああつ！アアアアアアアアアアアアッ！イク！らめえ、イクう、イツテルノオ！」

「ああ！出る！」

「んあああああつ！らめえええええええ！！イックウウウウウウ！！」

俺の首に腕を回してしがみつくライカの絶叫を聞きながら四度目の中出しを終える。

俺の射精が終わつてもしばらく痙攣を繰り返したライカは最後には気絶した。

「フハア！最高のマンコだったぜ、ライカ。お前もハーレムに入れてやるよ！フフフ！」

「んんっ！……」

「気絶してんなあ……風呂場に連れてくか」

風呂場につれていったあとも当然のごとく気絶したライカの肢体を堪能するのであった。

「アアンツッ！奥にあたるう！」

「良いゾツライカ！腰使いが上手くなったな！」

「先輩のおかげです！もつと突いてください！」

ククク、昨夜から一睡もせずイカせまくっているお陰でライカに忠誠心を植え付けることができた、これからは白雪と一緒に可愛がつてやらんといかなあ。

「イク！イクます！！」

「そろそろ出すぞ！」

「んあああああつ！イクううううううう！！」

「フフフ、ヨガリ来るってんなあ」

「あ……ああつ……」

「また気絶したか、流石に限界だな」

先程から一度イク度に気絶するので何度も快感で起こさなければならぬ、だけでも限界みたいだし今回はここまでだな。

そう考えた俺はチンコが刺さったまま俺の上で寝ているライカを抱き締めて深い眠りにつくのであった。

翌日、俺よりあとに起きたライカはセックスの事を思い出したのか顔を赤らめてシートにくるまっていた。

そんな彼女に電話番号を与えてシャワーを貸してやり家に返した。

恐らく彼女は呼ばなくてもここに来るだろう……。

あれだけイカされて一晩のうちに全身を開発されたのだから。

事実、春休みの間は何度もここに来てくれたので可愛かった。

自分からしたいとは言わない彼女だが、少しでもイカせてやらないとおねだりするの
で焦らして犯すのがライカの攻略法なのだ!!

ただの主人公ではない！オリ主だ！

「ああっ！そこは！ダメえ！先輩!!」

「ククク、何がダメなんだ？入れるのがダメなのか？それとも気持ちよくてダメなのか？」

「それっ！わ！んあっ！」

はい、どうも皆さん、ミスターヤリチンことスーパーキンジです。

今俺はね、春休みなんだけど、毎日のようにやって来るライカをやっちゃってるんだ

♪

まあ、いつもいつも自分から来るから構わないよね。

そんなライカだが、最初はいつもこんな感じで素直になれないけど、イカせまくってるとその内自分から腰を振りだすから可愛いものだよ。

今も意地悪な質問してるけど本当は感じすぎてダメなんだろうね、この膣の締めまりを
知ればわかると思うよ。

「そらそら！何がダメなんだ？」

「おちんぼが!気持ちよくて!ダメなのお!」

「そうかそうか、ならもつとついてあげるよ」

「んあああああつ!らめえ!」

やればやるほど堕ちるのが早くなってきたな、全く、高校生になってもいない娘を犯すのは最高だね!

エロ主オーラを撒き散らしながら俺は壁に手をつけて尻を突き出すライカを喘がせる。

パンパンと肌と肌のぶつかり合う音が響き腰を掴まれ逃げることもできないライカは愛液を撒き散らしチンコを膣で締め付ける。

白雪もそうだったがライカもすごい、膣の中は俺の肉棒を包み込んで放さずしかもヒダの数が多く絡み付いてくる。

俗に言うミミズ千匹の持ち主なのだ。

「らめえ!イクううううううう!」

「まだまだ続けるぞ!」

「んあああああつ!ああつ!アアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

まったくもって愉快だ、この若い娘の体を俺のものにして好きに扱えるこの環境は堪らないね、毎日のようにやりまくっているお陰で絶倫チンコも満足さ。

まだ俺は三回しか射精してないというのに既にライカは二桁は絶頂しているだろう。さっきの絶頂で床に崩れ落ちたライカは頭を床につき腰を突き込んだ形になっているため俺も膝をつきピストンを激しく、膣内を擦りあげるように刺激し更なる快楽を引き出す。

まだまだ夜は長いのだ……今昼間だけど。

「んんんん！イクう！イックウウウウウウ！！！」

「やれやれ、まだまだ終わらんよ！」

「んあああああつ！ああつ！アヒイ！」

ここうして翌朝まで俺たちは盛るのであった。

「ンジュルルル！ジュルルル、じゆるる。はあ、ぺちやぺちや、んはあ……」

「なあライカ、お前も明日から高校生だが、知り合いに可愛い娘がいたら紹介するんだぞ？」

「ハア、ハア、はい、先輩……」

あーもう、すっかり出来上がってるな、今もフェラをしながら空いた手で自分のマンコを弄っている。

たったの一週間でここまで調教が進むとはスパキンの絶倫チンコは無敵だな、もはやニコポナデポを越える無敵の武器『チンポ』の誕生だな。

「それにもし他の男にちよつかいをかけられたら俺に直ぐに教えろ、先輩だろうとシバくから」

「んむっ、んんっ！……分かり、ました」

「うむー」

これは白雪にもいってあるのだが己の女をナンパする男にエロ主は容赦はしないのだ、例え三年だろうがジェームズ・ボンドだろうがそれは変わらない。

エロ主は女のためになら最強になれる真の主人公なのだから。

「そろそろ出るぞ」

「んんんん！……プハア」

「きちんと飲み込めよ」

命令通りに飲み込むライカの喉が動くのが見える。

まあ、飲みやすいように美味しく感じる精液なだけだね。

エロ口主はエロに関しては無敵で欠点など無い、精液だろうが美味しく体内で調整できるのだよ。

さてと……。

そろそろライカも限界だろう、お預けをしてから二時間、5回精液を飲ませたがその間一度もイケずに愛撫のみだったのだそろそろご褒美を与えねば。

「よし、ちゃんと飲めた御褒美だ、何がほしい？」

「あつ……」

質問を聞いたライカの視線が俺の肉棒に注がれる。

「どうした？言ってみろ」

「お、おちんぼです……」

「ん？なんだって？」

「先輩の！おちんぼがおマンコに欲しいんです!!」

クハハ！よく言えました！

「じゃあ、自分で入れて動くんだ」

「はい……んんん！ああつ！来たあ！」

大人しくベッドに腰かける俺の膝の上に跨がり自分で挿入する。

チンコが沈んだとたん身を震わせたかと思うと腰を振り始め嬌声をあげてよがり狂う。

もう3日はこうやってセックス漬けになっているため理性の切れたライカは最後には気絶したので寮の自室まで送り届けることになった。

明日から原作が始まる、武偵殺しの爆弾にはわざと引っ掛かってやるがアリアはどうしようかな……俺実は貧乳に興味が……。

まあ、見て決めるか、もしやる気が起きないなら原作キンジと同じ行動で上手く手綱をとって原作キャラの美味しいところだけを持っていこう。

俺はそんな最低なことを考えながら明日に備えて寝た。

「んむっ……ジュルルル!じゆるり!ハア……んん!」

「ん?」

「ぺちやぺちや……あ、おはようございます、キンちゃん」

「おお、白雪か、合宿から帰ってきたのか？」

朝、チンコに来る刺激で目が覚めると白雪が恒例の朝フェラで起こしてくれていた。ベッドの横にある時計を見ると朝六時半、一発抜いて貰って風呂に入って飯を食べればちょうど良い時間だろう。

一瞬でそこまで考えた俺は適当な質問を試してみる。

「うん、だからいつもみたいに起こしに来たの。はむっジユルルル！」

「そうか、偉いぞ」

質問に答える間も手で刺激するのを忘れない白雪は綺麗な髪をかき上げながらフェラを再開する。

まあ、原作の対応は忘れて、今はフェラを楽しみますか。

朝から一発抜いてスッキリした俺は、風呂でさっぱりした後、白雪の愛妻御飯をご馳走になり、メールチェックが有るからと彼女を先に登校させた。

今はチャリジャック対策にどうするか考え中だ……結論、原作通りに行くことにした、既にアリアに関しては調べはついている、というか三学期に転校生の噂は聞いたしな、原作キンジが知らなかったのはたぶんネクラで人付き合いが無かったからだろう。そう考えをまとめた俺は登校時間になるまで銃の点検を始めるのだった。

原作の彼はこう言った——空から女の子が降ってくると思うか?と。

一言言うならあれは飛んできただろうが!

そう考えるのも仕方ないと思う。

だって、今、俺の後ろには短機関銃の代表格たるUZIが装備されたセグウェイ、前からはパラシュートに逆さまに引っ掛かってこちらに銃を向けるチビが飛んでくる。

まあ、焦ってそんなのあり得ねえと現実逃避もしたくなると思うものだ。

何て考えてる俺に声がかかる。

『そのチャリには爆弾が「そのバカッ! さっさと頭下げなさいよ!」ます』

可哀想なセグウェイ、唯一の台詞を潰されるとは。

俺はキンジとは違い大人しく頭を下げる。

直後に銃声が2発、更に爆音、頭をあげると銃をしまったチビ——アリアが飛んできた。

「全力でこぎなさい！」

「ヘーイ！」

ノリノリの俺はチャリを全力でこぐ、何故かって？パラグライダーのアリアどのが俺をすれ違い様にかっさらうからさ、そして全力で走るチャリは勢いそのままに離れていくから爆破の距離が遠くなるって寸法よ！

頭のなかで思い描いた作戦が決まりチャリからは離れられたのだが。

ドガアアアアアッ！

「キヤア！」

「ワー（棒読み）」

やっぱり爆風からはにげられなかったんだ。

……ハ!危ねえ、危ねえ、意識が数秒間止まっていたぜ。

体を起こした俺は状況を確認する。

ここは体育倉庫の中だな、入り口が開いているが、爆風でストライクって分けか。

足下の跳び箱の中には気絶してブラが丸見えのエリアが、乱れた服は正しておく。

しかも彼女は貧乳だな、仕方ない、時間はかかるが成長薬でも作るか。

そんなことを考えているとおつてのセグウェイが……十台来た、原作より多いのはまあ、俺と比べるのは可哀想だな。

「おい、大丈夫か?」

「んん?あれ、ここは?」

「さっきの爆撃で飛ばされたから体育倉庫に隠れた。ここまでは良いな?」

「え、ええ」

「んで、追つての、さっきと同じタイプのセグウェイが来たから今から片付けないといかん、OK?」

「……上等じゃない、アンタ、ポジションは?」

「アサルト、一応フロント(前衛)な」

「そう、んじやとりあえず弾くわよ」

「ああ」

セクハラしてないからかな原作より落ち着いてるアリアは以外と対応がらくだ。

この調子で仕事仲間の関係で原作に絡もう。

ランクは言わないのが吉だな。

とりあえずベレッタを二丁抜いて構える。

「へえ、アンタも二丁なんだ？」

「自分、器用ですから」

俺の下らないジョークがツボに入ったのかクスリと笑いアリアもコルトガバメントを抜く、大口徑の拳銃だ。

よくあんな成りで振り回せるもんだと感心していると。

ガガガガガガンッ！

「おーおー、派手にやるなあ相手も」

「そうね、まずはアタシが撃って出るわ、動きが止まったらまかせられるかしら？」

「当然」

恐らく自分の銃より弾数の多い俺のベレッタを見て考えた作戦は力任せだがSランク二人と考えると納得がいく。

作戦も決まり、タイミングを見てアリアはガバメントの45ACP弾を連射する。

殆どが当たりセグウェイの銃声が止んだ瞬間、頭を出した俺は一瞬で狙いをつけてベレッタから9mmを連射、全弾がUIZの銃口に吸い込まれていき……。

ズガガガガッ!

10台全て破壊完了、どや顔で銃をしまう俺の横にいるアリアは顔をあんぐりしている。

まあ、当然だな、銃弾がスローで見える遠山の変態とは違うからビックリするのは当たり前だ。

「あ、アンタ、今のは……」

「じゃあ、面倒も終わったし俺は行くよ。またな!」

「あーちょー!」

三十六計逃げるに如かず。

アリアに強烈なインパクトを植えつけることに成功した俺は隼の如きスピードでその場を去った。

(ああ、終わった終わった)

爺臭い気分になったがイベントをひとつ越えて安心した俺はがらがらと音を立て教室に入る、新クラスは二年A組、ここも原作と変わらない。

「おう！キンジじゃねえか！久しぶりだな」

「いや、春休み前に打ち上げ行ったぞ」

「はは、遠山くんのせいで武藤くんは延びていたけどね」

「おお、不知火、元氣そうで何よりだ」

とまあ原作キャラで俺とも友人をやっている車輛科(ロジ)の武藤剛氣と俺と同じ強襲科の不知火亮だ。

武藤は以前説明した007事件で、不知火は時々依頼で組んだこともある。(あと、どっちもAランクだ。)

平たく言えば戦友で親友だ。

そんな奴等と話していると後ろから声がかかった。

「おー！キーくん!!おっひさー」

「……ああ、久しぶりだな、理子」

「反応薄っ!？」

朝からうるさいのはハーレムに入れる予定の峰理子だ、彼女は探偵科(インケスタ)のAランクで朝の爆弾の犯人、たぶんばれてるとは思っていないだろうから言わないけど。今回の事件を通して原作なら三巻の時期に攻略してやりまくる予定だぜ!

「ぶーぶー! 反応薄いよキー君!」

「いや、朝から事件に巻き込まれて疲れてんだよ」

「「じけん?」」

「……演技うまいな。」

「ああ、チャリに爆弾仕掛けられてな、変なちっこいのと手を組んで切り抜けたけど」

「それは……」

「災難だったなあ」

「よく生きてたねえキー君!」

三者三様の反応に苦笑いするが理子め、いつか必ずアへ顔ダブルピースの刑だ!

「はーい、皆さん席についてくださいねえ」

「あ、ゆっちーだ」

「高天原先生な?」

「席つくか」

「そうだね」

他にも立っていた新クラスのメンバーも続々と席につく。

その後は新クラスのホームルーム（以後HR）が始まり、進行していく。

そして自己紹介の前にアリア登場、原作みたいに隣に座りたいとか騒がれるとたまらんで気配を殺し潜んでいたらキョロキョロしていたが諦めて指定された席に座っていた。

まあ、自己紹介の時に見つかって騒がれそうになったから暗示で一時的に黙らせて事なきを得た。

そして昼休み、ちょっと話があると人が少なくなった時に誘われたので大人しくついていくと。

「アンタ、パートナーはいる?」

「いや、今のところは」

「そう、なら頼みがあるの」

ほう、原作のごとく偉そうな態度で来るのかと思えばちゃんと相手をしてやればある程度の礼儀は弁えているのか。

「解決に協力してほしい事件があるの……これを見なさい」

「……………ふむ」

渡されたのはいきなり彼女の母親の資料、どうやら本格的に協力してほしいみたいだな。

「なるほど、お前の母親か、この懲役864年というのを見るに濡れ衣でも着せられたか？」

「スゴいわね……一目でそこまで分かるなんて」

「まあ、この事件の一貫性のなさを見るとなあ……相手はどここの組織だ？」

原作知識使いまくった推理で少しでも信頼を得ておく、その方が後々やりやすい。

「アタシの見込んだ通りだったわ……やっぱリアンタなら……」

「ん？」

「組織について説明する前にさっきの頼みを言っても良いかしら」

「ふむ……良いだろう」

OKを出すと目を瞑って深呼吸した彼女は言った。

「私のパートナーになってママを救うのを手伝ってほしいの」

じつとこちらを見て真剣な表情でそう言うアリア。

まあ、及第点だな。原作みたいな態度で来たら洗脳して利用するつもりだったのだが。

「良いだろう、面白そうだ」

「!じゃあ!」

「おっと、その組織の事を聞かねえとな、喜ぶのはまた今度で」

「あつ、わかったわ」

原作知識のお凧いも兼ねて今の彼女の情報をもらう。

今朝の爆弾魔、武偵殺しの事や彼女の母親に濡れ衣を着せている組織、イ・ウーの事、他にもこれから戦う奴等や原作には出ていない名前もいくつか。

これで原作に絡むのは確定した。

さあイ・ウーよ俺に挑むが良い!フツハハハハ!!

こうして俺の一大スペクタクルアドベンチャー風の物語が始まる!

バトルオブエロティック

「んん！んんん！んんんっ！」

「……か？……がええんかあ？」

ども、悪代官風スパキンです。

現在俺は白雪をM字開脚で椅子に縛っています。

明日から恐山に合宿らしい白雪、正直またかよと思うが仕方ないので今夜はタップリかわいがるよていす。

現在は目隠し&ボールギャグで視界と声を奪った白雪を媚薬につけた筆で焦らして弄んでいるところだ。

筆で隅々まで媚薬をつける度に体を跳ねる白雪、ギンギシとなる椅子がその証拠だ。

「んん！んんん！んんんんんんんっ！」

「お、イキそうだなあ。じゃあ、ストップと」

「ん!？」

くくく、焦ってるなあ。まあ、感度を高めるだけ高めてるのに決していかせないから

な、感じすぎてどうしようもないのだろう。

ライカもそうだがやはり快樂に人間は弱い、こんなことされた後にイクのはさぞや氣持ちイイことだろう。

「さて、今はずしてやるよ」

「ハア！ハア、ハア……お願ひしますキンちゃん、イカせてくださいい!!」

「なら頼み方があるだろう？ほら、おしえたじやないか」

「あつ……ご、ご主人様のおちんぽを白雪の嫌らしいあそこに下さいい！」

「あそこつてどこかなあ？」

「そ、それは……お、おま……」

「ん？」

「おまんつ！アアアアア！」

白雪が言い終わる前にアナルに挿入する。沈陽もしてスキルで腸をコーティングしてるから全く汚くない。

今までは媚薬を塗ったパイプで開発してきたが……くくく、凄まじい締め付けだな、それに白雪もしっかりと感じている。

「んんっ！んあああつ！」

「ほら、声が大きいぞったく」

「んんっ!？」

再びボールギャグで口を塞ぎ声を出せなくした、今日は結界を張ってないのだ、まあこのためにやってるんだが。

「んん！んんんん！」

「ああ、マンコが寂しいんだな、確かにひくひくしてるからな」

「んんんんんんんんんんんん！」

愛液をだらだら垂らしているそこに指を入れ、手マンを開始すると媚薬のせいで過剰分泌されている愛液が飛び散る。

更に、Gスポットを指先で刺激すると潮を吹いた。

イッている最中もアナルを俺の肉棒に挟られもはやくぐもった悲鳴しか出せない白雪は、ピュツと断続的に潮を吹いてイキまくっている。

「————んんんんんんんんんんんん！」

「締まるなあ、それにまたイッてるよ」

再び盛大に潮を吹いた白雪が脱水症状にならないか心配だが……まあ大丈夫だろう。気にせず到手マンとアナルセックスを続ける。

ここを使うときは緩くならないようにたまにしか使わないようにするのがポイント

なんだ。

「んんっ！んんっ！んんんっ！」

「また潮吹いたな」

「プハア、ハア、ハア、も、もう無理です、イキ過ぎて……も、もう」

再びボールギャグをとると快感のあまり腰の引けた白雪が弱音をはく、だがここで終わってはエロ主とは言えない。

「じゃあ、もつとイキ狂え」

「そんな！んっ！んんんっ！」

「こっちにはバイブを入れてやろう」

「んんんんんんんんんんッ！んんんんんんんんんんッ！んんんんんんんんんんッ！」

手マンを止めて今までアナルの拡張に使っていたバイブに強力媚薬を塗りたくってマンコに刺す。

悲鳴をあげる白雪にアナルとマンコをそれぞれ交互に責めることで休む間を与えない。

更に縄で縛られたことよって強調された胸の先端を口に含み反対側を指でつまむ。

全身の性感帯を同時に責められた白雪は……ありや、気絶してるよ。

それでも締まりが緩まないアナルやマンコは優秀だな。

まあ、明日から合宿らしいからそろそろ中にだして終わるか。そう考えて俺はラストスパートにはいった。

翌日、放課後の強襲科で射撃レーンを使っているとき、覚えのある気配が近づいてくるのに気づいた。

「よお、アリアか」

「アンタ、やるわね」

「まあな」

全弾命中の俺の腕前に満足した様子のアリア、何やら用事の様だから一旦切り上げてベンチに向かう。

「で？ 用事は？」

「話が早くて助かるわ。武偵殺しとやりあう前に少し確認したいことがあるの、だから任務を受けない？」

「まあ、構わんよ、俺も簡単な連携とか確認したいし」

「ん、わかったわ、じゃあ、話が決まったら連絡するわね」

「うーい」

離れていくアリアを見送った俺は再び射撃を始める。

アリアには悪いが事件は突然やって来る。それもバスジャック何だが……まあ怪我はさせないようにしてあげよう。

ちなみにゲーセンに行く気はない、レオポンとか要らねえし。

おっ、全弾命中♪

またまた翌日、原作通りとはいわずにバスにきちんと乗り込んだ俺はバスジャックに巻き込まれた、まあ、わざと巻き込まれたのだが。

おっ、電話きた。

『キンジ！今どこ!?!』

「絶賛バスジャックにあってるよ」

『何ですって!』

「まあいいじゃねえか、この事件で動きを見せてやんよ」

『あんた、落ち着いてるわね』

「まあ、これだけ周りが騒ぐとな」

『わかったわ、アタシは集めたメンバーですぐに向かうから無茶はダメよ!』

「OK、程ほどに暴れるよ」

武偵殺しの放った無人セグウェイならぬ無人スポーツカーを確認した俺はベレッタを抜きながら電話を切る。

「武藤! 運転変わってやれ! ほらっ!」

「キンジ? おわっ! これは、防弾メットじゃねえか!」

「話は後だ、運転手がグロッキーなってるだろ」

「あ、ああ、わかった。お前は?」

「追っ手をぶっ潰してくるよ!」

屋根に上った俺はベレッタを構え数台のマシガン付きのスポーツカーと向き合う、まだ射撃してこないが……。

とにかく潰す!

「キンジイイイ！」

ダンツッ！

「遅かったな」

「アンタ、無茶すんなって言ったでしょ！何制服だけで屋根にでてんのよ！」

「まあ落ち着け、撃ってきたぞ」

「てっ！キヤア！」

ガガガガガガガガッ！

ヘリから飛び降りて、到着するなり喚きだしたアリアの頭を抑え屋根にうつ伏せになつて弾丸の雨を躲す。

「いいか、暫く戦つて分かったことがある、落ち着いて聞けよ！」

「えっ、ええ」

「あのサブマシンガン、射撃に一定の感覚がある。恐らくマガジンリロードの間だろうが……分かるな？」

「なるほどね、その際に潰すのね？」

「そうだ、それが終わつたら爆弾の位置を特定する。それで、連れてきたメンバーは誰だ？」

「車輛科のBランクの娘にあのへりの操縦を、あと、レキを保険につけてるわ」

「なら話は早い、爆弾の取り外しはレキに任せる」

「あの娘は狙撃主よ？」

「考えれば分かることだ、武偵殺しは用意周到、爆弾もバスの下の、手が届かない所に仕掛けてあるはずだ、そこでだ。レキの狙撃能力なら爆弾の固定具だけを狙える。それで、レインボーブリッジに差し掛かった辺りで狙撃させれば終わりだよ」

「……わかったわ」

よし、これで不用意な動きはしないはずだ。

さっさと終わらせんとな！

そこで、銃弾が止んだ。

「今だー！」

あれから一時間、俺の思惑通りに作戦は成功した。

負傷者もゼロで、最初から俺がマシンガンカーの相手をしていたためバスの損害もゼロ。

武偵高にたどり着いたバスから降りた生徒たちは皆、俺とアリアに感謝の言葉をかけて去っていく。

アリアも面映ゆそうにも感謝を受けているのを見るとうまく言ったものだと感心する俺。

これでアリアが帰ることもなく、ハイジャックも起きない。

理子、武偵殺しがどう動くか分からないが……。

どうにかなるさ！

そう思っていた時期が俺にも有りました。

「アンタが犯人だったのね！理子！」

「クフフ、そう言うこと、キー君も驚いてるねえ」

今俺たちはハイジャックされた飛行機のなかにいる。

原作と違うのはクラブでの誘惑の件が消え、アリアに直接電話がかかった。機械で声を変えてあった電話の内容は、武偵殺し直々の招待。

ハイジャックを起こすとアリアに電話を掛け俺たちを誘い込んだのだ。

「さて、俺は今頭に来ているんだ、理子」

「あれえ？何かやったかな？」

「じゃあ、言つてやるよ。峰・理子・リュパン4世」

「アア？」

彼女の大嫌いな4世と呼び注意を引く、ここからはいざというときの芝居の始まりだ。

「お前、どこでそれを……」

「知り合いに引きこもりの凄腕がいてな、お前の行動を洗ったら不自然だったもんでな」

「ちよつとキンジ！リュパン4世つてどう言うことよ」

「そのままの意味だ、こいつはリュパンの曾孫で、因縁のあるホームズの曾孫のお前に私闘を掛けに来たんだよ！」

バーンという効果音を出しながら理子に向かって指を指す。

二人とも驚愕に顔を染めているが、これは原作知識を使ったハツタリだ、理子にイチ

イチ説明させるのが面倒だったんだが。

そのあともシージャックの犯人はお前だとか、兄さんの仇！とか、自己暗示でそれっぽさを出した芝居を打った後、戦闘開始、アリアとの協力プレイでギリギリ勝利！と言うわけで、追いつめられた理子が逃走、壁に爆弾で穴を開け逃げられ、直後にミサイルで飛行機のガソリンが漏れる。

ここではスパキンの操縦テクニクで武藤のアドバイス無し学園島の横の風車が一杯あるとこに不時着成功、ヨーロツパで飛行機の運転習ってて正解だったぜ！

こうして戦闘も終わり、事件も解決、理子には逃げられたが三巻のブラドの時に自主するので俺としては心配もない。

それにアリアもパートナーの俺と上手く行っているので母親のかなえさん（この前紹介された）を助けることができるときぼうに満ちた表情だ。

さあ、この調子でイ・ウー編のストーリーを突っ走るぜ！

そして現在、寮の自室に帰ってきた俺は、帰ってきた白雪と風呂に入ってソープを楽しんだ、今は二人で一緒に寝ている。

横から聞こえる寝息をBGMに次の事件、アドシードに起こる対ジャンヌダルク30世との戦いへ向けて作戦を練っている。

さて、どうしたものか……。

とにかく銀髪美少女は俺のハーレムに絶対必要だ、それに女騎士を奴隷とか最高じゃね？

あのステルスはコピーしときたい、夏に使えそうだし、そうそう、忘れてたけど俺実はステルスのコピーも出来るんだぜ！白雪しか知らないけど。

今回の事件で武藤に貸した防弾メットも影の四次元ポケットから出したしな。

今使えるステルスは自前の影を操るやつと白雪の炎、それとヨーロッパで戦った風使いからコピーしたやつの三つだ。

シャーロック戦で一気に増えるはずだからこれからがぐつと楽になる。

そう考えると何だか安心してきた、やはりオリ主でエロ主なスパキンの栄光のロードは途絶えることは無いのだ！

フツハハハハハ!!

内心で高笑いをあげた俺は白雪の胸を堪能しながら眠りに落ちるのであった。

エーロ主さんのどっれいー♪

これは、エロ主による、原作間の物語である！

はい、今回も始まったエロ主によるスパキンの伝説、本日は二巻に入る前の出来事を語ろうと思う。

そう、それは清楚系美人が、ハーレムに加わった日の事だ……。

俺は今日も白雪と淫靡な日々をすごしていた、本来ならアリアと白雪とが喧嘩を行い、面倒な時期のはずだがそんなこともなく、アドシアードを控える俺たちは淫靡な日々（ry

とにかく、突然ライカからメールが来た、春休みにやりまくっていいこう、強襲科のトイレとかでやっていたが、ついに家にお誘いか？そう思った俺だがどうやら違うようだ。

メールの内容は。

『先輩！ついに私にも戦妹ができたんです！紹介したいのでお会いできませんか？』
何……だとっ！

ライカの戦妹と言えば元理子の戦妹の島麒麟、ロリきよぬーのレズじゃねえか！
フヒヒツ！これはいいことを聞いた、早速指定場所のファミレスにゴーだ！

「あなたがお姉様の仰っていた、キンジ様ですの？」

「ああ、ライカが言ったならそうだろう、遠山キンジ、所属は強襲科二年だ。よろしくな」

握手を差し出すとライカがぎよつとしているが、仕方ないのだ、彼女の戦妹の麒麟は男が嫌いなガチレズ、例えライカが俺のことを世話になった恩人と評そうが嫌いなのだから握手など……とか思ってるだろうが、俺はエロ主なのだ！

「ええ、よろしくですのー！」

横でほっとしているライカ、まあ、軽い暗示で好意を植え付け嫌悪感を消した。それは置いといて……。

「で、ライカよ」

「はい？何ですか？」

「さつきから覗いてるやつらがいるんだが……」

「な、何でバレたの!？」

「あちゃあ……」

俺が罫を掛けるとあっさりと引っ掛かった。

ファミレス内の反対側から上がった声の主は間宮あかり、アリアの戦妹でこれもガチレスだ。

「ああ、すいません。ついてきたみたいですよ」

「ふ、構わんよ」

俺が構わないと言えばライカは間宮あかりと佐々木志乃を呼ぶ。

そのためライカが俺の隣に移動し、向かいに麒麟と間宮と佐々木が座った。

「で、何で盗み聞きなんてしたんだ？」

俺の質問に顔を背ける二人、大方読唇術でも使っていたのだろうが……。それにしても佐々木志乃は良い身体だ、是非ともハーレムに入れねば。

「あなたが！遠山キンジですか！」

「ちよつと！あかり！」

「良い、ライカ。間宮あかり、確かに俺は遠山キンジだが？」

こいつは上の者に対する態度がなっていないな、まあ、アリアが絡むと周りが見えなくなるのか、レズだし。

「あなたは！アリア先輩の何なんですか!?!」

「何って、それは……」

えー、なんだろう、やつぱり利用してるとか言えばキレそうだし……そうだ！

「当然、武偵としてのパートナーだが？」

「ツ！」

めんどいので軽く気を当てながら威圧して答えると言葉につまる間宮。

ふ、所詮Eランク武偵、Sランクのオリ主モードの俺には勝てんのだ！

「先輩……」

「ああ、すまんな」

びびった友を見かねたライカは俺の袖を引く、仕方ないから気を納めると間宮は荒い息を吐いて落ち着く。

「さて、すまんが俺はこれでお暇させてもらおうよ」

「あつ、お疲れさまでした!」

強襲科の後輩の鏡だな、ライカは。

そんなことを考えた俺は仕込みが上手くいった事に笑みを浮かべていた。

「んむっ、んちゅ……んん」

俺と熱いキッスをしている相手は佐々木志乃、先のファミレスで暗示を掛けることに成功した俺は別れたあと夜になってやって来た志乃を部屋に入れた。

白雪はキスをしている俺の下で志乃のマンコを舐めて解している。

既に媚薬は飲ませたので暫くすれば感じ始めるだろう。

とにかく今は志乃のファーストキスを味わう。

深い森林のような落ち着く匂いの彼女の頭を手で抱き寄せ中々の大きさの胸を胸板で堪能しながら舌を絡める。

「んん、んむ、んちゅ……んんッ！」

お、今少し感じたな、やはり俺が仕込んだ白雪の舌使いは素晴らしいな。

「プハア……あ、あの……」

「こつちへ、おいで、志乃」

「あつ……」

俺の手に誘われるままに引かれベッドルームへ、今から志乃の開発発を始める。

「あつ、くう！遠山、先輩！」

「ちゅぱちゅぱ……胸が弱いのか？」

「あんっ！あつ！」

仰向けに寝た志乃の胸に吸い付き、舌で乳首を転がす、マンコを責めるのは白雪の

もった電マだ。

一定の振動を当てられながらゆっくりと胸と共に開発を進める。

俺のモットーで処女を奪うときは痛くしないようにしているからだ。

「あんっ！ああっ！くうう！」

「……一回抜くか」

白雪に更に下を責めるように指示した俺は辛抱が堪らなくなってきたので一発志乃で抜くことにした。

「これを挟んで舐めるんだ、できるな？」

「は……はい」

またがった俺は、志乃の白雪以下、ライカ以上の美巨乳に挟んだ俺の肉棒をゆっくりと前後する。

柔らかくも汗でしっとりとした極上の谷間を前後する肉棒の、先端が出るたびに舌でチロチロと舐める志乃は優秀だな。

「ハアハアハア……」

「どうした？息が荒いぞ？」

「それは……」

媚薬の効果が現れ、白雪の責めで感じ、俺の肉棒の匂いに女を刺激されるのだろう彼女は、俺の背後でなる水音が先程より大きいことで顔を赤く染める。

興奮したから愛液が溢れて来るとはこの娘も淫乱の素質がある、白雪とかわいがらないとな。

「白雪、電マの威力をあげてローターでクリトリスを刺激しろ、皮も向くんだ」

「はい、ご主人様」

「あつ！そんな、なつ！」

「ほら、舌が動いて無いぞ？」

「んんッ！」

口答えをする口を先程より長くなつた肉棒でふさぎ、パイズリしながらピストンを早めると射精感が込み上げてきた。

「出すぞっ!!」

「キヤア！」

ビュルルと迸る精液が志乃の顔を汚していく。

もつたいないので舐めると命令すると、手で掬って舐めだした、その淫靡な光景に再びチンコがいきり立つ。

フフふ、挿入が楽しみだぜっ！

「ハアハアハア……」

「出来上がりだな」

あれから白雪の電マとクリトリスへの責めで4回イカされた志乃は虚ろな目で荒い呼吸を繰り返している。

潮も吹いた彼女のマンコは既に大洪水でびちゃびちゃだ。

そのマンコにチンコの亀頭部分を擦り付けながら俺は志乃のケータイを手取る。

「さて、志乃、ここにお前のケータイがある、今からこのケータイに電話が……来たな。この相手はここに表記してある通り間宮あかりだ。もしこの電話にでるなら挿入は無しだ。だが……電話にでないなら

更なる快樂を味わえるぞ？」

「あつ……」

くくく、仕込みその2、この時間に間宮あかりに電話を掛けるようにしておいたのだ。ここで、志乃が電話に出れば今日は逃がす、しかし電話に出ずに快樂を優先したなら

……フフフ。

普段の彼女なら間宮を優先するだろう、だが、今の彼女は暗示を緩めている、一応媚薬という保険があるが……さあ、どっちだ？

「私は……」

「どうする……」

「あつ……」

俺としては入れたいのでチンコを割れ目だけでなくクリトリスにも擦り付けてやると甘い声をあげて彼女の意思が揺らぐ……。

「さあ……」

「私は……イキ、たいです」

「ふふふ、よくいった！」

「んああつ！熱いのが！入って！」

入れた瞬間俺のチンコにもすさまじい快楽が訪れる。

白雪とライカに負けぬ名器の志乃のマンコはキュンキュンと締め、その度に俺のピストンで押し広げる。

「あつ！あつ！ああつ！スゴイ!!」

「ふふ、気持ち良いだろう?」

「は、はい!気持ち良いですツ!」

ククク、これで志乃も堕ちたな、さあ、これからはこのマンコを楽しもうか。

「んあ!ああつ!くうう!」

ズブズブと志乃のマンコを行き来する俺のチンコ、その都度愛液が溢れ飛び散りシーツを汚す。

志乃のマンコを緩急をつけたピストンで責めれば切ない声をあげ、激しくすれば快樂で絶叫をあげる。

滑る膣内を往復し、雁首で擦り、その中を堪能した俺は一発目を放った。

「イケッ!」

「ダメツ!先輩、イキます!イクのお!」

「アアアアアアアツ!!!」

悲鳴をあげてよがる志乃を押しえつけ、射精中もピストンでマンコに精液を擦り付けてここは俺のものだと刻み込む。

イッているのに更に絶頂に達した志乃は全身を痙攣させながら潮を吹き、更にチンコで刺激されてはイキ狂う。

2連続で中出しを決めた俺はぐったりと倒れる彼女を抱き締めて白雪を呼ぶ。

こちらに近づいた白雪と位置を代わり、M字に足を絡めた二人は俗にいう丼スタイルになった。

白雪の下に敷かれている志乃は意識も朦朧としているのか、白雪に唇を奪われても呆然としている。

「じゃあ、入れるからな」

「はい、ご主人様、来てくださいい！」

「あつ、うっ！……」

愛液で濡れている二つの貝が合わさるそこに挿入した俺は抽送を開始する。

マンコとマンコの間に入った俺の肉棒は二つの柔らかい肉貝に挟まれ愛液で濡れていく。

意識の飛んでいた志乃も疑似挿入の快感で覚醒し喘ぎ声をあげる。

白雪は喘ぎながらも恍惚とした表情で己の乳首を志乃の乳首に擦り付け、二人で快楽を貪ろうとしている。

「アアアアアアアッ!!!気持ち良いですッ!ご主人様!」

「ああつ!ダメえ!イクウ!星伽先輩、止めてえ!」

「イケッ!イクんだ!」

どうやら乳首だけでなくクリトリスも擦れているのか絶叫をあげて快楽から逃げよ

うとする志乃を白雪は更にクリと乳首を擦ることで押さえ込む。

その間にも俺の射精が終わり、二人の腹部は精液でベタベタだろう。

次はそれぞれのマンコに一突きごとに挿入し、二人を喘がせる。

極上の名器をえぐり、チンコで味わう。

すさまじい快楽に何度も中出しをしてしまい、志乃が気絶した、目覚めるまでは白雪をイカせまくり、白雪の膣内から分泌される愛液を志乃の尻穴に塗りたくり指でほじくった。

白雪が気絶したあとは志乃を挿入で強制的に起こして対面座位に、俺の体にしがみつく彼女の膣を責めながら、抱き締めるために回した手を下に下げで志乃のアナルを更に弄る、指を指す度にマンコの締まりが良くなり再び射精、絶頂する彼女が気絶する前にピストンで起こし、再び二穴を同時に責める。

「ああっ！アアアアアアアッ！！お尻が良いのお！」

それを繰り返すうちにアナルでも絶頂し始めた志乃はついに堕ちた、最後は自分から腰を振り、空いた手でアナルオナニーを始めた。

「アアアアアアアッ！！イクウー！」

「最後だ！そらっ！」

オナニーとチンコによるマンコへの止まらない責めに今度こそ志乃は気絶した。

フウ、気持ちよかったなあ。

気絶した志乃を右手で抱き寄せた俺は目覚めた白雪に。パイズリフェラでチンコの掃除をさせている。

隣の志乃はイキ過ぎたのかいまだに触れるだけでぴくつと反応する、よっぱど気持ちよかったんだな。

白雪は物足りなさそうだから、もう二戦ほどやってから寝るか。
そう考えて白雪を押し倒すのだった。

作戦を開始する！

「んん、ああ……じゅぼぼ！じゅるる！」

「なに？それは本当か？白雪」

「ぺちやぺちや……うん、キンちゃん。本当だよ」

今俺は志乃に奉仕をさせながら白雪からの報告を受けて驚いていた、まさかこんなに早く敵が接触してくるとは……。

フッフ、これを利用しない手はあるまい。早速策を練らねば！

「んんっ！んんんんっ！」

「白雪、一旦弄るのを止めろ、志乃が感じすぎて奉仕出来てないぞ？」

「あ、ごめんなさい。じゃあ……んん」

俺に奉仕しながら白雪にマンコをクンニされている志乃は感じすぎてパイズリフェラが止まっている。

それを伝えると白雪は物足りないのか奉仕に加わってきた。

ダブルパイズリフェラ、二人のマシユマロのごとき乳房が左右から俺のチンコを挟ん

で扱き、亀頭やカリを舌でチロチロと舐める。

ローションの滑りも良く、白雪は言わずもがな、俺がこの三日間でじっくり開発した志乃も確りとパイズリで感じている。

「んんっ！んん……じゅぼぼ！」

「ハアハアハア、ぺちやぺちや……」

「そろそろ出すぞ」

「んん!？」

射精感が込み上げてきたので志乃の頭を押しさえてチンコを啜えこませて射精する。

俺の出した精液を確りと飲み干した志乃は、残り汁を吸い出すためにお掃除フェラを始めた。

ここら辺は白雪の教育の賜物だ。

昨晚もこの二人で姉妹丼ならぬ戦姉妹丼を楽しんだ俺はたいへん満足じゃ！

さて、次の攻略は美乳女騎士か……フフ！腕がなるぜっ！

「なあ、キンジ、お前アドシアードはどうすんだ？」

「？」

俺が翌日学校に行くと、近づいてきた武藤が質問してきた。

「ああ、俺は強襲科の蘭豹の命令で各学校対抗の実践形式の試合に出る予定だよ、もちろんコンビはアリアだが」

「そう言えばお前からここんところ活躍してるもんなあ、流星はSランクのコンビだな」
「ふ、まあな」

アドシアードは簡単に言うと、世界中の武偵高の国際競技でオリンピックみたいなもんだ。

俺は競技の一つのバトルマッチに出る。

もちろん、アリアからの了解も得ている。

最近の彼女はパートナーを手にいれ上手くいっているのが嬉しいのか矢鱈と大人しい。

「んじゃあ、バンドには俺と不知火で出ることには何のか……」

「まあ、射撃競技の補欠だからな、不知火は、代表の生徒が休まないならそうなるのか」

「まあ、頑張れや」

「当然、立ちふさがる敵は全て薙ぎ倒すぜ」

そう、立ちふさがる敵は全て。

丁度その時高天原先生が来た。

「んじや、また休み時間な」

「おう」

さて、白雪の仕込みは終わったかな？

「そつちはどうだ？」

「うん、やっぱり有ったよ、キンちゃん」

「これで八個目か……風呂場にまで仕込むなんて敵も中々やるな」

ハロー！スパキンは現在、魔剣ごとジャンヌが我が家に仕掛けた監視カメラをお片付け中さ！

先日白雪から魔剣に接触されたと報告された俺は、通信科の知り合いのコネをいかしてダミーの監視カメラを作って貰い、仕掛けられていたのと入れ換えに成功したのさ! 全く、データを調べてみたら仕掛けられたのは丁度今日、つまりセックスはバレていない。

正直見られると面倒だったので直ぐに行動に出たのは当たりだったぜ。

原作とはひと味もふた味も違う白雪は、俺に迷惑をかけるとか変な遠慮はしないので、こうして魔剣を捕まえる作戦を実行中だ!

今はこれで普段の様子を相手に流して、こちらは気づいてないフリをする。

そしてアドシアードの日に一気に捕まえてしまうのだ!

だからこそ、午前中の競技に出場することにしたのだ。

アドシアードに出ると武偵としての就職に有利になるというリミットからは逃げられなかったんだ!

フフフ! ジャンヌ! 待ってるよ!

「遠山先輩、本当にここでするんですか？」

「なんだ、今更。訓練の日はいつもここでよがってるくせに」

「それは……んんっ！」

強襲科の二階にある備品庫にライカを連れ込んだ俺は、未だに照れる彼女の唇を荒々しく奪う。

少し抵抗する彼女を片手で押さえ、舌を吸い出してディーブなキスをする。

「んんっ、んんう……ん……ん……」

キスをしてから一分も立っていないのにライカは表情が蕩け、自ら舌を絡ませてくる。

最初はいやがるくせにいつもこれなのだから我ながら淫乱に育った物だと感心してしまう。

口では抵抗しても体は素直、これが良いんだ。

最も、彼女自身に淫乱の素質があるのも有るのだろうか。

「プハア……ハアハアハア」

「おや、濡れてるじゃないか？」

「そこはっ……んんっ！」

ライカのスカートに手を忍ばせ、イエローの下着の上からマンコを擦るとイキナリ濡れていた。

しゅっしゅつと、指で擦ればそれだけでライカは喘ぎ声をあげ、更に愛液が溢れてくる。

「んん?これはなんだ?感じてるのか?」

「いや、私……あつ!」

いやいやと頭を振り、現実から逃げようとするライカのパンティに手を入れ、指でマンコを掻き回せば嫌らしい水音が倉庫に響く。

指マンを続けると止めどなく溢れる愛液がライカのパンティと俺の手を濡らす。

試しにライカの目の前に手を出してみれば、自分の愛液で濡れた俺の手を見て目を見開く。

「これはどういうことだ?まだキスしかしてないのにな」

「そんな、私は……」

「まあいい、続けてやろう」

「あつ!ンア!」

制服に手をいれ、ブラを外す、そして胸を揉みながら時折乳首を弾くと我慢できなかったのか嬌声をあげた。

掌の中で形の良い美乳がムニムニと形を変え、柔らかな乳房を弄ぶ、そして再び嬌声をあげたライカは自分の口を押さえようとすがすがさず手錠で後ろ手に拘束して愛撫を続ける。

首筋に舌を這わせ、マンコを掻き回し、乳首を責める。

その度に声をあげ、嫌らしい音を立てるマンコで俺の指を締め付ける。

乳首もコリコリに勃起し、指で摘まめばマンコを弄るのと同じような反応を返し、俺を楽しませてくれる。

「やあーンツ！アアアアアアアツ!!」

「イクのは良いけど、声を押さえないと誰か来るぞ?」

「ああ、いや、いやあ……」

「そんなこと言ってしつかり感じてるじゃないか」

クリトリスを弾けばピュツと潮を吹き、既に大洪水でパンティはびちゃびちゃだ。

勃起したクリも乳首もコリコリと抓ると甘い声をあげだんだん俺に体を預けてくる。

そろそろ一発出してやりたい俺はズボンから出したチンコをライカの手握らせた、後ろ手に拘束してあるので離さないように言い含めると、快感に思考を流されているライカは抵抗がうすくなっていく。

「ほら、握ったか?これが今からお前のマンコを掻き回すんだ」

「ああ、先輩のが……固くて、熱い」

「欲しいだろう?これが入れれば何度でもイケルぞ?」

「でも、こんなところで……」

「声を押さえれば問題ないさ」

本当は人払いの結果と防音結果も張ってるから万が一しか誰か来ることはない、でも折角なのでライカの羞恥心を刺激してやる。

追い撃ちに、チンコを擦り付けてやると。

「ああっ!熱いのが擦れて……」

「マンコが切ないんだろう?一言欲しいって言うだけでいいんだ」

思考が麻痺したライカに嘔きかけ、誘導する。

壁に背を押し付けたライカの正面に回り、チンコでマンコを擦りながら刺激は途絶えないようにして追い詰めていく。

すると何度か喘いだ後でライカは快楽に屈した。

「欲しいです……」

「どこにだい?」

「私の、嫌らしいおマンコに先輩の熱いのが欲しいです」

「良くできたな、入れてやるよ」

「あつ！くう！入って……来る！」

ズブズブと、俺のチンコの形を覚えたマンコに挿入する。熱く愛液で滑るライカのマンコは難なく俺のチンコを呑み込んだ。

ゆつくりと子宮口に亀頭がキスをし、ライカが喘いだ瞬間、強烈なピストンを開始した。

俺の首に手を回したライカの足を持ち上げ、壁に背を押し付けた駅弁スタイルでパンと抽送を繰り返す。

一突きごとに嬌声をあげ、愛液を飛び散らせるライカのマンコはキュンキュンしながら締め付けてくる。

自重で奥深くまでマンコに刺さる駅弁スタイルの利点をいかし、抱えたライカを小円を描くように動かすことで子宮口をグリグリと刺激し柔らかくもヌメルライカの膣内を堪能する。

「あつ、ああつ！センパイツグリグリっ！ダメえ！」

「もつと感じるんだ、ライカ！」

「ンアアアッ！気持ちいいっ！おマンコが、もっとー！」

「そうだ、快楽を受け入れるんだ」

じゅぼじゅぼとマンコをチンコで掻き回し、愛液を垂れ流すそこを擦り抉るとライカはピストンに合わせるように腰を振り快楽を貪る。

自ら快楽に、身を委ねたライカにご褒美としてアナルを指で掻き回してやる。

すると膣の締まりが良くなり、アナルでも感じているのがわかる。

「ンアアアッ！お尻の穴がっ！いいっ！もっとな掻き回してえ！」

「クッククックク」

俺のチンコで喘ぎイキまくっている女を見るのは爽快だ、こうしている今もライカは性欲に溺れ、俺のチンコで感じている。

溢れる愛液とだらしなく蕩けた表情で腰を振るライカのマンコは俺のチンコを咥えこんで離さない。

素晴らしい締めりのそこはライカが絶頂している間も快楽を貪ろうとうねっている。

「ンアアアッ！アアアアアアアッ！！イクっ！イクのお！」

「クツ！出すぞ！」

「気持ち良いのお！先輩のが奥まで刺さって！ンアッ！イクっ！イククウウウ!!!」

今までで一番の絶頂に達したライカの子宮に精液を解き放った。

うねる膣内は更に射精しろと俺のチンコを締め付け、そのあまりの気持ちよさにライカは俺にしがみつき歯を食い縛っている。

「ハアハアハア……スゴイい」

「まだ欲しいのか？ん？」

「は、はい！欲しいです……次は、後ろから……」

リクエストまでしてくるライカに答え、床に四つん這いになったライカのマンコにバックから再び挿入する。

チンコで突く度背を反らし、俺に合わせて腰を振ってライカは絶頂する。

熱い肉棒をとろとろのマンコで受け入れ、形の良い尻に肌がぶつかる音と、マンコからぱちゅぱちゅと愛液の水音が鳴る。

掴んでいた腰から手を離して覆い被さり、ライカの美乳を揉んで責めると、乳首を弄る度に締め付けが良くなり俺を楽しませてくれるライカのマンコ。

それに気を良くした俺はピストンを激しくして締め付けるマンコを押し広げていく。

「アッ！アアンツ！奥まで来てるの！先輩！」

「良い締めりだな、気持ちいいぞ、ライカ」

「んんっ！うれ、しいっ！ですう！」

ライカは俺の言葉に喜びながら再度絶頂し、ボタボタとマンコから愛液を垂れ流す。

また、突然体を震わせると、潮を断続的に吹くので床み水浸しになっている。

「ンアアツ!またっ、きたあ!」

「おっと!」

叫ぶライカが潮を吹くので一旦チンコを抜き、それが終わればまた挿入。

「ンアアツ!アアンツ!アツ!クウウウウ!」

「またイクのか」

「アアアアアアアツ!!!」

射精をすると、精液で膣壁を叩かれたライカが絶頂している、今度はさつきより激しくイッタのか崩れ落ちて荒い息を吐いている。

「腕に力が入ってないな、ならば」

「んんんんんっ!」

仰向けにしたライカに正常位で挿入しパンパンとピストンする。

目の前で揺れる乳首を囁んだり、舌を絡めてキスをしたりしながら挿入され、チンコの刺激に耐えかねたライカが俺の動きを止めようと足を腰に回してホールドしてきた。

そんなことをすれば更に深くまで刺さり子宮口を抉じ開けながらピストンをされ、ライカは舌を出して絶頂する。

まだ俺がイッてないので気絶しそうなライカを快感で叩き起こす。

その都度声をあげ、子宮口を突かれ、乳首を責められるライカは中出しと同時に絶叫した。

「ンツアアアアアッ！アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！イクウウウウウウウウウウツ！」

チンコの先端が子宮口を押し開けて精液を注ぎ込む、俗にいう子宮口セックスだ。

それによる快感は凄まじいのか、ライカは全身で痙攣しながら涙を流している。

チンコを抜いてしばらくするとそれも収まったが、虚ろな目になっているライカは半分以上意識が飛んでいるようだ。

半開きになった口にチンコを突っ込むとゆるゆると舐めて残り汁を吸い上げ、お掃除フェラを終えたところでフツと気絶した。

開いたままの股から精液を垂れ流してきぜつしている汗だくのライカを写真に納めた俺は、口移しで回復薬を飲ませてその場から運んだ。

裏口から出ると既に外は夜で、腕時計を確認すると四時間ほどぶっ続けでやってたようだ。

仕方ないのでライカのケータイを使いライカのルームメイトにメールを出した俺はそのまま家に連れ帰り、白雪とライカを起こして3Pを始めた。

やはり井プレイは最高だったといっておこう。

気絶した二人を両腕で抱き締めてその匂いと全裸の肢体を楽しみながら俺は寝た。翌朝、起きると二人がフェラをしていたので少しおどろいたが。

女騎士、墜つ！

「決まったああああ！遠山キンジ、神埼アリア武偵のペアが決勝進出決定だあ！」

「ハツハツハツ！楽勝！」

「ナイスショット！キンジ！」

「イエー！とアリアとハイタッチを決めた俺は、倒れている中国の北京武偵高代表選手をズタボロに伸した所だ。」

「相手もSランクの武偵が一人いたが、Sランク二人のコンビである俺たちの敵ではない。」

「試合開始数秒で敵の銃をぶつ壊した俺とアリアは格闘だけで圧倒して勝利したのだ。」

「この調子で決勝も行くわよ！」

「もちろんだ！」

「そう、さっさと終わらせないとなあ……。」

ども、スパキンだよ、ハハツ!

最後の決勝戦も一分で勝利した俺とアリアは腹拵えに昼を食べたあと、夕方まで各競技を見て回り、閉会式での武藤と不知火のいるバンドを見て寮の前で別れた。

俺はチアの胸とかパンティに目が行ってウハウハだったよ。

そして現在、白雪と晩御飯を食べている……このあとは、分かるよな?

じゃあ、数十分後にまたな!

「ん……」

「あ、キンちゃん、この娘起きたよ」

「お、本当か? 結構待ったな」

「ん!」

おひさ! 今はね、仕掛けた罠に引っ掛かったジャンヌが目覚めたところなんだ、と言っても白雪を地下倉庫に呼び出したから事前に仕掛けた罠にかかってくれたんだよね。

超強力な電流の流れるトラップにかかって気絶していたところを回収してきたよ。そして、その間に媚薬も飲ませて、塗るタイプのも使った。

これはどちらもじわじわと聞いてくるタイプの薬だから楽しみなんだぜっ！

今はベッドに大の字で拘束して、目隠しとボールギャグを着けてるから周りの状況が分かってないジャンヌ、これからひどい目に遭わせてやんよ！

「じゃあ、始めるか」

「んん!?んんん!」

「おいおい、暴れても無駄だよ、魔剣、いや、ジャンヌちゃんよ」

「……………」

「静かになつたな、じゃあ、君の状況を説明してあげようか。君はね、白雪と俺を嵌めたつもりなんだろうけど、逆に嵌められたんだよ」

「んんんっん!」

なんだってと言いたいのだろうか？ボールギャグを啜えてるからわかんね。

「メールを見たけどあれじゃあダメだ、白雪は俺に迷惑をかけるとか細かいことは気にしないんだよ、大方、カゴノトリとか言われてたデータ見て性格を調べたりしたんだろうが、高校に上がってからは変わったんでね、それ、意味ないんだなあ」

「……………」

ククク、呆然としてるよ、この調子じゃあ自分が下着だけなのにも気づいてないな。

「と言うわけで、今からお仕置きだ! 大人しく俺のものになるんだな!」

「んんっ!?!」

さあ、調教の始まりだ!

「んんん!んんっ!」

「はあ、スベスベだなあ」

俺がジャンヌの白人らしい白く綺麗な肌を嫌らしい手つきで撫で回すと擦ったそうに身じろぎする。

「まあ、イキナリで悪いが……(っ)開帳だ」

「んんんっ!?!」

レースの付いたブラジャーを外せば掌から少し余る程度のまろやかな美乳が現れた。

声をあげているジャンヌだがそんなものはお構いなしに揉みし抱く。フニフニと柔らかな乳房が手に収まり、綺麗なピンク色の乳首がエロイ。それからしばらくの間は夢に見た美乳を延々と揉み続けた。俺の手の中で形を変えるジャンヌの美乳を揉んでいると突然反応した。

「んんんっ！んんっ！」

「フフフ、感じ始めたか。白雪、ローターでマンコを責めろ！」

「うん、キンちゃん」

下半身のマッサージは白雪に任せて俺はジャンヌの上半身に跨がる。

そして手で暖めた媚薬ローションを胸に塗りたくった。

「んむ?!んんん!」

少し冷たいのか身体を震わせるジャンヌ、塗り終わるとその美乳はテラテラと部屋の灯りを反射している。

興奮してきたのだろう

再び揉むと乳首が固くなっていく。

コリコリと指で転がし桜色のそれに吸い付いた。

「ちゅうううっ！」

「んんっ！」

ビクンツと感じているジャンヌの胸を執拗に責め立てる。

媚薬の効果も現れ始め、背後から聞こえるローターの音に水音が混ざり始めた。

「ククツ、聞こえるか、ジャンヌ、お前のマンコが嫌らしい音を立ててるぞ」

「!?」

耳元で囁きそれを教えてやるとジャンヌは頭を振り否定しようとする。

もちろんんからかっているだけなので相手にはせず、再び胸を揉んで愛撫する。

そして。

「ンンンンンツッ!」

「お、イッタな、潮も吹いてるよ」

息の上がつてきたジャンヌの乳首をぎゅつと摘まんだ時、腰を跳ねあげピュツと潮を吹いた。

カクカクと腰を震わせて絶頂の余韻に耐えている。

白雪に電マの責めも加えるよう指示して俺は媚薬ローションで滑る美乳にチンコを挟んだ。

ぬるぬるの胸でのパイズリはマウントポジションを取っていることもあつてか征服欲を満たし俺のチンコを熱り立たせる。

熱く滾るチンコを手で擦り合わせる胸の間で前後するとジャンヌはビクツビクツと

反応している。

「おお、柔けえ、気持ち良いぜ」

「んっ！んっ！んむう！」

胸を掴む手で乳首にも刺激を与えるとジャンヌの反応が良くなる。

しかもマンコには電マで途切れることのない快楽を与えられ、ローターでクリトリスを皮を剥きながら責められるジャンヌは快感の逃げ場がない。

「面白いなあ、白雪、イキそうになったら刺激を与えるのを止めろ、寸止めで責めるぞ」
「はあい……」

ジャンヌの痴態に当てられたのか股を擦り合わせているので見てみると愛液が垂れていた。

後で一緒に可愛がってやらないと。

「んっ！んっ！んっ！んっ！？」

イキそうになった途端マンコへの刺激が途切れ、胸からの鈍い快感しか来ない。

ボールギャグのせいで口から溢れている涎を舐め取ってやりながら調教を続ける。

「んっ！んっ！んっ！……んっ！んっ！」

「イケないのは辛いだろ」

「フウ、フウ！」

「キンちゃん、ジャンヌのここのスゴイひくひくしてるよ」

寸止めで電マを離し、ジャンヌのマンコの実況をする白雪、それにジャンヌの顔が耳まで赤くなる。

「そろそろぶっかけてやるよ」

チンコがキツくなってきたのでパイズリで顔射してやる。

フニフニの胸に挟んだチンコを前後させるスピードを上げ、ビュツと目隠しされていく顔にぶっかけた。

「フウ、気持ち良いな」

「ん!? んんん!」

顔に何が付いたのか理解したのでだろう。

イヤイヤと顔を振って落とそうとしているが、俺の精液は粘度も濃度も桁違いなんだよー!

それに良い匂いだし味も美味しいんだぜ?

アメが作れるレベルだ。

「もう一発かけようかな?」

「んんんんんん!」

「ハハッ! イヤか、じゃあ寸止めを続けてやるよ」

本気で嫌そうに藻搔くので責めを再開し、胸を揉む。
さあ、どれだけ耐えられるかな？

「フウ、フウ！ンフウ！」

「強情だなあ、まだ暴れるのか」

あれから一時間、マンコへの電マ責めと乳房への愛撫をずっと続けているが未だに暴れている。

一度処女を奪ってしまおうかとも思ったが、女騎士を快楽で落とすのは男子の憧れだ、その夢は諦めきれん！

「仕方ない、一度こうして」

「プハア!!ハアハアハア……」

「よう、調子はいかが？」

「ハアハアハア。何が、したいんだ、お前、たちは」

「ボールギャグを取って声を聞いてみると息も絶え絶えだが、まだまだ強気なジャンヌの返答が返ってきた。

「それは、お前を性奴隷にして俺のハーレムに入れるんだよ」

「なあ!?!」

「ククク、最初からそう言ってるのに」

「ふざけるな! 私は、そんなことンアツ!」

「へえ、こんなにとろとろにマンコが蕩けてるのにまだ齒向かうのか?」

「くう! 指を、ぬ、け!」

反抗的な彼女にいらつと来たので指でマンコをゆつくりと掻き回して弄ぶ。

「またまた、こんなに気持ち良さそうにヒクつかせておいてそれはないぜ?」

「ンアツ! くううう!」

「ボタボタと愛液垂らして、全く締まりの無いマンコだ」

言葉責めを始めると齒軋りをしながらキュンキュン締め付けるマンコ。

白雪はベッドの上に回りジャンヌの胸を揉んで遊んでいる。

「で、どうする? 従うなら気持ちよくしてやるが」

「だ、れが!」

「そうか、ならば仕方ないな」

俺が目を向けると白雪は、外していたボールギャグをジャンヌにまた啜えさせ調教を再開する。

今度は俺がマンコを責める番だ、次は、中出しはダメだから擦り付けてぶっかけるか?

更に責めは続く……。

「フウ!ンフウ!んんんっ!」

「もうそろそろか?」

「んんんっ!……んんん!」

「もう少しでイケそうだったのにな、残念!」

イヤー楽しいね、決してイカせず寸止めを繰り返すとどんどんイキそうになるのが早

くなつてきた。

ジャンヌはイケなくなる度に暴れるようになっていたのでイキたくて仕方ないのだから。

最初の時に大人しく従えばこうなる前にイカせてやったのに……。

「で、どうする?」

「プハア、ゲホツ! ハアハアハア、もう、無理だ、止めてくれ!」

「そんなことは聞いてないんだけどな?」

「ああ、あああ」

「イキたいのかと聞いているんだよ」

「そ、それは!」

おし、あと少しだ、ボールギャグを取つて質問すると先程とは態度が違う、何かあればすぐにでもおれるぞ。

「ほら、どうすんの?」

「ああ、擦られて……」

チンコを擦り付けて弄び、呆然としているジャンヌを追い詰める。

まだダメか……。

こうなれば最終手段だ。

「白雪、縄をほどいてやれ」

「良いの？」

「構わん、やるんだ」

ジャンヌの縄をほどき、目隠しもとつてやる。

するとジャンヌはすぐにもオナニーを始めようとするが俺が視界に入ると手を止めた。

やはりまだ理性が残っているな。

「もう帰っていいぞ」

「え？」

俺が言ったことが信じられないのかジャンヌは呆然として俺をみている。

「何だ？嫌なんだろう？なら、帰っても良いぞ、但し媚薬の効果が切れるまで数日はそのままだがな、オナニーではもはや満足できないぞ？」

「そ、そんな！」

ククク、焦ってるな、このままでは満足にイケないと嘘を教えろと思ふの鈍ったジャンヌはあつさりと思ふ。

オナニーでも満足は出来るだろう、どれだけイケば満足するかは知らんが。

俺はチンコを見せつけながら質問を続ける。

「さあ、どうする?こいつが欲しくて堪らないんだろ?」

「あ、ああ……大きい……」

俺の肉棒を熱に浮かされた目で眺める、その目はチンコに釘付けで、完全に欲情していた。

即座に近づき唇を奪う、ジャンヌは一瞬だけ抵抗しようとしたが舌を絡めると俺を突き飛ばそうとする手が止まった。

もはやキスでも感じるジャンヌはもどかしそうに身をよじって耐えている。

「んん!んむつ、んん」

「プハア、ハアハアハア。あ、ああ」

ファーストキスを奪い、更に心を追い詰めていく、ここで手出せば俺の負けになる、自分から入れてほしいと言うまではやれんのだ!

「さあ、ジャンヌはどうしたいんだい?」

「わたしは……私は」

甘い声をかけ抱き締めながら優しくするとぐらぐら理性が揺れている。

「さあ、とどめだ!」

「あ、きやあ!」

「ほら、言つてごらん?」

ジャンヌを押し倒し、愛液でびちゃびちゃのマンコの上にチンコをおく。それによって自然とジャンヌはマンコを擦り付ける動きをするが無駄だよ。

確かに気持ち良いだろうが決してイケないジャンヌは意を決して最後の言葉を言う。

「私を……抱いて下さい」

「良いのか？逃げられるんだぞ？」

確認をとるがコクリと頷く、だが、こう言うのはハッキリと言ってもらわないとな。

「ジャンヌは俺とセックスがしたいのか？」

「ああ、お願いだ、もう、耐えられない！」

ついに言った！あのジャンヌが俺とセックスしたいとハッキリと言ったのだ！

完全に理性を肉欲が上回ったのだ。

「お願いだ、早く、これが欲しくて堪らないんだ」

「そこまで言われたら仕方ないな」

「は、早く入れてくれ！」

肉欲の虜となったジャンヌが俺のチンコを掴んで自分のマンコにあてがう。

フフフ、我が聖剣の味をとくと思ってるが良い！！

二つ名は魔剣だが実際は聖剣デュランダルを使い手のジャンヌ。

ジャンヌが受け入れたのを確認した俺はゆっくりと腰を進めようとして。

「おわっ!?!」

「アアアアアアッ!来たあ!」

入れようとした途端、俺の腰にジャンヌが足を回してチンコを引き込んだ、不意を突かれた俺はあっさりとお深くまで挿入し、ジャンヌの処女膜をぶち抜いた、そして入れた瞬間に絶頂するジャンヌ。

「アアン!動いてくれ!」

「あーもう、最後はこれかよ」

文句を言いつつもピストンを開始する。

ここまで寸止めをしたのは始めてだが膣の締まりが凄まじい、一気に俺のチンコを呑み込んだ膣内は柔らかかな媚肉で締め付けてくるので俺もすごく気持ち良い。

「んああっ!きもちいいっ!もっとな突いて!」

「クッ、これは!」

クールなジャンヌの上げる可愛らしく艶やかな声にマンコの中のチンコが更に大きくなる。

「んんっ!大きい!良いのお!マンコが!」

「ハッ、ハッ!」

シートを握りしめ愛液を垂れ流し俺のチンコでよがり狂うジャンヌ、その膣は我慢し

て味わうだけの価値があった。

早速一発目がでそうだ。

「クッ！出すぞ！」

「ああッ！熱いのが来たあ！イイツ、イイのお!!」

射精が終わっても腰が止まらん、更に出そうと俺はチンコでジャンヌのマンコを責め立てる。

美乳の先端の乳首を吸い上げ、パンパンと腰を振りながらジャンヌという女の身体を味わう。

二度目の中出しが終わり、今度はバックで挿入した。

「ンンンンンッ！深いところに来てるう！」

「ジャンヌ！」

「アアアアアアッ！」

腰をつかみチンコで子宮口をノックするとぶちゅぶちゅとした感触が亀頭に伝わる。

ボタボタこぼれる愛液も掬い上げジャンヌのアナルを掻き回すためのローション代わりに使用する。

「アアアアアアッ！掻き回さないで！気持ちよすぎて！」

「イケッ！」

「んああつーアアアアアツーイクウウウウツー！」

絶頂するジャンヌのマンコにさらに締め付けられたチンコが快感で射精する。

射精中も腰を動かすとその間にも感じすぎているジャンヌはイツた。

チンコを抜けば潮吹きと共に精液が溢れてシートにボタボタ落ちる。

まだ足りない俺はジャンヌを仰向けにして持ち上げ、駄弁スタイルで挿入した。

「ああああ……入ってくる」

「動くぞー！」

「ツーキャアアア！キモチイイツー！」

ぎゅつとしがみついて来るジャンヌを上下に揺さぶりその動きでピストンを繰返し

マンコを突きまくる。

ジャンヌの髪を結っていたりボンも解け、その髪型はストリートロングに変わる、そ

の状態で頭を振って喘ぐジャンヌは視覚効果を発動し、俺のチンコを熱り立たせる。

「アアアアアツー！熱い！熱いのがーアアアアアアアアアアアアアアアアンツー！」

再び中出しと絶頂が起こり、ゆっくりと胡座をかいて座った俺は、今度は対面座位でマンコを挟る、胸板に当たる胸が気持ちよく、すぐそばにあるジャンヌの首筋にキスを落とす。

するとマンコの締め付けが良くなり、またまた射精した。

「アアアアアアッ！イクウウウウウッ！中にてイクのお！」

もう何度目か分からないほどイッテいるがまだ終わらない。

再度の正常位に移行しジャンヌを押し潰すようにマンコを突きまくる。

ぶしゅぶしゅとマンコの中で混ざりあつた液体が泡を立てながら音を出す。

「アッ！アアアッ！アアアアアアッ！」

「フウ、フウ！くうう！」

最早イキツぱなしのジャンヌは言葉が出ていない、叫び声しか聞こえない。

そんな所に射精を繰り返す。

逆流した精液と愛液の坩堝と化したジャンヌのマンコは蜜を垂れ流しチンコを締め

上げてくれる。

「ンアッ！アアアアアアッ！ファアアッ！」

「あああああつ!!」

俺も叫び、最後の射精を放った。

お互いに痙攣し、射精が終わつたのでチンコを抜くと、ジャンヌはバタリと倒れて動かなくなった。

「あつ、やばい、か？」

この三日間は真面目に仕事をしていたのでやっていなかったがここまで出せるとは、

ジャンヌのマンコは気持ちよすぎた。

「ああ、良かった、呼吸してる」

息を確かめると何とか無事だったのでそつと寝かせておく。

さて、それでも抜き足りねえな、三日のお預けは厳しかったかな？

「はあ、白雪、やるぞ!」

「あ、はい!」

先程からオナニーをして待っていた白雪を押し倒し、挿入する。

「ああっ! キンちゃんのがきたあ!」

やはり皆のマンコは最高に気持ちいい、そんなことを考えながら白雪が気絶するまで

俺はやりまくった。

性騎士、いや、ライカと志乃だよ

「こ、ここうか？」

「そう、そうやって歯を立てずに舐めるんだ。唇で圧迫するのも忘れるなよ」

「ああ、……ペチャペチャ……んじゅるるっ！」

ククク、ども！昨日エロ責めで堕ちたジャンヌにフェラを教えるスパキンです。

朝目を覚ますと逃げようとしたジャンヌですが、キスをしてマンコを少し弄ってやればあっさりと逃げるのを止めた。

そしてあれよあれよと服従させ今に至る。

白雪はキッチンで朝御飯を作っていることだろう。

「んんっ！んじゅるるるっ……じゅるるっじゅるるるっ」

「その調子だ、ご褒美にマンコを苛めてやろう」

「あっ！あんっ！……じゅるっ！」

足の指先で跪いたジャンヌのマンコを突つくと愛液が溢れているのが分かる。

感じながらも嬉しそうに尻を振ってフェラを続けるその姿はなんとも言えぬエロさ

がある。

俺の趣味で履かせてみた白のガーターとソックスもそれに拍車をかけている。

エロい下着をつけるなら、黒は白雪、白はジャンヌ、ゴールドは理子と言う名言はやはり間違っていないかった。

「ふううん……じゆるっじゆるるっ……ぺちやつぺちやつ」

「ふう、気持ちいいぞ、上手になってきた」

懸命に俺のモノを啜えて頭を前後するジャンヌを撫でてやれば嬉しそうに目を細め、上目使いになる。

裏筋を柔らかな舌が這う感覚にビリリとした快感が走り抜ける。

教えた通りの内容を丁寧になさずジャンヌ、亀頭にキスをして先走りを読みとり、時々手コキでの刺激を与えるのも忘れない。

裏筋やカリも丁寧に舐めるその姿勢はどんどんエロにのめり込んでいるのが分かる。

今など空いた左手で自分のマンコを弄ってオナニーを始めた。

「んんっああっ……んじゆるりっじゆるるっふむう……」

「おお、そこだ、そこを舐めるんだ」

「ハアハアハア……これでイイか？」

「うっ、でるぞー！」

「んっ！……ゴクツゴクツ……」

ジャンヌの懸命な奉仕に俺のチンコも答え、口の中に射精する、もう抵抗しないジャンヌは大人しく精液を飲み干した。

「……これは」

「どうしたんだ」

「美味しいんだ……」

「ん？」

「精液が美味しいなんて知らなかった……」

呆然とそんな感想を言うジャンヌに笑いそうになるが俺の精液は味や濃さを変えられないため当然だ。

熟練者の白雪は濃い方が好きらしいが、まだ調教は始まったばかりのジャンヌには飲みやすいのを出してあげた。

他にも発情効果とか含まれているから便利なものだ。

「それはね、ジャンヌが俺のことを好きになったからそう感じるのさ」

「私が……」

「実際に美味しいだろう？」

俺の話術にハマったジャンヌはコクリと頷き再びフェラを始める。

今度は積極的に舐めたりしてくれるので二発目はすぐに出了。

それもキチンと飲み干し、お掃除フェラを済ませたジャンヌがチンコに跨がって自ら挿入しようとしたところでご飯が出来たと白雪が呼びに来た。

仕方ないからお預けをして、ジャンヌのマンコにはバイブをいれてエロエロな白のティーバックで固定して朝食に向かった。

アドシアードの片付けは一年の仕事なので二三年は休みのため今日はジャンヌの調教を進める予定だ。

まあ、アリアの母親の裁判もあるから自主させて司法取引もさせてこの学校に迎え入れないとイケないんだけどね。

いやあ、本当にこの娘だけは行動が読めないな、原作通りの行動をとる呪いでもかけられてんのかね？

「くっふう〜、キー〜ーン理子と気持ちいいことしよっ?」

「ハツハツハツ、面白いことを言うじゃまいか」

あれから一月である程度ジャンヌの開発を進めた俺は一段落をつけ、警察に送り届けた。

引き取りには公安零課のやばそうなオーラの化け物が来たけど、あれ人間じゃねえ。

連れていかれるジャンヌは捨てられる子犬の目をして俺を見ていたが直ぐに司法取引を済ませて戻ってくると言っていたので信じよう。

調教を進めるうちにセックス中はご主人様とかマスターとか変な呼び方を自主的に始めたので質問したところ。

騎士らしい理由で主に使えるのが夢だったとかなんとか、お陰で良い思いさせて貰ったよ。

それが済んだらエリアに連絡、何故私を頼らなかつたとキレられたので事前に打合せした通りに白雪と宥めすかし、事なきを得た。

どうも、初めてのパートナー（なんかエロいな）に頼ってもらえなかつたのが頭に來たみたいだ。

次からは頼ると約束すれば大人しく引いた。

俺的には物語を進めるのに必要なだけであって特にエリアに興味はない、もしセックスしようものならばつ壊れそうだし、やるとしても薬で色々しないとイケないので時間

のある時期にするきだが……。

まあ、そんな感じで武偵高に帰還、合宿の準備があるらしい白雪と別れ家に入るとなにかいた。

そして現状に至ると……。

「ねえ、キー君、ジャンヌはどうやって倒したの?」

「それを知ってどうする?」

「だってえ、理子の釈放と入れ換えに入ってきたからさあ、ジャンヌが雪ちゃんを拐うつて言つてたアドシアードから一ヶ月も立つてるし、何があつたか気になるんだよねえー」

ヤバイでござる、余計なことから理子に秘密がバレそうだ……クツ! 理子をやるのはブラドをブッコしてからに決めていたが……やるか?

「まあ、それは良いや」

(助かったあ!)

「理子く、キー君に、頼みがあるんだあ」

あーはいはい、ブラドぶつ殺すの手伝えつてね、もちろん手伝うが手間はかけん、暗示かけてとつと興奮させて変身させて、横浜の何とか館っていう、奴の隠れ家で仕留

めてやんよ、それで万事解決で理子とセックスだ、以前煮え湯を飲まされたのでマジで快樂漬けにしてやる!

「ブラド、だろ?」

「……へえ」

「アリアの上げた仇のリストに乗ってたんだが、調べると君と繋がっていてね」

「……続ける」

「説明が面倒だから省くけど、理子が5歳の時に両親を無くし、君を引き取ったのがブラド、君の親戚を名乗り引き取った後、奴の趣味に付き合わせたんだろ?」

「……はあ、キー君、チートはいかんよお?情報力高いのは良いけどね」

「そりやどうも」

原作知識バリバリの名推理(笑)で話を進める、いちいち過去の話とか聞く暇あれば俺の評価上げるのにこうやって使うんだよ。

「で、どうすれば良い?ぶっ殺すか?」

「キー君、本当に武偵?」

「いや、あれ調べたけど人間じゃねえし」

「まあ、不死身の吸血鬼だしね」

おろ?理子にしては情報漏らすのが早いな、諦めたか?

等と考えていると原作よろしく潜入ミッションの説明が始まる。

めんどいのでアリアを呼んでとっとと始めることに、仕事の開始は今週末から二週間、まあ、初日に小夜鳴モードの時にブラドに強制的に変身させてボコるが。

さあて、やるぞ！りこりんと！

まあ、その前に……。

「ああつーくう！ああつーくう主人様つー！」

「中々の締め付けだな」

週末から二週間もここを離れるのだ、ハーレムのメンバーを堪能せねば。

そう考えた俺は今日星伽に帰った白雪とは昨夜名一杯やりまくり、残りの5日は志乃とライカ二人とやりまくっている。

今は調教も大分進んだ志乃を四つん這いにしてバックで犯している。

広いベッドの中で三人で乱れる。

ライカは最近念入りに開発中のアナルを弄ってオナニーをして一人でイッテいる。

「志乃、ここが良いんだろ？」

「ああっ！もつと突いて！ご主人様あ！」

挿入の角度を調整しながらパンパンと尻と肌をぶつけ、水音を上げるマンコを貫く。ぱちゅつぱちゅつと愛液を垂らし撒き散らす志乃マンコは締めりもよく熱く滑り、俺のチンコを受け入れている。

子宮口を突いても感じるようになってきた志乃は今度はアナル開発のよていだ。

一突きごとに嬌声をあげて感じている志乃は女の匂いを含む甘い汗を流しながら腰を動かしている。

「あっ！イクツ！イツちやう！」

「ふっ！」

「ああっ！お尻が！ああっ！イクツ！イクウウウウツ！」

絶頂し俺のチンコを締め付けるマンコにより俺のチンコにもビリリとした快感が走る。

子宮口に口づけした亀頭から精液が跳びだし、志乃を満たす。

止めはアナルにいれた指になったがこれでもまだ感じ方が足りない、俺の目標は最初の媚薬を使った時と同じくらい感じるようにすることだ。

「くう！あああ……」

「次はライカだ」

「ハアハアハア……センパイ」

「じゃあいれるぞ！」

「くう！来たあ！お尻に熱いのが！」

オナニーで解れているアナルに熱く滾る肉棒を挿入するとニユルリと飲み込まれる。

普通なら裂けてしまうサイズの俺のチンコも確りと飲み込み、感じているライカのアナルは凄く気持ちいい。

バックでピストンをしながら覆い被さり美乳をもみまくる。

固くシコる乳首を摘まみ、感じる箇所を念入りに弄る。

マンコとは比べ物にならないアナルの締め付けに抗い、押し広げてパンパンと腰を振る。

だがマンコが弄りにくいので背面座位の姿勢になり、片手は胸を、片手はマンコをかき回して性感帯を犯し尽くす。

M度がそこまで高くないライカは痛みでも感じる志乃やジャンヌとは違い普通にイカせる方が俺のチンコを気持ち良く締め付けてくれる。

うねり上がるアナルは最高だ。

マンコは掻き回されると愛液を垂れ流し、少量の潮を吹いては小さく絶頂するライカ、その度アナルの動きが激しくなりチンコに快感が走り抜ける。

そろそろ出したくなってきた。

「よし、出すぞ！ライカ！」

「お尻もおまんこも！良いのおセンパイッ！」

「フンッ！」

「ああっ！熱いのが中に出てるう！あっ！あっ！イクウウウウッ！」

ビクビクッ！と痙攣して潮吹きと共に絶頂するライカ、おれのチンコも大量の精液を吐き出し、快感にうち震える。

射精がおわり、一度チンコを抜くと精液が逆流してアナルから溢れる。

前の穴も後ろの穴も液体を垂れ流す姿はなんとも淫靡で、それを見ているとまたチンコが立ってきた。

もう一度アナルも良いが今度は二人を重ねて井プレイだ。

女友達とこうしてセックスを共にするのは二人とも幸せだろう。

「ああっ！擦れてるっ！」

「クリトリスがつ！ああっ！」

ピッタリと合わさった二つのマンコの間に挿入し愛液で滑るそこを奥まで前後する

とクリトリスに触れるのが分かる。

それで感じる二人はどちらからかキスを始め、潰れた胸を擦り合わせてオナニーをしている。

ムニムニと形が変わる4つの美巨乳の間に手を差し込み、乳首を探し当てては摘まんだり弾いたりしてやると愛液の量が増えて滑りも良くなる。

三位一体のオナニーのようなこのスタイルは視覚効果を楽しむものだ。

目の前でイキまくる美少女が二人、それが俺のチンコの虜になっていると思えば男としては最高だ。

「ああっ！イクッ！擦れてイクのお！」

「んんっ！プア！火野さあん！」

「よし、イクゾッ！」

「ああああああんっ！イックウウウウウうう！！」

同時に絶頂した二人の声は重なり、そのマンコの間には精液を吐き出した。

上下から潮がチンコにかかり、精液が付いたチンコを清める。

息も絶え絶えな二人を見て、上になっている志乃の腰をつかむと一気にマンコに挿入した。

「ああああああっ！おちんぼが中につ！」

「ああんっ！センパイ、私もちんぼぐださい！」

「仕方ないなあ」

「あはあっ！来たあっ！」

交互にチンコを差し込み、一突きごとに二つのマンコを行き来する。

締め付けも、襲の数も違う二種類のマンコは子宮口を突かれると滑る膈内で俺のチンコを締め付け快楽を貪る。

抜くときに吸い付いてくるマンコの襲が捲れる、そしてポタポタと愛液が垂れてくる。

精液の溢れる志乃のマンコは混ぜかえる音をぶちゅぶちゅと響かせ、まだ射精してないライカのマンコはキュンキュンと膈内でチンコを締めて快感を表している。

「んああっ！もうっだめえ！イクッ！」

「私も……イクうっ！」

「そらっ！イクッお前たちっ！」

絶頂が近づき、二つのマンコの締め付けがキツくなる、更にスピードを上げたピストンで二人に快感をくれてやる俺のチンコ。

「イケえっ！」

「んあああっ！イクウウウウウッ！」

ギューと今まで最高の締め付けを見せるマンコに射精しながら二つを突き、それぞれに半分ずつ精液をはきだした。

ドロオと流れ出る精液が溢れ、シーツが汚れる。

胸もマンコもクリトリスも、アナル以外は全て使った絶頂は凄まじく、二人は痙攣を繰り返した後気絶した。

「はあ、最高だったぜ、次はガーターをつけてエロエロプレイだな！」

半開きになって二人の口マンコを使うと気絶しているのに無意識に残り汁を吸う二人、それでお掃除フェラを済ませた俺は重なる二人を分けて、両側に侍らせて抱き締め。

それから二人の柔らかな胸を両側から楽しみながら、マンコを弄って起きるまで遊ぶのだった。

スパキンと不死の吸血鬼

遂に任務が始まった、理子の作戦に従い、俺達はブラドの所有物件の一つ、横浜の紅鳴館について。

今回の目的はただひとつ、理子の母親の形見である十字架をパクることだ。

ブラドに取られてここの地下倉庫に隠されたそうなので、盗らないといけない。

任務の帰還は二週間、その間俺とアリアはここにホームヘルパーとして雇われることになっている。

そしてある程度の信頼を得つつ最終日に奪還するのが原作の流れなのだが、この作戦は実は失敗する。

十字架を盗るのは良いが実はすり替えられた偽物で、任務を終えた原作の俺とアリアが理子に渡す際に後をつけていたブラドが現れてバトル、その後は俺は吸血で能力をコピーができるだのなんだの言ったブラドが兄貴の金一からコピーしたHSSを使ってワーブ進化、アニメ版ならデカイ狼男見たいな見た目になって銃弾を受けてもすぐ再生する化け物に。

ネギ〇のエヴァたんほどじゃねえけどそこそこの怪力で攻撃してくる。

しかし！エロ主の俺がここまで時間をかけるはずもない。

ピンポンしてブラドが人型に化けた姿である小夜鳴（武偵高の非常勤講師、ロリコン）が出てきたら暗示をかけて興奮させてワープ進化させてイキなりバトル、進化中は攻撃しないのがお約束なのでブラドに変身中に本物の十字架を盗んで一旦離脱するまでが俺の真の狙いだ、その後は出所したジャンヌから正確な位置を教えてもらった奴の弱点である聖痕（ステイグマと読むんだよ！）を狙って攻撃だ！三ヶ所はジャンヌに教えてもらい、最後の四ヶ所目は口を開けた場所、舌の上にあるのは知っているので散弾銃を持ち込んだからある程度理子とアリアに戦わせて危なくなれば使う予定。

だって俺だけで勝つと理子とのフラグが立たないもん！

さて、説明は終了だ、いっちょやったるでえ!!

うおおおおおおお！

「バカな！この俺様があ！」

「ブラド、お前の敗因はただひとつ、俺たち人間を侮った事だ！」

弱点であるステイグマ！を撃ち抜かれたブラドが崩れ落ちる。

その正面には最後のステイグマを撃ち抜いた理子の姿がある。

俺達は三人とも服がボロボロになる死闘を繰り広げ遂にブラドを倒したのだ。

ダイジエストでお送りしよう。

まずは作戦通りに十字架（モノホン）を盗った俺、変身中のブラドを見て、驚愕するアリアと錯乱する理子。

直ぐに落ち着いたアリアにブラドの足止め、殿を任せ錯乱している理子（カナの変装）を一旦外に連れ出して落ち着かせる。

暴れる理子にキスをして黙らせ（HSSになれて、カナにキスした気分で2倍お得！）盗んだ十字架を「良い子だ……」とか良いながら手渡す。

驚く理子を背に颯爽と舞い戻った俺はアリアと協力プレイでブラドの足を止める。

暴れるブラドを華麗にいなす俺達は理子が来るまで時間を稼ぐことができた。

そこからは奇跡の逆転劇が始まる。

……とまあそんな感じで今に至る。

「勝った……」

「あ！」

「おっと、大丈夫かい？ 理子」

「キー君……」

疲労でふらついた理子を紳士的に抱き止め震えるその手を握る、アリアが驚いたが無視。

ぎゅつと握り返してくる理子に胸キュンな俺はそのまま身体を抱き締めて落ち着くの待つ。

それが終われば、やられて小夜鳴に戻ったブラドをアリアが警察署にルンルンでしょつぴいて行ったので理子と手を繋いで武偵高に帰った。

帰りの電車では作戦がメチャメチャになったと笑い話になり笑顔に。

落ち着いた理子を家にお持ち帰りしたのであった。

さあ、セックスするぞおおお！

「キー君……」

「理子……」

ハアイ！理子と一晩寝て、今からやつとセックスが始まるよ……甘々な雰囲気なのは納得いかんが最後には絶対アへ顔ダブルピースだ異論は認めん!!

「んっ……」

「んちゅうっ……チュツ……んんっ……」

ゆっくりと顔を近づけ舌を絡めるキスをする。

実は寝ている間にジャンヌに使ったのと同じ媚薬を飲ませているのでゆっくりと感じ始め最後はイキまくるハズ！

お互いの唾液を交差し、舌を吸い合うキス。

理子は目をぎゅつと閉じて緊張しているのでそれを解くために頬を撫でたりしてやる。

緊張が解けてきたらキスを激しくする。

舌を絡めてねぶり歯茎を一本一本擦るように舐めていく。

蕩けるようなキスを激しく続けていき、まずは胸を揉んだ。

ディープキスは続けたままゆっくりとブラジャーを外し、現れたのは小柄な体には驚きのサイズの胸。

まろやかでマシユマロのようなそれをゆっくりと揉んで掌で弄ぶ。

「んちゅっ……んんっ！プア！キー君……」

頬を朱に染めた理子は胸への愛撫で感じてしまいキスを止めると恥ずかしそうに俯く。

それにすらエロスを感じる俺はゆっくりと理子の身体をベッドに押し倒して愛撫を続ける。

コリコリに勃起した乳首を唇に含み舌でコロコロと転がし片手で摘まむと小さく喘ぎ声を出す理子。

もう片方の空いた手はハニーゴールドのパンティに守られた秘部を下着の上から擦る。

すると下着が漏れ出た愛液で湿っていた。

「理子……こんなに濡れてるぞ？」

「あ……それは、んっ！」

言い訳などさせるわけもなく乳首とマンコの責めを再開、下着をずらして指を入れてやればとろとろマンコが指を追い出そうと締め付けてくる。

くちゆくちゆと音を立て始めた自分のマンコに理子が気づき、顔が真っ赤に。

指マンでほぐれたのを確認したのでクンニで責める。

俺がマンコに顔を近づけて舐め始めると感じながら頭を押さええてくるので逆に押し返してマンコを舐める。

ぺちゅと音をわざとらしく立てて肉ピラを刺激しあてがった両手の親指でマンコを開けば愛液が糸を引いた。

細かく実況して理子を苛めながら責め続ける。

「んあっ！舐められてる」

「じゅるるっ！じゅるっじゅぶぶぶ！」

「ああっ！くああっ！」

音を立ててマンコに吸い付き舌でれろれろと肉ピラを弄び、丸めた舌先を突き刺して愛液をじゅるると吸いとる。

感じている理子はどんどんマンコから愛液を垂れ流してくれるので喉が乾いていた俺としては嬉しい限りだ。

恥ずかしいのか俺の頭を足で挟んでくるのでムチムチの太ももが気持ち良い。

「んあつ！ああつ！ダメっ！イクツ！」

「じゆるるるるるっ！」

「アアアアアアッ！」

思いきり吸ってイカせてやると潮を吹いたのでゴクゴクと飲み干した。

「ハアハアハア……ああつ、イツちやった……」

「ずずず……ご馳走さま」

しつかりと飲んだ俺は理子の身体を上へのセシックスナインの姿勢になった、フェラさせるためにだ。

「凄なおつきい……」

「理子、フェラするんだ」

「う、うん。……はむっ、じゆるるるるるっ！じゆるりっ！」

普段エロエロな理子だけはある。

はじめてにしては上手なフェラは、俺の亀頭を舐めたあとゆっくりと口に啜えていき、うねる口内で舌を絡ませて舐めてくれる。

裏筋もカリも大胆に舐めるそのフェラは中々だ。

しかし負けん気が強い理子は俺の余裕の態度を見て更なる行動に出る。

玉袋を揉み始めたのだ。

熱を持つそこをふにふに揉みながらのフェラはヤバイ、理子の柔らかい口内と舌に加えひんやりした手による玉を掌でゴロゴロ転がすマッサージュは射精感を煽る。

これは負けていられん、俺も理子をイカせようとクリトリスの責めを始めてマンコを舐める。

びちゃびちゃのマンコを舌で舐めあげ、とろとろと溢れる愛液を吸い上げてクリトリスをコリコリ噛む。

媚薬の効果もあり感度が高くなっている理子はビクビク震える度に小さくイッてる。

淫らな匂いのマンコはヒクヒク痙攣して愛液を垂れ流している。

「ずずずっ！じゆるっ、ああっ！理子のおまんこが……」

「じゆるるるるっ！じゆるりっ！ずずずっ！ちゅううっ！」

お互いのマンコとチンコを責めあうが俺の方が何枚も上手だ。

イキまくる理子のマンコはヒクヒク潮吹きを何度もするので濡れに濡れている。

「くうっ！ああっ！イクウツ！」

ビクツ！とひととき大きく痙攣した理子は短く強い絶頂で達した。

力なく崩れた理子の下から抜け出た俺は腰を掴んで膝だちにするとう頭をシートに押

し付けている理子に確認せずにチンコをぶちこんだ。

「……………ッ!!アアアアアアッ!」

いきなり入れられた理子はシートを握りしめ、一瞬の絶頂に耐えようとするが、さすがピストンを開始して休ませない。

熱くうねる膣内をチンコで突いて広げると愛液がボタボタ溢れて落ちる。

腰を引く度にヌメヌメの襲が吸い付いてくるので膣内が捲かれて更なる快感を理子にもたらず。

もちろん俺のチンコも処女を奪ったマンコの強烈な締め付けに快感が走り抜ける。

パンパンと腰を叩きつけ弾ける愛液が俺の下腹部を濡らした。

「あっ!あっ!あっ!あっ!あっ!」

「ふっ!ふっ!ふっ!ふっ!ふっ!」

奥まで届く俺のチンコに子宮口を叩かれる理子はそれに合わせて声をあげる。

シートを握りしめ目をぎゅゅと閉じてヨガる理子は俺の征服欲を刺激してくる。

更にピストンを激しくしてやるとマンコの締めまりが急に良くなる、絶頂が近いのだ。

「ふあっ!ああっ!いきっそうっ!」

「イケッ、イクんだ理子お!」

「クアアアアアアッ!イクウウウウウッ!」

子宮口を思いつきり突いて中に出すとマンコが強烈に締まり、理子が絶頂した。潮も吹いてるのだろうマンコからじゃばじゃば愛液が溢れてきた。

チンコに潮が当たるとの感触がするが、無視してピストンを再開、イッタばかりの理子をもっと気持ちよくしてやる。

「まっ、まってキー君！理子イッタ、イッタばかりなのに！」

前に這って逃げようとする理子の腰をガツチリ掴んでパンパンと腰を叩きつけて動きを止める。

捲れるマンコが快楽を生み出し、理子の腰は痺れるように快感のスパークが走っている。

チンコの締め付けがましても俺は腰を振り挿入を止めない。

殆ど力の抜けた理子の腰を無理矢理立たせて快楽に浸らせる。

「アアアアアアッ！アアアアアアッ！」

「気持ち良いだろ？理子」

「良いっ！いいよおっ！キー君！まんこがすごく良いのお！」

理性がとんだ理子に満足した俺は二発目を放った。

「アアアアアアッ！でてるっ！キー君のが中にい！」

マンコの奥深くにザーメンを放った俺は、腰の抜けた理子を仰向けの姿勢で貫いた。

グチュグチュと音を立てるマンコを理子の脇に手を突いて力強く貫いて叩けば俺の背に手を回した理子が足で俺の腰をホールドして密着する。

理子の巨乳が胸板に当たるのが分かり腰の振りのスピードをあげる。

マンコを貫かれた理子はすさまじい快楽に涙を流して耐えている。

「ふう、フウ！」

「ああっ！ダメっ！ まんこが熱いの！気持ち良いのお！」

キュンキュン締まるマンコは最高で再び射精する。

溢れかえるザーメンをチンコで栓をすることで塞ぎ、奥深くに龟头を擦り付けて膣内をチンコでグリグリとかき回す。

腰を回しながら子宮口を責めると理子が更に大きな絶頂に達して嬌声をあげる。

精液の坩堝と化した理子のマンコは俺のチンコを滾らせ再度挿入。

今度は駅弁スタイルでガンガンとマンコを貫いて理子をイカせる。

「ンアアッ！んああああっ！深いっ！」

もう一杯のマンコは突く度ブシブシと泡立ち、追加にアナルを指で貫けば締めりがもつと良くなる。

「お尻い！ダメっ！ほじらないでっ！」

「もつともつとイキ狂え、理子」

「ああっ！くああっ！ンアアアアッ！」

背のけぞらせて絶頂した理子が快楽に耐えようとして俺の鎖骨を噛んできた。

それすらもチンコを立てるスパイスに正常位に戻り上から腰を叩きつける。

「最後だ！イケエツ！」

「ンアアアアッ！キタア！凄いのがきたあ！」

「くうううっ！」

「イクツ！イクツ！イクツ！イククウウウウウっ！！！」

今日一番の締めりを見せるマンコに俺の射精の快感も最高のものが訪れる。

互いの身体を溶け合わんばかりにくっつけて奥で射精した俺はチンコを引き抜いた。

途端にゴボリとザーメンと愛液が混ざったそれが溢れてきた。

「ハアハアハア……凄かった……」

「気持ちよかったよ、理子。これからも頼む」

「うん、うん！好きだよ、キー君……」

おお、最後に良いことを言った理子は気絶した。

仕方ない、意識がないならこうしてと。

気絶した理子を久しぶりに使う影のステルスの影の触手でダブルピースのポーズに。

アへ顔は……イキ顔のままだからこれで良いな。

「はいチーズ……おおっ、とれた！」

念願の理子のアへ顔ダブルピースだ、これはしばらく弄るのに使わせてもらおう。

「さてと、まだ終わりませんよ！」

気絶した理子を風呂場に連れて行ってアワアワプレイで遊び、チンコをマンコに突っ込んで快感で叩き起こした俺はその後は何度理子が気絶してもイカせては起こすを繰り返してお仕置きするのだった。

金銀井は最高！

東京武偵高第三男子寮の一室……。

熱気のこもるその部屋では男が一人、女が二人の計三人が今日も享樂に耽る……。

「あっ！熱いっ！奥が熱くなつてっ！」

「んんっ！入ってるっ！」

ども、スパキンです、今俺の上にはジャンヌが跨がって腰を振っている。

ぱちゅぱちゅとマンコが水音を立てて俺のチンコを飲み込んでいた。

俺の腹に手を突いて一心不乱にチンコを貪るジャンヌの汗で髪が張り付いたうなじがエロい。

その隣では理子が四つん這いで尻をこちらに向けていた。

俺の右手を掴んで自ら腰を振っている、こちらは指を軽く動かすだけで良いので手マンも楽だ。

グチヨグチヨの理子のマンコは指でGスポットを弄る度に締め付けて愛液を垂れ流す。

「マスターのちんぽが！私の中にい！」

「んんん……アハッ! 理子のおまんこご主人様の指を飲み込んでるっ!」

金と銀二人の美少女が淫蕩に耽り快楽に浸っている姿は俺のチンコをいきり立たせた。

「ああっ! 指抜かないでえ」

「ハアハアハア、マスター、何をつ!」

指を理子のマンコから一度抜き、上で踊るジャンヌの腰を掴む、そして勢いよくチンコを突き込んだ。

「ッ!! アアアアアアッ!」

イキなり最奥を思いきり突かれたジャンヌは力が抜け、俺の体に倒れこむ、それでも腰を動かし熱いところのマンコをグチュグチュとチンコで掻き回せば頬を俺の胸に押し付けて耐えている。

「くう! ああっ! はげ、しいっ!」

「理子、ジャンヌのアナルを弄れ」

「ハアイ♪」

「理子っ! まっ! ンアアアアッ!」

「くっ! 締まるな」

俺の上につつ伏せになる形のジャンヌのアナルを命令通り弄る理子、指でアナルを掻

き回されたジャンヌのマンコが更に俺のチンコを締め付ける。

うねる膣内の締め付けは凄まじく、チンコを引き抜く度吸い付いてくるので褻が捲れてしまう。

それに合わせて愛液もボタボタ垂れるが理子が手で掬ってアナルに塗り込み、潤滑油がわりに使用する。

「お尻っ！ほじられてっ！マンコがっ！」

「ああ、可愛いよジャンヌ……」

涙を流して感じているジャンヌを見た理子は恍惚とした表情で責めを激しくする。

それに合わせてマンコの締めまりがよくなるものだから腰の振りが自然と速くなる。

「ンアッ!!アアアアアアッ!イクッ!」

「イケッ、ジャンヌ!」

「んあああああっ!イククウウウウウっ!!!」

絶頂するジャンヌの子宮口にピツタリ龟头をつけて射精する、収まらないザーメンが溢れるが掴んだ腰を動かして先端をグリグリしてマンコの中に塗り込んでやる。

ビクビクと感じているジャンヌの首筋にキスをし、ティーバックをずらして挿入していたのでチンコを抜くとそれが溢れたザーメンを受け止めた。

俺の上で息を荒らげているジャンヌを退かしたら今度は理子が跨がる。

「クフツ！次は理子だよっ！主人様っ！」

そう言つてゆっくりとチンコを飲み込んでいく理子のマンコ、愛液が垂れているがそのまま奥まで収まった。

コツン、と先端が子宮口をノックすると身体を震わせる理子、腰の位置を調整したあとはゆっくりと自分で腰を振りだした。

「ああっ！良いっ！主人様のちんぽっ！」

熱々のマンコが熱々のチンコをズブズブと飲み込んで受け止め、マンコの中はチンコを啜え込んで離さない。

理性の蕩けた表情で腰を振り、喘ぎ声をあげる理子はまだ処女を奪ってから2日しか立っていないのに既に俺のチンコの形を覚えて感じている。

滑る膣内をカリで擦りあげれば嬌声をあげてヨガツている。

「んあっ！理子、このちんぽ大好きい！」

「ならもつと味わいな！」

腰を掴んで引き込みマンコを更に深く貫く。

エロエロのマンコは啜えて離さない俺のチンコで更に感じて締め付ける。

グチュグチュの中を回して楽しめば理子も感じて叫ぶ。

絶頂から復活したジャンヌのアナル攻めも始まり理子は性感帯の悉くを弄ばれる。

腹についた手で身体を支えていた理子だが、力が抜けて倒れてきたので乳首に吸いついた。

「お尻も乳首もまんこも良いのお!!もつと弄って!」

「ちゅうううっ!ちゅばちゅばっ!」

「仕返しだ、理子、アナルで感じるが良い!」

「あつ!ああつ!理子、イッちゃう!イクッ!イククウウウウウっ!!!」

一際強く腰をぶつけると一気に理子がイッた。

そのマンコに収まらないザーメンを流し込み、全て吐き出す。

イッている最中の理子を、先程の仕返しにとジャンヌはアナルをほじり指で責め立てた。

ぎゅうぎゅうに締まるマンコに再び射精が始まり、2連続で中出しを決めてしまった俺は、一度の絶頂で気絶した理子を横に寝かせてジャンヌの方を向く。

そこには下着を脱いだジャンヌが自らマンコを指で広げてこちらを誘っていた。

クパアと広がるマンコの入り口で愛液が糸を引く、その姿はエロくて、チンコのたぎりが増す。

四つん這いでこちらを誘うジャンヌのマンコにチンコをあてがうと腰を振って愛液

を塗り込んできた。

それだけで射精しそうになるが、我慢に成功した俺はその細く引き締まる腰を掴み、一気に奥深くにチンコを突き刺した。

「くううっ！奥にきたあ！」

パンパンと腰を振って互いの性器を重ねる。

吸い付いてくるマンコがとろとろで気持ちよく、くびれを撫でる手にはすべすべの肌がつとりとした感触を返してくる。

「深いいつ！奥に刺さって、気持ち良いですっ！ますたあ！」

呂律が回らないジャンヌはうわ言の如く俺をマスターと呼び、腰を振って歓喜と快楽に浸っている。

身体を支える手と膝が折れてうつ伏せに倒れたジャンヌに覆い被さり、勢いよく腰を振ってマンコを貫く。

シーツを握りしめて快感に耐えるジャンヌはエロく、その手に上から手を重ねて握ると涙を流してこちらを振り向く。

その陶醉した表情に満足した俺はご褒美にマンコの奥深くで射精した。

「熱いのが中に出てますう！」

キュンキュン締まるマンコからゆっくりとチンコを抜くと、吸い付いてきて最後には

チユボンと音を立てるほどだ。

今度は上を向いて気絶した理子の上にジャンヌを運び、二人を重ねる。

最近お気に入り入りの井スタイルになった金と銀の少女、二人の愛液でびしょ濡れになったマンコの間にはチンコを突き刺した。

「ああっ！擦れるっ！」

「キャアッ！熱っ！」

イキなりクリトリスを熱いチンコで擦られた理子は飛び起き、自分の上に乗ったジャンヌを見て驚いている。

だからだら垂れる愛液が潤滑油の代わりになって俺のチンコを滑らせ、時折当たるクリトリスがアクセントになって気持ち良い。

ピンク色の綺麗な肉貝のプリプリした感触を楽しみ、射精した。

二人の腹の辺りに大量にぶちまける。

それを二人とも手で掬って舐め始めた。

「んちゅ……マスターの精液美味しい」

「ペロペロ……んふっ、あまーい♪」

それを見てるとまた出したくなったので下になっている理子のマンコに挿入した。

とろとろのマンコは俺のチンコを迎え入れ吸い付く。

余った手はジャンヌのアナルを弄って感じさせ、ヒクつくクリトリスが指で摘まむと潮を吹いた。

理子とジャンヌは舌を絡めてキスをしているため、こちらに音が聞こえる。

身体を擦り付け合い全身で感じている二人は汗を大量にかいて一心不乱に快楽を味わっている。

「んちゅんむっ……んんっ!」

「ぺちやつぺちやつ……んんう!」

美少女が絡み合っているのは目の保養になる。

そんなことを考えながら俺は理子のマンコに射精した。

ジャンヌとディープキスをしながらイッている理子は我慢するためか更にジャンヌとくっつき、激しいキスで垂れた唾液で口元がベトベトだ。

次はジャンヌのマンコに挿入した俺は激しく奥を突いてセックスを続ける。

下ろした髪が綺麗な背中にひろがり色っぽい姿のジャンヌは一突きごとに締め付けを増すマンコで感じて何度もイッている。

もはや愛液でびしょ濡れの股周辺はちよつと触れば糸を引くほどベトベトだ。

むんむんと女の匂いを撒き散らすジャンヌのマンコを突けば、何度でもイケそうな極上の締めまりを見せて俺のチンコを楽しませる。

イキ狂うジャンヌに復活した理子がその胸を責め始め、乳首を突然摘ままれたためマンコから潮を吹いた。

潮吹きの間もピストンを止めずにガンガンと突いていると、キスで声を出せないジャンヌが背をそらしてかくかくと震えて絶頂した。

しかし、俺がまだイッていないのでピストンを激しくしてやると理子の顔の横を叩いて暴れ始めた。

感じすぎているのか快楽から逃げ始めたジャンヌを二人で押さえつけ、更に責めると、締まったままになったマンコをチンコで押し広げて開拓してやる。

そしてアナルの責めを再開したら指をいれた瞬間激しく絶頂した。

「ヒイッ！ああッ！ああッ！アアアアアアッ！イクッ！イククウウウウッ！！！！ンアアアッ！」

ブシュブシュと潮を吹いて俺の下半身を濡らすマンコは俺のチンコを啜えたままの状態ですごく痙攣している。

一際強い絶頂が過ぎれば途端に力の抜けたジャンヌは気絶して失禁してしまった。

「あちゃあ、漏らしたか」

「ご主人様あ、ジャンヌ気絶してるよ？」

「シーツクリーニングにだすか？」

ピクピクと電気ショックを食らったみたいになってるジャンヌを風呂場に運び、掃除を理子に任せ、俺はズブリとチンコを突っ込んで叩き起こした。

「ハイッ!……あ、私は?」

「起きたか、今からお仕置きだ」

「え、マスター、何をっ!ンアアアアッ!」

背面座位で貫いたマンコをグチュグチュ掻き回しながらシャワーをクリトリスにかけるとイキなりイッた。

後ろ手に引いた手を引っ張りガンガンと突けば緩んでいたマンコの締めまりが戻ってきた。

そのまま気絶しては快感で叩き起こされるのを繰り返すジャンヌの中に二回ほど出したところで理子が入ってきたので三度目の中出しで気絶させる。

そして手を離すと床に倒れたジャンヌは潮を断続的に吹いて痙攣している。

お仕置きにバイブを突っ込んで放置して、今度は理子のマンコに立ちバツクでチンコを挿入した。

パンパンとぶつかる度にボタボタ溢れる愛液が下に転がっているジャンヌの顔にかかっている。

壁に手を突いて尻を突き出している理子の胸を手で揉んで乳首を転がす。

後ろから抱き締める形でピストンと胸の愛撫を続けると理子も絶頂した。

「ああつ！おっぱいがいいっ！まんこももつと突いてっ！」

「くうっ！出すぞっ！」

「ああつ！ダメっ！イクッ！イククウウウウっ!!!キヤアアアアッ！」

悲鳴のような嬌声をあげてイッた理子は最後に舌を突き出してだらしない表情で気絶した。

気絶した二人の身体を洗ってやった俺はキッチンとタオルで水滴をとり、ベッドに戻る。

ジャンヌのあれもキッチンと片付けられ新品のシーツに変わっているのを確認して二人を抱き締めながら眠りについた。

ブラドが思ったより早く片付いたので余った時間をこうして調教に当てている。

次の敵はパトラと兄の金一、こいつらにも絶対に勝つてとつとイ・ウー戦を終わらせてやるぜっ！

調教は始まったのだっ!

オツス、おらスパキン！今から学校に行くぜ！

とまあ、アホな考えは置いて今日は理子とジャンヌを連れて登校中だ。

白雪があと2週間くらいは星伽から帰ってこないなので二人に家事をしてもらおうと同棲中だからなのだが、もちろんセックス三昧の毎日だ。

締まりの良いマンコは最高さっ！

でも、ブラドを初日で撃破したせいでカナとの接触まで一週間は空いてしまった。

理子との取引でブラドを倒したらカナの情報を話すと約束したんだが。

まあ、空いた時間はやりまくって英気を養おう、英雄色を好むと言いますし。

そんな感じで校舎についた俺は違うクラスのジャンヌと別れて理子と教室に入った。

さあ、今日も学校の始まりだ！

だが、しかし。

(ん?)

席についた俺は衝撃的な物を発見した。

(こ、これは!?)

置き勉強した教科書を確認していると、そこには一枚の手紙が……。

ピンク色のそれは見紛うことなくラブレター。

それをすかさずポケットの影の空間に封印、周囲を確認した俺はトイレに走った。

スパキンになってから何度も貰っているが中々この興奮は我慢できない。

(よし、個室が空いてる!)

駆け込んだ個室で手紙をゆっくりと開く俺、妙に辺りが静かで、自分の心音が聞こえ

る。

(ドキドキ……!?)

『遠山くんへ、放課後通信科の校舎裏に来てください。お話したいことがあります。』

(……よっしやあ!キター!)

結果は案の定ラブレター、差出人の名前がないのが気になるが、達筆で綺麗な文字は俺の予想からすると女の子、それも美人な筈だ。

(よし、放課後まで頑張るぞっ!)

こうして俺の一日が始まる。

さあ! やつて来ました情報科棟の通信科校舎裏。

ドキがムネムネな俺っちは早速愛しの彼女の姿を確認する。

あれ? 誰もいないではないか?

誰もいない、姿が見えない、それに俺は焦る。

まさか女子にからかわれたのか? と。

よくある悪戯で偽のラブレターでおびき寄せた男子の後をつけてからかうのがあるがそれに引つ掛かってしまったかと焦る俺。

しかし、そんなスパキンのセンサーに何者かの反応が出た。

北北西そのこの建物の角! 見切ったあ!

ダツシユで近づき、逃げ出そうとする犯人を捕まえた、この感触は女子だ、それも中々のサイズの胸、コイツが犯人か、グヘへ犯して性奴隷にしてくれる。

顔をしたに向けている犯人に俺は脅しをかける。

「おっと、動くんじゃない」

「!?」

「よし、顔を見せてもらおうか」

「あつ……」

「なっ!」

(な、んだと!)

ゆつくりと振り向いたのは……中空知だった。

長い前髪で目元が隠れた彼女は中空知美咲、通信科（コネクト）の2年生で、よく任務の際のオペレーターをしているので何度もお世話になった。

そんな彼女は素晴らしい美声でいつも俺たち強襲科のバトルファイターを導いてくれる……のだが。

「あつ、と、とおやま!やま!遠山くん!」

このように、通常は上がり性の女で、通信機とか電話機を通さないと人と話せないと言う変人だ。

お陰で、Sランクの実力があるのにAランクに甘んじている。

「何故中空知が……」

「あつ!そ、それは!わた、私が!」

私が?アタフタする中空知のむちゃくちゃな話し方に困惑するが、その視線が向いてる方を見て絶句した……まさか!

「ああ、この手紙の主は中空知だったのか?」

「……………」

あれ? 違うの? ブンブン頭を横に振る中空知は否定した。

並ば犯人は……………あれ? でも。

「じゃあ、何でここにいるんだ?」

「そ、それは!」

「あ、ストップ。このままじゃお前話せんから……………ほれ、通信機」

「あつ! どうも!」

俺がポケットの影空間から通信機を出して渡すと、すぐその木陰に隠れる中空知、俺も同じタイプのを装着して待っていると通信が来た。

『コホン、先程は失礼しました。遠山くん』

「ああ、構わんよ。で、何でここに?」

『はい、実は……………』

先程とはうって変わってアナウンサーばりの美声で話始める中空知、そしてここにいた理由がわかった。

なるほどね、手紙を持った俺を発見して興味がわいたから後をつけて来たらしい。

何で興味が湧いたかは……………原作と同じでキンジに惚れたんだろうな。

ククク、これは利用しなければ。

通信機を外した俺は木陰の中空知に近づく。

「おい」

「え……キヤア！」

振り向いた中空知の手を取り木の影を使つて影のステルスの力で移動する。

ズブズブ沈んで、一瞬で移動したのは俺の部屋のベッド。

そこにポイと中空知を投げ、俺は服を脱いだ。

「と、遠山くん!? こ、ここは? そ、それに脱いでっ!」

「あーもう、話が進まん、ハッ!」

強烈な暗示をかけて俺とは普通に話せるようにする。

「……遠山くん、何で部屋に?」

「中空知……」

暗示の効果で、通信機越しの時と同じしゃべり方に戻った中空知はキリリとしたクルビューティーに返信する。

元は白雪たちに負けない美人なのだ、落ち着けばこうなるのは当然。

「何ですか?」

「おまえ、俺のこと好きなのか?」

「……それはっ!」

焦ってるなあ、まあ、確信を持つてるから強気に聞いたので焦るのもわかる。クールビューティーモードの彼女でもアタフタするが、

の形の良い頤を指でクイツとあげて手で前髪を鋤き、顔を除けば顔が少し赤くなっ
た。

「何故、それを……」

「ジャンヌに聞いた」

「まさか、そんな……」

嘘をついて信憑性をあげることがを言えば更に焦る、この状態の中空知は思考が纏まっているので変に時間を潰すことはない、ここは一気に責めて手込めにしてやる。

俺は視線をさ迷わせる中空知の唇をイキなり奪った。

「んんっ!」

固まる中空知の唇を割って舌を滑り込ませ、歯茎を舐める。

更に舌を吸い出して絡めると唾液を交差するディープキスをした。

「んちゅ……じゅるるんむっ」

「んんっ!?!んんんう!」

「……はあ。中空知、いや、美咲」

「ハアハアハア……ええ？」

名前を呼び直して意識を傾け、脳に染み込ませるように殺し文句を告げる。

「お前を、今から俺の女にする」

「え?! いやっ、ですが!」

「確かにジャンヌや白雪たちも俺の女だが、お前に拒否権はない!」

「!!」

美咲を押し倒した俺は彼女の手を頭の上で組ませて押さえつけ、再びキスをする。

暴れる彼女だが舌を噛んでこないで本当は嬉しいんだろう。

ためしに数分もキスをして、媚薬効果のある唾液をコクコクと飲ませれば。

「お前は俺の女だ、良いな?」

「……はい」

この通りだ、さあて、クールビューティー美咲を犯すぞっ!

「あつ……」

「胸が良いのか？」

「んっ！それは……んんっ！」

武偵高のセーラー服の下から手を入れた俺は、美咲の胸を下着の上から揉む、柔らかくてスベスベな胸は俺の掌で嫌らしく形を変える。

あぐらをかいた膝の上に美咲を座らせ、後ろから抱き締める形で揉んで、首筋に顔を埋めて匂いを嗅ぐと恥ずかしそうに顔を背ける。

「ほら、乳首が立ってる」

「んんっ！あつ！ああつ！」

下着を外して直接揉むと勃起した乳首がコリコリに立っており指で転がせば感じて喘ぎ声を出す美咲。

任務の際にお世話になった美声が嬌声として聞けるとは……。

チンコがむくむくと立ってきたので、座っている美咲の尻にスカート越しに当たった。

「あつ……固いのが当たってる」

「こいつを入れるから、ちゃんとほぐしてやらないとな」
「……」

そう囁くとチラリと尻に当たるチンコを見て、何と後ろ手に握ってきた。綺麗でひんやりとした手が、俺のチンコを優しく掴み撫でてくる。

それにますます興奮してしまつて更にチンコがむくむくと大きくなつた。

「うそっ！まだ大きく……」

「美咲の手が気持ち良いからさ」

「……私の手で感じてくれるんですか」

また照れだした美咲の胸を揉むのを再開し、柔らかいおっぱいを掴むと手が沈むほどのボリユームがわかる。

固くシコる乳首を触ればピクピクと反応する美咲、そのスカートの中を触つてみれば。

「おいおい、もう濡らしたのか」

「んっ！やあ……そこは」

「ふふふ」

スカートに手を入れて下着の上からマンコを触れば既に濡れているのがわかる。紫のセクシーなランジェリーのクロツチの部分は指で押せば湿った感覚がする。

何度も指先で擦ると堪えきれず声をあげる美咲の顔の前に愛液でねばねばの手を持っていて見せる。

「ほら、美咲のマンコはこんなに濡れてるよ」

「やあ！ちが、違うんです、私はんう！」

「何がちがうんだ、こんなに濡らして、嫌らしいマンコだな」

今度は下着に手を入れて直接マンコを刺激し、とろとろ愛液を漏らしてる美咲のマンコを態と音をたてて掻き回す。

浅い部分をグチュグチュと指で刺激すれば顔をいやいやと振って羞恥する美咲、しかしそのマンコは実際に濡れぞぼっている。

「ほら、こんなに音をたてて」

「んっ！ああっ！んんんっ！」

羞恥を煽りながら指マンを続けて、ピンとクリトリスを弾くと美咲が小さくイッた。

「もうイッたのか」

「ああ、今頭が白く……」

「次はと」

「キャッ！」

グリーンと身体の位置を変えてシックスサインになる。

そして美咲の目の前にチンコを突きだした、俺の前にはヒクヒクしているピンク色で処女特有のピツチリ閉じたマンコがあった。

「おつきい……」

「それを舐めて奉仕するんだ」

「はい……ぺちやつぺちやつ」

「そうそう、全体を丁寧に舐めて……啜えろ」

「ああっ、大きい……んむっ、んんっ、じゆるるっ！」

大人しく言うことを聞く美咲は裏筋やカリ、たま袋まで舐める。

最後にゆっくりとチンコを啜えてフェエラを始めた。

もともと知識は有ったのだろう、まだ拙いが舌使いは間違つてはいない。

「そうだ、口の中でも舐めてねぶるんだ」

「んんっ！じゆるるっじゆるりっ！……んんっ！」

懸命なフェエラをしている美咲のマンコを、指で弄り舌で舐め回す、指で開けばくぱあ
と糸を引いてヌルヌルのマンコの奥が見え、舌を差し込んで吸い上げると愛液が溢れて
きた。

「んんっ！んんっ！じゆるりっ！」

「くっ出るぞ！」

「じゅるるるるっ!っ?!!」

俺の精液を飲み込むのに必死な美咲のクリトリスをカリツと嘯めば美咲も絶頂した。

「っ!ア!!」

声にならぬ悲鳴を出してもどかしげに身体を振っている美咲、心なしか愛液の量も増した。

「ハアハアハア、う、あああ……」

「精液は美味しかったか?」

「ハアハア、は、はい、甘くて……」

うんうん、あの味は気に入ったみたいだ。

それを確認したので、お掃除フェラを命ずる。

キチンと尿道の残り汁を吸いとらせ、チンコの回りも舐めとらせて完了。

美咲が顔を話せば唾液でテラテラ輝く極太の肉棒が。

ギンギンのそれを見た美咲を、俺は押し倒して愛液の滴るマンコにチンコをあてがう。

ニチャニチャと擦り付ければ切なそうな声をあげて感じる美咲、汗でしっとりとした肌を手を這わせながら焦らす。

「あの……んっ!いれ、ないんですか?」

「ほしいのか？」

「あつ！ハアハア、それ、は……」

恥ずかしいのだろう、クチュクチュとマンコを擦るチンコに物欲しそうな視線を向けているくせに。

「あつ……」

「じゃあ、ここまでだな」

「そんな、どうして？」

「要らないんだろ？これが」

「あああ、それは、でも……」

切なげにヒクヒクするマンコからチンコを離せば何故と問いかけてくる美咲。

「自分からほしいと言わないと入れてやらないよ」

「でも、でも……んっ！」

「ほら、欲しいんだろ？この太いのが」

再びマンコに近づけ、今度は先端の部分をクチュリと埋める。

そこだけでもヌメヌメした締め付けをする美咲のマンコに腰を突きだしてしまいたいが本人が入れてくれと言うまではやらない。

「あ、すごい、熱くて……」

「此れが入ればもつと気持ちよくなれるぞ」

「もつと、気持ち良く……」

その一言で美咲の理性がぐらつき倒れる。

「欲しいです……」

「ん?聞こえないな」

「遠山くんの……欲しいです」

「まあ、合格にしてやろう」

まだ、もの足りんが俺のチンコも亀頭の部分を締められて早く入れたくて堪らなかつたので、美咲の腰を掴んで一気に突き込んだ。

「ツ!!アアアアアッ!」

「ははっ!良いしまりだっ!」

「んっ!ああっ!ンアッ!くうう!」

締まるマンコをばちゅばちゅ音をたてて貫き、奥深くを蹂躪する。

とろとろの膣内をカリで擦ればうねうねと締め付けてくる。

締めまりも吸い付きも良いマンコは褻も多く俺のチンコに絡み付く。

「んああっ!大きいのが私の中に!」

「気持ち良いだろ?ん?」

「ツ!!それはっ!」

ははは、こんなに感じる何て、美咲はMだな。

パンパンとチンコを叩きつけるときに乳首を痛いくらい摘まめば逆に感じる美咲はマンコの締め付けを強くする。

次はバックから突きたいので身体の向きを変えると、刺さったままのチンコでマンコが捻れ、美咲が嬌声を上げた。

「アアアアアッ!中が捻れて……ヒイツ!」

「なんだ?文句でも有るのか?」

「あっ!ああっ!あ、ありませんっ!」

バックで激しく突きながらパチンと尻を叩けばマンコの締めまりが良くなる。

キyunキyunと締め付けてくるマンコをガンガン腰を振ってチンコで押し広げると捲れた褌が絡み付いて気持ち良い。

ボタボタこぼれる愛液も尻穴に塗ってアナルを保持するのに使う。

「ああっ!お尻の穴!ダメです、遠山くんあっ!」

「遠山くんじゃない、ご主人様と呼べ!」

「ああっ!すいませんご主人様あ!」

逆らう美咲の尻を叩いて従わせ、叩かれているくせに感じているマンコをもっとつい

てイカせる。

感度がいいなあ、美咲は、媚薬も使ってないのに。

確かに媚薬効果はあるが理子やジャンヌに使ったのと比べると雲泥の差なのだが。

元が良いのだろう。

「んああっ！イクウウウウ！」

「まだ、俺は出してないぞっ！」

「ああっ！イッてるのに！突かないで！……キャア！」

また尻を叩けば黙る。

そうして何度も突きまくって中にだした。

「ああっ！熱いのが出てるう！」

これでバックで出し終わった。

子宮口にチンコを擦り付けながら中出するとビクビクと何度もイッている美咲。

次は身体を持ち上げて駅弁スタイルでマンコをグチュグチュと掻き回す。

「んああっ！深い！イグウ！」

「もつとイケ！」

「アアアアアッ！アアアアアッ！んああっ！止めてえ！んあっ！」

アナルに指を突っ込むと快感で黙らされる美咲。

その熱く滑る、愛液を垂れ流したマンコにまた射精した。

「出てる！また熱いのが！」

「次だ！」

正常位に戻ってピストンを始めると体に抱きついて耐えている美咲だが、子宮口突きまくっているのと快楽に耐えきれず、身体を離して逃げようとする。

「やあ！もうっ！イキたくない！んああっ！」

それを無理矢理押さえつけ、腕を引つ張つて奥を突くと絶頂する。

マンコの奥深くをずっと突かれている美咲は初めてだと言うのにイキ狂っていた。

二度の中出しで一杯のマンコもグチュグチュと掻き回されれば際限なく快楽を生み出し腰を蕩けさせる。

「また出すぞっ！」

「んああっ！イクウウウウ！イッチャウのおおおおお！」

ビュルビュルと中出しをされてイッている美咲は気絶しそうになるが、再びピストンが始まり意識を戻される。

「いやああ！！！」

「ふふふ、よがり狂うまで続けてやる」

こうして中空知美咲の奴隷としての人生が始まった。

「ああんっ！気持ち良いのお、ご主人様あ！腰が蕩けてるのぉ！」

「ククク、そんなに良いのか？」

「はい！もつともつと美咲の嫌らしいおまんこを搔き回してくださいあい!!!」

「いいだろう！」

「んあああつ！おちんぼきたあ!!」

あれから五時間、ずっとイカせ続けているが二時間辺りで美咲は堕ちた。

今では理性も飛んで快楽に溺れ、チンコに跨がって自ら腰を振っている。

チンコの形を覚えたマンコは気持ち良く、目の前で揺れる胸は揉むだけでイクほどに
感度が上がりきっていた。

「んあああつ！アアアアアッ！」

「ほら、もつと腰を振れっ！」

「おちんぼ！おちんぼお！」

あー、スゲエ締まって気持ち良いぜ、これで美咲も俺の奴隷、しかもDMだから肉便器だ、これからも使いまくってやる。

「んああつ！アアアアアツ！アアアアアツ！」

「もうずつとイッてるな、美咲？」

「ンアアアアアアアツ!!!」

「もう聞こえてないか」

射精をしているのに腰を止めずに振っている美咲は完全に快樂漬けた。

これは気絶したら戻してやらねば。

それから更に一時間、体力が完全に切れて美咲が失神するまで腰を振り続けた。

どれだけイッても締まりの落ちないマンコは白雪たちに負けぬ逸品だったと言って
おこそう。

堕ちた教師～スパキンの罭～

「んむっ……んちゅっじゆるるっ……ちゅうううっぺちやつぺちやつ……」
「あ～～気持ち良いぜ」

お久し振り、今日も元気なスパキンだよ。

今、俺は朝一のパイズリフェラをさせている。

誰にかって？それは簡単、先日ハーレムに加わった肉便器の中空知美咲さ！

白雪並みの大きさの美巨乳に挟んだ俺のチンコを、胸で扱きながら必死に舐めたり啜えたりする姿は見ていて余計にチンコが立つ。

時折、滑りを良くするために唾液を垂らしたりして、奉仕に余念がない。

その胸はやはり通信科の生徒なのもあり、張りが少し足りないがその分柔らかくチンコを包む。

このところの調教で感度も良くなったのか、胸を擦り合わせるときに快感に顔を歪めるのが分かる。

ちなみにマンコにはバイブを入れて紫のセクシーなランジェリーで固定してる。

股を閉じて耐えようとしているが。

「んちゅっじゅるるっ……じゅぼっじゅぼっ……はむう……ここでふか？」

「もう少し裏筋を舐めるんだ」

言われた通りに裏筋に舌を這わせる美咲、ベッドに腰かける俺からは見下ろす形になるが、その綺麗な顔はキチンと見える。

俺の前ではいつも隠している前髪を分けさせているからだ。

上目使いにこちらを見上げ、口を窄めてフェラをするクールな美少女は、なんと言うかエロくてやりがいがある。

この三日は肉便器として開発するために学校でもやったりした。

まずは一日中マンコにはバイブを、乳首とアナルにはローターを固定して性感帯に常に刺激を与えた。

登校や教室移動の際に見かけると歩きずらそうにしていたが止めない。

昼になると保健室に連れ込んで、保険医に暗示をかけて俺たちの存在を気にしなくしてベッドのカーテンを閉める、そして防音結界を張って中で犯した。

結界も暗示も知らない美咲は声を抑えようと我慢するが、愛液でぐちゃぐちゃのマンコをチンコで高速で掻き回すとどうしても喘ぎ声が漏れてしまう。

そこでイカせればエクスタシーで絶叫してしまい、回りに聞こえると脅すと突然マン

この締めりと感度が良くなった。

やはり美咲は真性のマゾのようだ。

そして一度膣内に出して、それをバイブで蓋をする。

そこからは放課後までまた羞恥プレイだ。

こうして調教をつづけている。

「んじゆるるるっ……ぢゅううううっじゅぼっじゅぼっ」

「そろそろ出るぞ」

「んああ……らひてくらはあい……んじゆるるるるるるるっ」

最後の吸い上げでチンコにビリリと快感が走った。

勢い良く出る精液を美咲は喉を鳴らして飲み干す。

既に何度も飲ませたがお陰で抵抗が無くなってきた。

暗示を使わない調教はこうしてじわじわと常識を壊していくことから始まる。

何度も何度もイカせて、精液と快楽に溺れさせ、エロに対する感覚を麻痺させるのだ。

もちろんそれは俺に対してだけで、他の男にも股を開くようでは調教とは言えない、

そここのところのコントロールも腕の見せ所である。

「んんっ……ゴクツッゴクツ……プア……ぺちやっぺちやっ」

残り汁まで綺麗に飲んだ美咲は、チンコの回りを舐めてお掃除を済ませる。

これで奉仕は終わり、今からセックスの時間だ。

パイプを咥え込んだ股を切なげに擦り合わせ、よだれでテラテラ輝くギンギンに勃起した俺のチンコを発情した目で見ている美咲。

ベッドに引き上げて、俺が横になれば垂直に立つチンコにフラフラと吸い寄せられる。

「欲しいなら自分から跨がれ」

「あああ……」

完全に欲情した美咲は、何時もなら迷うのに今はすぐに従った。

紫の下着を脱げば咥え込んでいたパイプがヌルリと抜けてベッドに落ちる。

愛液でベトベトのそれは銀の糸を引いてポトリと落ちた。

そしてゆつくりと跨がり、チンコを挿んで狙いを定める。

美咲が腰を下ろすと愛液でぐちやぐちやのまんこにズブズブと飲み込まれた。

「っ!!……あああ……」

「動け」

「あっ……ああっ……んっ……んっ……んっ……」

ぱちゅっ、ぱちゅっ、と水音を立てて腰を上下する美咲、その表情は待ち望んだ快樂で溶けている。

大質量の胸が目の前で揺れ、乱暴に鷲掴みに擦ればその快感だけで絶頂した。

「アアアアアアアアッ！」

「まったく、いやらしい身体だな」

「あつ！あんつ！ああつ！気持ち良いっ！おちんぽが気持ち良いんですっ！」

「そうか、そうか」

おちんぽと連呼して腰を振って嬌声をあげる美咲、そのマンコはグニユグニユとチンコを包んで離さず、一突きごとに締め付ける。

愛液で滑る膣内は暖かくチンコを啜えこみ、ピツタリと吸い付く。

カ力で擦りあげると嬌声をあげて美咲はヨガリ、ヌメヌメの膣内は褌が絡み付いて気持ち良い。

「んああつ！おっぱいも良いのっ！もっつついてえ！」

「……フンッ！」

「あああああああつ！！深い！！」

腰を掴んで思いきりチンコで突けば絶頂に達して美咲はイッた。

締め付けるマンコを容赦なくチンコで押し広げ、グチュグチュと掻き回してやれば更に感じている。

美咲も俺の腹に手をついて動きを合わせて腰を振り、さながら息の合った躍りのよう

に俺の上で乱れる。

「あああああああつ!!ンンンンンツ!!イクっ!!イツてるのっ!!」

イキまくる美咲の淫らな姿は更にチンコを熱り立たせ、ジユブジユブと音を立てるマ
ンコを圧迫する。

もはや言葉にならぬ言葉で快感を必死に表す姿は何処までも淫靡で艶やかだ。

白い肌を朱に染め、全身を汗でしっとり濡らし、齒を食い縛ってでも快楽に溺れる
美咲。

すっかりチンコの虜だ。

「ああんっ!ああっ!イグウ!おまんこイツてるのっ!おちんぼが深い!」

再度の絶頂、イキまくるところかイキツぱなしになった美咲、ボタボタ溢れる愛液も
止まることなく、絡みつく膣内の滑りを良くする。

もっともつとと、快楽を求め、腰を振りながら自分の指でアナルを弄り出した。

空いた片手は胸に行っており、自分で揉みしだいている。

俺も釣られて手を胸にやり、きゅつと乳首を摘まんだら背をピンつと反らして絶頂し
た。

「ツ!!ンアアアアアアツ!!イクウウウツ!!」

「クアツ!出る!」

突然締めまりが良くなったまんこに思わず射精してしまう。

騎乗位の体勢でマンコの奥、子宮口に亀頭がぶちゆりとキスをし、ビュルビュルと精液を吐き出す。

「んんう！奥まで入ってる！熱いのが出てるっ！」

「ああっ！」

更に締め付けが上がり、再び射精、2連続で膣内は出す。

大量の精液が放たれ、愛液と混ざることにより美咲のまんこはヌルヌルのビチャビチャだ。

「ああっ！あっ！あああ……」

くたりと俺の胸に倒れこむ美咲、荒い息をつく美咲は体力を使い果たしたのか、イキ過ぎで目が死んでいる。

頬をパチパチ叩いても反応が帰ってこない。

「あちやあ、やり過ぎた？」

「んんっ、あああ……おちんぼ……」

なんとも色っぽい眩きだがこれ以上は精神がぶつ壊れそうなので止めておこう。

取り合えず回復薬を飲ませて学校に連れていったがものすごく心配なのでジャンヌに見張りを頼んだ。

理子情報ではカナが来るのは明後日、それまでにやることやって置かねば。

今日も学校だ、今はやっと昼休みになり、白雪の愛妻弁当をかつ食らった俺は、担任の高天原ゆとりに頼まれ、共にダンボールを探偵科の棟に運んでいた。

「いやあ、助かったわ。ありがとうね、遠山くん」

「いえ、この程度お安いご用ですよ」

高天原のお礼に笑顔で答える俺、教師に対する心証は少しでも上げて置くのが学生の生き方と俺は考える。

それに美人だしな、眼鏡をかけていて優しげな眼差し、緩くフワフワの茶髪はロングで腰元まである。

加えて白雪を越える胸、これでパイズリ擦ればさぞや気持ち良いだろう。

しかし、この高天原、以前からハーレムに加えようと蘭豹や綴と合わせて狙ってるの

だが……戸々はチャンスだな。

こいつら武偵高の教師たちは元は札付きの実力者なのでやたらと感も良いし大概がAからSランク近い猛者たちなので手が出しにくかったのだ。

ここで一人落とせば後がグツと楽になる。

「はい、これで終わり、じゃあ校舎に戻りましょうか」

「ええ、わかりました」

フフフ、ここで俺の罠が発動する。

「あ、あら？」

「おっと、大丈夫ですか？」

（よし、効いてきた！）

フラリとよろけた高天原を抱き止める。

実は先程から、媚薬の香をこっそりと撒いておいたのだ。

緩めの筋弛緩剤の効果を持つこれは、力が抜けたあと唐突に発情し、理性が蕩けていく、後はエロ主の出番だ。

「先生？」

「ああ、ごめんなさい、遠山くん、もう少し……」

「ええ、立ち眩みですか？」

(フッフ、良い具合だな)

エロ主フェロモンを発動した俺の匂いを嗅いだ高天原の理性が蕩けていく、頬を朱に染め、潤んだ眼差しでこちらを見るのはグッドだぜ！

俺の胸に顔を寄せた高天原は切なそうな表情で股を擦り合わせている。

恐らく媚香の効果で発情して愛液が垂れてきたのだろう。

「あ、そんな。私……」

「先生？(くくく、頃合いか)」

色気むんむんの高天原の胸に、こつそりと手を当ててみればビクンツと反応した。

これはもう良いかな？

「あ、あの、遠山くん？」

「はい？」

「えっ、えつと……」

何か言いたそうにモジモジする高天原、まあ、言えないだろう、発情したから発散に付き合つてなど。

試しに胸を柔らかな胸を揉んでみる、すると。

「ふあああ！」

「先生!？」

ビクリと激しく感じた高天原、既に身体は出来上がっており感度も上々だ。

発情した身体をもて余す高天原は、普通ならここを去るだろうが筋弛緩剤の効果の陰でその選択肢が端から頭がない、ここで時間をかけて俺を襲わせ既成事実を作る。

「そんな……私」

迷っているのだろう、高天原は今、生徒を欲望に任せて襲うか我慢するかでギリギリのところまで戦っている。

オナニーをする発想がないのは暗示だよ！

「遠山くん……」

「うわっ、先生!? (ククク、覚悟を決めたか?)」

ついに天秤が傾いた。

覚悟を決めた表情で俺を押し倒す高天原、彼女は一時の肉欲に負けて生徒を襲ってしまふのだ、それが襲われた生徒の企みとも知らずに……。

「ごめんなさい、責任、とるから……」

「え?!ん?! (うおおっ、色っばい!)」

押し倒した俺の唇を奪った高天原は勢い良く舌を絡めるキスを始める。

甘い花のような香りを醸し出す彼女は、その間にもベルトを抜き取り、俺の半立ちのチンコを抜き始めた。

くちゆくちゆと舌を絡め、唾液を送り込んできたので、それを飲み干してこちらも唾液を送ればコクコクと喉を鳴らして飲み込む高天原。

下に回した手では、俺のチンコをゆつくりと柔らかくしてひんやりしたそれで扱くためむくむくと勃起する。

「んん……んむつ……んちゆつちゆうう……プハア……遠山くん」

「んちゆつ……ちゆううつ……くちゆくちゆ……先生」

「ああ、すごい大きいのね……あむう！」

「くっ！先生!？」

「ごめんなはい……んじゆるるるるるっ！」

キスを終えて顔を離すと、俺のチンコに顔を近づけた高天原は、うつとりとした表情でフェエラを始めた。

暖かくうねる口内で、舌が絡み付いて俺のチンコを刺激する。

裏筋やカリの部分もダイナミックに頭を上下しながら舐めとる。

やはり経験が有るみたいだ、かなりの腕前のフェエラだし。

「んじゆるるるるるっ！じゆるるっ……ぢゆううううっ」

「くっ！」

舌で巻きとるように舐めあげ、亀頭にキスをして思いきり吸い上げる。

凄まじい快樂にもうでそうだ。

それにオナニーをしながらエロイ顔でフェラするものだから視覚効果もあって凄まじいのだ。

「じゅるるっじゅぼっじゅぼっ、らひてえ……んちゅうううっ」

「あ！出る！」

「んじゅるるるるるっ……ゴクツゴクツ……ぶあ！キャッ！」

ヤバイな、シチュエーションもあるが年上のフェラに興奮してしまった。

そのため何時もより早く射精してしまう。

それに朝3発しか出していないので量も多い、飲み干せなかった高天原の顔にビュルビュルとぶっかけてしまう。

しかし、相手もさるもの、顔と眼鏡にかかった精液を手で掬って舐めてる。

眼鏡美女にぶっかけるのは最高だな！

「うそ、精液が美味しいなんて……」

（やべえ、また立ってきた）

「それにまだ固い……」

俺のチンコを確りと握ったまま精液の味に驚いている、やはり経験あるわこの女。

そして硬くそそりたつチンコに目を向け股を弄りながら発情している。

タイトスカートの下のパンストには黒の下着が透けて見え、愛液でビチャビチャになっっているのが分かる。

下着に手を入れてオナニーをしている姿は淫靡で綺麗だ。

「あああ……もうダメ……」

「ううっ……」

弱った振りをしてチンコを立たせる俺に、理性が蕩けた高天原は遂に一線を越えてしまった。

素早く服を脱ぎ捨て、全裸に成った高天原、パンスト破つてのセックスはいつか必ずと心に誓った俺はその姿を目に焼き付ける。

「ごめんなさい遠山くん。必ず責任は取るから……んんうー！」

「うああ！（やった、遂にやりやがった！）」

謝りながらも俺のチンコを掴んで思いきり腰を落とした高天原は、マグロの振りをしている俺の上で腰を振る。

処女じゃないのが残念だが、熟れた熱々のマンコは褻が多く、チンコに絡みつく。グチュグチュと音を立てるマンコはピツタリと俺の巨砲に吸い付き離さない。

既成事実を作るために動けない俺は腰を振るのを我慢してマグロになっている。

「スゴイ！大きいわっ！良いのっ！遠山くんのが！」

「先生！（やべえ、すげえ締まる）」

キyunキyun締め付けるマンコはボタバタ愛液を垂らし、コンクリートの床を汚す。

反り立つチンコの力りで膣内が擦れる度嬌声をあげて高天原は俺の上で踊る。

マグロの振りをした俺とその上で一心不乱に腰を振る高天原を見れば完全に逆レイプだ。

「あああ！良すぎてっ！イクウウウッ！」

「うああ！（きつもちいい！ヒヤッホウ！）」

絶頂した高天原のマンコはぎゅううとチンコを締め付け、奥に刺さったチンコは子宮口にぶちゆりとキスをして膣内に精液を放った。

たぶん高天原の人生で一番の絶頂を味わい、歓喜に身を震わせる彼女、その締め付けに再び射精、2連続で膣内に出した俺は腰がとろけそうだ。

「あああ……イツちやった……」

「ハアハアハア……先生、何で……」

止めの演技を始める俺、その眩きを聞いた高天原が正気に戻った。

「そんな、私、そんなつもりじゃ……」

「どうして……」

「ごめんなさい！遠山くん、私……私」

涙をポロポロと流し始めた高天原、少し不憫になったので抱き締めてあげると胸に顔を埋めてすがつてくる。

全裸の教師とズボンを脱がされた生徒の図は滑稽だろうが。

取り合えず落ち着かせる間にズボンを履き直した俺は制服の上着を高天原にかけてやり、しばらくは抱き締めて放置した。

「ごめんなさい……落ち着いたわ」

「大丈夫ですか？」

「ええ、こんなんじや教師クビね……」

それは困るな、落ち着いた高天原に何故こんなことをしたのか問いかける俺、話を上手く誘導せねば。

「何でこんなことを？」

「分からないの……突然身体がうずいて、押さえられなくて……」

そのあとはポツリポツリと思い当たる節を話す高天原。

結局、去年に彼氏と別れてから最近欲求不満だったのが原因だろうと話をまとめた俺は結論を勝手に出してあげた。

ここからはエロ主じゃなくて紳士なオリ主にカスタムチェンジだ。

「大丈夫です、先生」

「え、遠山くん？」

「欲求不満だったなら仕方ないですよ」

「でも、私は生徒を……」

迷う高天原に俺は甘言を弄して彼女を誘い込む。

「ええ、ですからこれは仕方ないですよ」

「え？」

「これは仕方がないんです、生物学的にも心理的にも。だから大丈夫です、俺は訴えたりしませんよ」

「遠山くん……」

そう言つて、仕方がないと念を押しして誑かす。

心の弱っている彼女はそれにひきこまれる。

人間は辛いものから目を背ける性質を利用した作戦だ。

さらに抱き締めることによつてこちらの点数を引き上げておく。

「そう、なの？」

「ええ、そうです。だからこれ、どうぞ」

「これは……」

「俺の電話番号です、身体がうずくなら今夜電話をください、お相手をしますよ」
「でも、あなたは生徒で……」

「確かに俺には彼女もいますし生徒ですが」

「あつ！」

ここで彼女を抱き締めてキスをする。

ゆつくりと舌を絡めて蕩けるようなキスをしてやれば、驚き開いた目を閉じてこちらに身を預ける。

これで彼女の心は俺に傾いた。

「んちゅつ……ふぁー……遠山くん」

「先生みたいな美人が困っているのは見過ごせませんよ」

「えつと……もうっ」

呆けたあと嬉しそうな表情に戻った高天原は今度は自分からキスをしてきた、再びの甘い恋人のようなキス。

それは教師と生徒という高天原の壁を向こうから壊した証拠だ。

それを終えると恥ずかしげに服を着始めたので後ろを向いて待つ。

こういう対応も点数稼ぎに成ったようで、身だしなみを整えた彼女は嬉しそうだった。

そのあとは昼休みももう終わるので急いで教室に戻った。

後はじっくりと中を深めるだけだ、最後には……フッフ、彼女も俺の物さ！

カナ……どうしてカナは男なの!?

どうも、昼間に逆レイプされたスパキンです。

その後は学校も無事に終わり、家に帰ってきた。

ジャンヌが作ってくれたフランス料理を食べて、少しイチャコラしたあと彼女を寮に帰した。

その時の時間が七時くらい、しばらく待っていると待ちかねた電話が。

その相手は当然高天原だ。

流石に教師が寮に入ってくるのは不審なので、ある場所で待ち合わせ、ラブホテルへ
ゴー。

これからお付き合いと言う名の性奴隷調教計画が始まるのだ。

「んちゅっ……んむうちゅううっ……ぺちやつぺちやつ」

「ちゅううっちゅばちゅば……じゆるるっ」

スーツを脱いだ高天原とディーブなキスをする。

舌を絡めて唾液を交換し、くちゅくちゅと音を立てるキスを情熱的に始める。

落ち会ってすぐは、そわそわしていたが、ここまで来る間にめい一杯エロ主フェロモンを嗅がせていたので、高天原は部屋に入るなり上着を脱ぎ捨てキスをしてきた。

「遠山くん……んむう……じゆるるっちゅううっ」

「ちゅば……んんっ……じゆるるっ……先生」

視線を交わして互いの舌が溶けそうなくらいのキスをしていると、発情した高天原は尻をフリフリしながら快楽に耽る。

回した手で尻を揉んでやれば喜びを表し、身体を擦り寄せてくる。

まろやかで張りのある尻はボリユームたっぷりで、これなら一日中だろうが揉んでいられそうだ。

それに感化された高天原も、ズボン越しに硬くなっている俺のチンコをエロイ手つきでさする。

「ぷあ……ああ、硬くなってる……」

「先生のキスが気持ち良いんですよ（こいつマジでエロいな）」

「本当はこんなことイケないんだけど……んむっ！」

「くう！（口ん中柔けえ……）」

「んっ……じゆるるっんじゆるるるるるっ！ぢゅううううっ……」

相変わらずのダイナミックなフェエラに俺のチンコもギンギンだ。

舌で巻き取るように裏筋やカリの部分も舐めあげ、亀頭にキスをして思いきり吸い上げるフェエラに思わず腰が浮き上がる。

俺のハーレムたちの仕込んだ丁寧なフェエラも良いが、この勢いのあるフェエラもこれはこれで……。

今度誰かにやらせようと誓い、射精する前に一度身体を離す。

「んっ、ぷあ！……あの、出さないの？」

「胸でしてほしいんですが……」

「……フフ、仕方ないなあ」

身体を離れた高天原は、鈴口を親指でクリクリしながら上目使いに聞いてくるので、胸が良いと伝えると、笑顔でパイズリフェエラを始めた。

白雪超えの美巨乳は俺のチンコを包み込み、上下する度に隙間から現れる亀頭に舌を

這わせる。

「んんっ……ぺちやつぺちやつ……ちゅっ」

「うあ……」

しっとりしたスベスベの肌がチンコを優しく包み、垂らした唾液を潤滑油にちやにちやとチンコを滑らせる。

「ちゅっ……じゅるるっちゅううっ……らひてえ……」

「出ます！（うわー、コイツエロツ！）」

「んんっ……んじゅるるるるるっ！ぢゅううううっ……ゴクツゴクツ……美味しい……」

胸と口を余すことなく使いきり、俺の精液を飲み干した高天原は、ポツリと感想を呟く。

エロ主特性の甘い精液は人を狂わせる効果があるのだ。

「んんっぺちやつぺちやつ……ふあー！」

「ハハッ、気持ち良いですよ」

お掃除フェラを済ませた高天原の頭を撫でると嬉しそうに目を細める。

その視線は雄々しくそりたつチンコに釘付けで、発情して股を擦り合わせている。

そんな彼女を背中側から抱き締め、俺は手を回して愛撫を始めた。

「んっ！アーンツ！くふうん！」

「これが良いんですか？」

柔らかな胸に手を這わせ、クリクリと乳首を弄るとピクピクと感じている。

タイトスカートの下はパンストを履いており、破ることなく手を入れて下着の上からマンコを弄るとぴちやつと湿った感触がする。

発情した高天原は身をくねらせ、俺の性感帯を的確に刺激する愛撫に身を委ねている。

そんな反応が可愛く、首筋にねっとり舌を這わせると小さく悲鳴をあげて感じる。

「んんっ……やあ……胸が……」

「ここはどうかかな？」

「っ！！アアツ！」

下着の上からクリトリスを突ついたらピクンツと身体を震わせてイッた。

途端に愛液の分泌が多くなり、垂れたそれがパンストにまで及ぶ。

心なしか先程より胸の感度も上がりフニフニと揉むだけで感じ始めた。

乳首も硬く勃起していて、クリクリからコリコリに感触が変わる。

「ハアハア……イッちゃった……」

「まだまだ続けますよ……」

「あつーんんっーアアンツッー」

溢れた愛液がボタボタ垂れて床の絨毯を汚し、快感に身を折った高天原をしつかりと抱き寄せる。

足が震えているのでベッドに腰掛け、膝上に座らせた。

「ハアン！あつーっ!!そこおー」

「ここですか」

遂に下着に手を入れ、マンコに指を入れてかき回す、何度か指でグチュグチュと弄つていると、Gスポットを探り当てた。

途端に反応が激化し、嬌声をあげる高天原、Gスポットを高速で刺激すると小さく何度もイキ、胸の責めを強めると感じて喘ぐ。

そろそろ出来上がって来たので、ベッドに四つん這いにして、バックの体勢をとる。

タイトスカートとパンストだけの姿の高天原は顔をシーツに埋めて、これからの刺激に耐える姿勢だ。

パンストを破き、下着をずらしてマンコを露にする。

ヒクヒクと動いているマンコはだらだら愛液を垂らし、太ももの辺りまでびしょ濡れだ。

乾いてきたチンコを擦り付けて愛液で濡らし、狙いを定める。

「先生、行きますよっ」

「うん、来てっ!」

括れた腰を掴み、一気に肉棒で貫いた。

「んあああああつ!入って来たあ!」

「ふっ、ふっ!」

「あつ!ああつ!ンアアアツ!」

パンパンと肌をぶつけながら腰を振れば、飲み込まれたチンコに極上の膣内が反応し、吸い付いてくる。

一突きすればキュンキュン締め付けるマンコは心地よく、俺のチンコで感じているのが分かる。

ギリギリまで引いて、再び子宮口にぶちゆりとチンコを突き込む、マンコの中は引くときに擦れるのが良いようで、その時の絞まりが良かった。

「ふっ、ふっ!」

「ああつ!ンアアアツ!気持ちいいっ!」

潤滑油の愛液がだらだら垂れて、チンコで掻き回す度にグチュグチュばちゅばちゅと音を立てる。

パンストに包まれた美脚を手で撫でたり、シーツを握りしめて耐える高天原の力が抜けるように柔らかな胸を優しく愛撫していると、だんだん快樂に身を委ねてきた。

「ああっ! ああんっ! くふうん! ……ああ!」

「柔らかくて気持ち良いですよ」

「私もっ! 気持ちいいわっ! 遠山くんのが……んあっ!」

キyunキyun締まるマンコを角度を変えながら押し広げ、膣内を全力で味わう。

そろそろイカせてやるか。

「んんっ! ああああああっ!」

「ここはどうですかっ!」

「ツ!! ひいいい!!」

「締まるっ!」

愛液がかかって濡れてヒクついていたアナルに思いきり人差し指を射し込むと、きゅつとマンコでチンコを締め付けてイッた。

それをゴリゴリと押し広げて奥に突き立てたチンコから子宮にたつぷりと精液を出してやる。

入りきらなかったので腰を離せば、愛液を撒き散らして抜けたチンコが高天原の綺麗な背中に精液を放った。

「んんっ！アアンツ！……ハアハアハア……」
「フハア、気持ちよかった」

特に最後の締め付けは絶品だったな。

将来の肉奴隷の優秀さに満足する俺、しかしどうも気持ち良くしすぎた見たいで高天原が正気を飛ばしてる。

体力ないなあと思うが、残りの着衣を脱がして風呂場にゴー。

お姫様抱っこで抱えて連れていく。

沸かしておいた風呂から湯を足下にかけて、暖めたそこに座ると、胡座の上に高天原を座らせて背面座位の体勢でマンコを貫いた。

「ツ！！あああああっ！！」

「起きましたか？」

「と、遠山くん！？これは！ンアアアツ！」

パンパンと掴んだら腰を揺すってやればグチヨグチヨのマンコの腔内で俺のチンコが暴れる。

目の前で背をそらして感じすぎている高天原の胸を後ろから鷲掴みにして強く揉みしだくとさらに感じてヨガっている。

「んあっ！おっぱいがっ！あああああっ！」

「ほんとに感じてるな」

脇の下から回した腕で固定した身体の感触を楽しみ、俺の膝の上で腰を振り始めた高天原が自分で胸を揉み始めた。

そのため俺は空いた手を下に回し、チンコが突き刺さっているマンコの上、クリトリスをきゅつと摘まんた。

「あああああつ！イクウウウウツッ！」

ブシュツと潮を吹いた高天原はピンツと身体を弓なりにして絶頂に達した。

その波が途切れぬように再びピストンを続けて、チンコに襲が絡み付く極上の名器を楽しむ。

グチュグチュと液体が混ぜ変える膣内は熟成されよく滑る。

カ力で擦るとキュンキュン締まって気持ちよく、チンコに吸い付いて離さない。

「んあつ！あああああつ！またつ、イクウ！イクのお！」

「もつとイツてください、先生」

「あああああつ！キヤアアアアア!!イクウウウウウツッ！」

「フハア！」

ぎゅううと締まったマンコに再び射精。

ビクツ、ビクツ、と痙攣する高天原の中を精液で満たし、今度は膝の上で向き合う、意

識の飛んでいる高天原のマンコに狙いをつけ、彼女の腰を落とすとした。

「ンアアアアアアッ！」

緩んだマンコにズブリとチンコが飲み込まれ、高天原の意識を覚醒させる。

ブシュツと精液が押し出されて床に落ちるが、気にせずにピストンを続けた。

「あああああつ！クウウウツ！まんこが！熱いのお！」

「ククク、ここですか？」

「キヤアアアアア!!ンアアアアアアアアッ！」

腰をグリグリと動かし、一番奥の子宮口をぶちゅぶちゅと擦れば緩んだ絞まりが戻り、ついでにアナルも弄ると気持ちよすぎ高天原は俺にしがみつく。

そこで乳首を嘔むと目を見開き、絶叫をあげた。

「キヤアアアアア!!イクウウウウウウツ!!」

「おおお、締まるっ！」

ぎゅうぎゅうのマンコにびゆるびゆると射精し、精液が膣壁を叩く感覚でも感じる高天原の腰が浮く、それを押さえつけ、締め付けるマンコの深くにチンコを挿じ込むとくグリグリと膣肉を広げられて子宮口にたどり着いた。

止まらぬ精液を塗り込むように龟头を擦り付けるとイッている最中に刺激をもらった高天原がさらなる絶頂に追いやられる。

「ンアアアアアアアアッ! あああああつ! 熱いい!!!」

「まだ出すぞっ!」

しがみつくと高天原を持ち上げ、駅弁スタイルに移行して射精しながら腰を打ち付けた。

プシュウウと潮を吹くマンコを精液を出しながらグチュグチュ突きまくると目を閉じて歯を食い縛ってすさまじい快感に耐える高天原。

「ンアアアアアアアアッ! あああああつ! もう突かないでえ!」

「でも、気持ち良いでしょ?」

「あああああつ! 気持ちいいっ! 気持ち良いからもうっ!」

「じゃあもつとついてあげます」

「キヤアアアアア!! イクウウウウウウツ!!! ンアアアアアアアアッ!!!」

再度の絶頂、懸命に頭を振り乱して快楽から逃げようとしている高天原をパンパンと持ち上げて揺らし、マンコを突く。

止まらぬ快楽に涙すら流す彼女に興奮した俺のチンコがもつと深くに刺さる。

「イツてる! イツてるからあ! 突かないでえ! あああああつ! クンンンンンッ!」

舌をつきだして喘ぐ高天原。

もはや理性も飛んで感じるがまだ。

この調子でもっと気持ちよくしてやる。

「出すぞー！」

「熱いのがツッ！ででるっ！あああああつ！イクウウウウウツ！！」

「まだ行くぞー！」

床に押し付け、高天原と正常位に移行する。

一番奥を突くように上から押し掛るようにチンコを突き込み、愛液が迸るマンコを掻き回した。

色んな液が混ざって股からポタポタ垂れてよく分からなくなっているが。

そんなマンコはこれだけやられてもチンコを貪欲に飲み込み、更に精液を出してもらおうと締め付けてくる。

イキツばなしで痙攣する高天原の膣内は凄まじく壁が絡みつき、さながらバキュームのような吸い付きを見せる。

「ンアアアツ！ンアアアアアアアアツ！イグウウウウツ！！イグのお！私のおまんこイッてるからあー！」

「たまらねえな、教師がイキ狂うのは」

大洪水マンコは熱くて堪らない。

お互いに汗を流して絡み合っているがいつまでに高天原の体力が持つことやら？

明日から四巻の物語が始まる予定なので今夜は日付が変わるまで楽しもう。

「イグウウウウウツ!! イツクウウウウウウツ!!」

「最後だ!」

「ンアアアアアアツ! イグウウウウウツ!! 膣内で出してえ!」

「クウウウウツ!」

余りの快感に腰が蕩けそうだ。

それに耐えながら思いきり射精する。

うねる膣内は更に絡みつき俺から精液を絞り出す。

射精の間も激しく腰を振り舌を絡めてキスをする。

1分は続く長い射精はようやく終わり、ゆつくりとチンコを抜くと、気絶した高天原のマンコは締め付けを失わずちゅぽんと音を立てて抜けた。

するとピューと潮を吹き、最後にもう一度痙攣したあと高天原は寝息をたて始めた。

「ふう、気持ちよかった……」

「んんっ……スウスウ……」

あらら、寝たよ彼女。

とりあえず身体をシャワーで洗ってあげて風呂に入る。

弛緩して俺に身体を預けて寝ている高天原は、かき回して洗ってあげたまんこからい

まだに愛液を垂らしていた。

風呂を上がつて高天原を寝かせると時間はまだ9時、名一杯楽しむつもりのは俺は目隠しを彼女にして再度の挿入を開始した。

緩く突きながら反応を楽しみ、膣内が痙攣し始めたところで目を覚ました高天原はイキなり絶頂、しかも視界を奪っているので状況が飲み込めず、レイプと勘違いして泣きながら俺にイカされた、最後は快樂に溺れておちんぼを連呼して絶頂、気絶した。

朝起きたら説明しないと大変な気がするのだった。

翌日、先に起きた俺はルームサービスを頼み、高天原を起こす。

目隠しを取ってやると泣きながら抱きつくので謝りながら説明すると、怖かったと言いなながら甘えてきた。

彼女は寂しそうだったが、別れてホテルを出ると学校へ、朝のHRから俺を見る目が生徒を見る目じゃなくなっていたが……まあ、そのうち誰かと井プレイだと決め手学校では努めて無視した。

昼休みにメールで謝ってきたけど。

そして放課後、遂にイベントが始まる。

理子のメールに従った俺は隣の人工島、風車がたくさんあるそこに向かった。

そこは依然飛行機を不時着させたところで、半分解体されたそれがまだ片付いていない。

人の気配をさぐりながら近づくと……居た。

「……来たのね」

「やっぱり、生きていたのか」

先程まで誰も居なかった飛行機の上、そこに腰かける人物こそが。

「久しぶりだな、兄さん……いや、カナ」

「そうね、久しぶり、キンジ」

さあ、イ・ウー編、最終章が始まるぜ!

BLとかねえわ、やるならTSじゃね？

「やっぱり……か」

「……」

「ふふふ、その様子なら私が生きていたのは知っていたみたいね」

「いや、知っていた、というか確信があったが正しいよ、カナ」

ニコニコと変わらない様子のカナ、相変わらず凄まじい美人だが、男だ。

昔はこの姿で俺を慰めてくれたので甘えていたが、男だ。

もうお前女で良くね？と思うが、男だ。

四度言うがあれでも、男だ。

「強く、なったわね……」

「そうか……」

「ええ、貴方はどんどん私の手を離れて、強くなってきた、今の貴方を見れば分かるわ」

「カナのお蔭とは言わないでお願いしますか（神と俺の努力のお蔭です）」

「フフツ、本当に強くなったわね、キンジ」

なんかシリアスなムードで過去を振り返るカナだけど、早く話を進めてほしい、ほら、

早く言えよアリア殺すから手伝えって。

「でも、私と同じくらい強くなった貴方でも彼には勝てない……」

「彼、か……」

「そこで貴方に提案があるのだけど？」

「まずは聞こうか」

「素直なキンジも好きよ。さて、提案なのだけど、私と組んでアリアを殺しましょう？」

「……何故と聞こうか？」

「そうね、遠山家の宿命、義に生きる者の天命よ」

「でたよ謎の遠山理論、昔からうちの人間が使うこの言葉、『義』とは即ち正義のこと、そのためなら犯罪も人殺しも厭わないカナはいつちやあれだが若干イカれてる。」

「その言葉は重いぞ、カナ。アリアを義に従い殺すなら、アイツが危険だと言う証拠を出してほしいんだが」

「……」

「カナはイ・ウーに居たんだろ？それは知ってるから聞くけど、何故あそこに？」

「ごめん、潜入捜査なのは知ってるから話進めてね。」

「……イ・ウーの話は出来ないわ。貴方を危険には晒せない……」

「今さらだよ、ああ、今更だ。カナが言う危険ならいくらでも越えてきたよ」

「それでもよ、貴方の言う危険がどの程度の物かは知らない、だけどイ・ウーは別なのよ」
「話が平行線なんですけど」。

マジで頭でつかち、手札を晒すの厭わなければ俺のボロ勝ちも有り得るのに……。

恐らくイ・ウーのシャーロックにすらバレてない俺のステルス祭りは組み合わせに寄るが大抵の敵を初見殺しに合わせることが出来る。

「私はキンジを信じるわ……だから私を信じなさい、キンジ」

「……カナ」

バカだろこいつ、俺は原作ほどお前を神聖視してねえの、寧ろ女装すんな糞兄貴と声を高くして叫んでやりたいくらいだ。

もちろん、そんなこと美人モードの時は言えないのであれだが。

「なら、ここで……お別れだな」

「キンジ、貴方……」

「残念だが、一応まだパートナーを殺せないんだ、俺は武偵だからな」

「本気、なの？」

「……本気だよ」

「そう、なら仕方ないわ、道を違えたのは初めてだけどこれも宿命と言うことね……」

「宿命か……」

「出エジプト記32章27——汝ら各々、劔を帯びて門より門と營の中を彼処此処に行き巡り、その兄弟を殺し、愛しき者を殺し、隣人を殺すべし……最初が貴方とは、皮肉なものね」

「聖書好きは変わらないんだな？」

無行の構え『不可視の弾丸（インヴィジビレ）』を放つ構えをとるカナと、武器も構えない俺、互いの間で際限なく鬨気が高まり、一触即発の雰囲気人工島を覆う。

「構えなさい、でなければ殺してしまうわ」

「無駄、と言っておこうか」

「何を……!!」

「よくやった、陽菜」

「動けば斬るでござる」

驚愕し、固まっているカナの背後に現れたのは風魔陽菜、俺のステルス戦妹の彼女は諜報科のSランク、昨年間に昇級したそうだ。

その隠密スキルは他の追隨を許さず、警戒を限界まであげたカナですら背後を取られるほど。

俺も風のステルスでセンサーを張り巡らせていなければ感知は危ういほどの腕前に

進化している。

「伏兵とはね……やってくれるわ、キンジ」

「予め伏せておいたんだよ、カナ」

首に刃を突きつけられたカナはこちらを焦りながら見ている。

突然主導権を握られたんだ、当然だろう。

「さて、ここは引いてくれると嬉しいんだが……」

「わかったわ……私の負けね、今回は」

地味に負けず嫌いな発言をし、背を向けて去っていくカナはゆらりと夕陽に溶けていき、見えなくなる。

気配を消す遠山の体術で、背景に溶けるように消える技だ。

俺もあそこまで滑らかには使えないので、やはり年齢の差と言うものは偉大だと改めて感じる。

「師匠、あの御仁は……」

「……」

話せないと無言で首を振ればおとなしく下がる陽菜、本当に良くできた忍に育った。

「いくぞ、それと、しばらく任務は受けるな、必ずお前を使うときが来る」

「忍、では、拙者はこれにて」

途端に背後の気配が消え、俺以外には誰もいなくなった人工島。決戦の火蓋はこうして落とされた。

その日、イ・ウー関係でアリア以外のハーレムにカナブンに注意しろとメールを送った俺は、しばらくは普通に過ごすことにした。

といっても、足りない単位を補う『緊急任務（クエスト・ブースト）』のカジノ警備を選んだ俺は、足りない単位、1・9単位のそれを申請した。

予定通りならここでアリアが拐われ、カナとパトラとの勝負になる。こつそりと装備を充実させておこう。

しばらくはオリ主で過ごさないといけないので疲れるけどな……。

まさか、懲りずに現れるとはな。

俺は今日、五時間目の専門履修で強襲科の授業を受けていた、今日の内容は決闘式の
一対一、その順番を待っていると武闘訓練場のフィールド、そこにアリアが現れた、そ
れを見てアイツの出番かあとブーツとしていた俺の意識は次の瞬間覚醒した。

(マジかよ!?!何で来たんだ——カナ！)

アリアの対面に現れたのはカナ、しかもアリアに何か話しかけている、アリアが苛つ
ているのを見るに恐らく俺について関係していると匂わせる発言でもしたのでらう、
合図も待たずに試合が始まる。

「うそだろ!?!札幌武偵高にあんな強いやつがいたなんて——」

「あの銃撃、見えないわよっ!?!」

「遂に神崎の無敗伝説に終わりが来るのかッ!」

回りの生徒が騒いでいるが、俺の頭はこのとき高速で思考を処理していた。

何故ここに現れた、以前負けたのに……決まっている、頑固なカナは計画を諦めてい
ない。

何故アリアに接触を……当然、今の実力を試すため。

等々、原作知識と照らし合わせ、今の状況を分析する。

既に本気の本気を出して食らいつつしているアリアが下で戦っているが、『不可視の弾

丸』と『不可視の斬撃（スコルピオ）』に翻弄されてボロボロにされていく、このままでは負けてしまい、原作のごとく亀裂が入る、そんなのはごめんだ。

考えをまとめた俺は、直ぐ様行動にでた。

「お前ら、邪魔だ、どけ！」

「「「「っ！！」」」」

回りに集まっている強襲科の生徒を本気の気当てで退かせ、道を作る。

シリアスは嫌いだ、これも俺のハーレム達成のため、回りの皆に心のなかで謝りながら下へ降りる俺。

無言で銃を取りだし、カナへと向かう。

すると。

「くおらあ！何を邪魔しようとしてんだ遠山あ!!」

俺の足下に銃弾が着弾、凄まじい威力のそれはフィールドの土を抉り取る。

『M500（象殺し）』と呼ばれる蘭豹の扱う世界最大クラスの拳銃が放つ。500S & Wマグナム弾が着弾したのだ。

それに気付き、蘭豹の方を向いた俺は。

「邪魔をするな——」

「んなあ?！」

ベレッタを抜き打ちで射撃し、蘭豹のM500の銃口に9mm弾をぶちこんで破壊した。

壊れたりボルバーの銃がゆっくりと落ちるのが見える。

回りの生徒も時が止まったかのようにシンと静まり返り、戦っていたアリアですらこちらを驚愕の目で見ている。

「止まれ、カナ」

「もう来たのね、キンジ」

静寂に包まれたその場で俺はカナに告げる。

その答えは言葉と共に帰ってきた。

ギンツ!!

「ウソ……」

抜き打ちの『不可視の弾丸』をバタフライナイフを居合い抜き要領で使い、切り捨ててる。

それにカナですら驚愕の表情を浮かべた。

「もう一度言おう、止まれ」

「くっ!!」

ギギギギギンツ!

5連続で放たれる弾丸を高速切りで切った俺は瞬時に間合いを詰め、カナにナイフでの刺突を繰り出す。

間一髪反応し、身を捻って躲したカナだが、その足を払い地面に押し倒した。

その男とは思えないほど綺麗な顔に近づいて告げる。

「俺を嘗めたな……それが敗因だ。わかったならもう行つてくれ」

「……そうね」

身を離れた俺はカナを立たせてやり、彼女の落とした銃、コルト・ピースメーカーを渡す。

そして、去っていくカナを見送る俺にアリアが近づいてきた。

「何で止めたのよ！」

「あのバカな奴を止めないと危なかっただろうが」

「それでもよ！あと少しで勝てたのにつ！！」

「何でそんなに勝とうとした？」

「それはっ！……アイツがキンジの知り合いで……」

「はあ……」

マジで予想が当たった、コイツ俺とカナが昔のパートナーとか勘違いしてやがる。

「あのなあ、知り合いも何もカナは俺の姉だ」

「だからそれはっ!……ええ?」

「あいつは俺の姉だと言ったんだ」

「え? あっ! 何ですって!?!」

「あーもう、うるさいぞ、早く医務室行けッ、ほら!」

「キャッ! ちよっ!?!」

暴れるバカ女をかついで医務室に連れていく、回りの生徒はいまだに呆然としていた。たく、面倒なことになりかけたぜ……。

あーもう、疲れた。

このあとのカジノ勝負が憂鬱だ。

何てことを考えながら、医務室から帰る俺。

アリアには説教をしたあとカジノの任務の話をして別れた。

来週には荷物も届くはずだし……と、その前に夏祭りか。

そんなことを考えて俺は家に帰るのだった。

七月七日、俺はJR上野駅で人を待っていた。

今日の予定は夏祭り、ムカつくアリア以外のハーレムに声をかけた俺はそこに遊びに来ていた。

人混みの流れを見ながら白雪たちを待つ、ちなみに白雪は原作より早めに帰って来させ、パトラに盗られるはずの『イロカネアヤメ』を回収させておいた。

「キンちゃんっ!!!」

「来たか……」

ふふふ、決戦前の最後のフイーバーだ!!

「んちゅじゅるるっ……ちゅばっちゅばっ……」

今、俺の前では3人の浴衣美少女が胸元を開け、雄々しくそそりたつ肉棒にパイズリフェラで奉仕をしていた。

左右のおっぱいの持ち主は美咲と理子、正面は白雪で、唾液を垂らした俺のチンコに舌を這わせながら3人は跪いていた。

祭りのやってている場所から少し離れた神社の境内でやっており、縁側にこしかけた俺の真横にはジャンヌが居て、俺の首に腕を回して熱いキスをする。

舌を絡めて唾液を送りあい、コクコクと交換しては飲み合う。

やがていい感じにチンコが震えだし、射精した。

「んん、んじゅるるるるるるるっ」

「んんあ……ちゅうううっ」

「ぺちやつぺちやつ」

「んんむう……くちゅくちゅ」

迸る精液を足下の3人はしっかりと舐めては飲み込み、ジャンヌは身体を擦り寄せながらキスを続ける。

愛撫をすればせつかくの浴衣が着崩れ摺るので、今日はエロ主フェロモン全開で媚薬

での発情に任せた。

「よし、入れるぞ」

目の前には四人の美少女が縁側に手をついて尻を向けて、マンコを指で開いて誘っている。

誰に最初に入れるかは悩んだが……。

「んあつ！キンちゃん!!」

最初に入れたのは白雪、三週間ぶりのマンコは嬉しそうに俺のチンコを包み、柔らかな膣内は愛液で滑りながらも沢山の鬨がチンコに絡み付いて離さない。

残りの3人は待つ間はオナニーをさせてマンコをほぐさせる。

「ああつ！これが欲しかったの！私い!!」

「くく、久し振りに中に出してやるよ、白雪」

「んああつ！おまんこ良いのお！」

グチュグチュ音を立てて愛液を撒き散らす白雪の淫乱マンコはキュンキュンとチンコに吸い付いてくる。

カリで擦りあげながら膣内を抽送すれば、吸い付く鬨が捲れてボタボタと、愛液をだらしなく垂らして地面を汚した。

白い浴衣を捲って見える生足はチラリズムの要領で俺の視覚を刺激し、チンコを滾ら

せる。

熱くうねる膣内を10分ほど楽しみ、白雪が四回ほどイッたとき、俺は子宮口を深く突きながら膣内に精液を放った。

「あああああつ！熱いのがでてっ！イクウウウウウウツッ!!」

背をのけぞらせ、歓喜に喘ぐ白雪の中に思いきり出した俺は、力の抜けてへたり込んだ白雪を上に向けてやすませ次のマンコに向かう。

「ああつ！入ってきたっ！マスターのおちんぽがつ！」

「感じろ、ジャンヌ」

次はジャンヌ、氷のステルスらしいひんやりとした肌をすりすり触りながらその熱くうねるマンコを貫く。

パンパンとチンコで掻き回す度にだらしなく愛液を垂らしてイク姿は普段の凜とした姿とのギャップがあつてチンコを熱り立たせる。

グチグチ掻き回して吸い付くマンコを押し広げる。

キュンキュン締まるマンコは感じすぎるのか少し腰が引けるジャンヌだがしっかりと掴み、片腕を引つ張りながら激しく突いてやる。

「ああつ！くううつ！おちんぽがつ！私のおまんこにいい!!!」

乱暴に突きながら尻を叩くと締め付けの良くなるジャンヌのマンコ、零れる愛液も量

を増し、ジユブジユブ音を立てて嬌声をあげるジャンヌ。

エロイその姿に興奮した俺は子宮口を押し開きながらびゆるびゆると中に出した。

「んああっ！マスターのが中に来てるう！ああああああっ！イックウウウウウッ

!!!」

「くうううっ！」

2連続の違うマンコへの中出しは想像以上に欲求を満たし、熱く絡み付いてくるマンコに射精する。

ジャンヌの中に出し終わると。

満足したのか彼女はビクビクと震えてまだイッていた。

三人目は……。

「くうううっ！おちんぼ来たあ！ああんっ！ご主人様っ！」

「いい具合のマンコだ」

三人目は理子、他のメンバーより少し狭く、ギチギチと締め付けるマンコは狭い分感じ方も締め付けも皆より上だ。

根本まで俺のチンコが入らないのがあれだがそれを補うようにぎゅううと締め付けてくる。

奥までコンコンと龟头を届かせる度にだらだら愛液を垂らして狭い膣内の潤滑油に、

柔らかかでミルクのような肌を楽しみながら腰を振り、狭い膣内を楽しむ。

「んああっ！ああっ！ご主人様のおちんぼぎもちいいっ！！」

吸い付きのいいマンコはチンコを引く度捲れて愛液を垂らして理子は小さくイク。

その激しいピストンを続けていけば、絶頂の感覚が短くなり、最後は激しくイクた。

「ンアアアアアアアッ！イクツ！！理子イツちゃうのお！」

「出るっ！」

「あああああっ！イククウウウウウツ！！」

一番奥の子宮口をグリグリとしながら、射精中の精液を塗りたくり擦り付ける。

ビクビクと痙攣するマンコはチンコをマッサージするかのごとく吸い付き、うねる膣内は満たされていく。

チンコを抜くときなどはチュポンと音を立てて抜け、ビチャツと勢いよく大量の愛液が地面に落ちた。

痙攣する理子を二人に預け、最後は。

「あああああっ！イククウウウウウツ！」

「イキナリイツたな」

ずぶりと勢いをつけて美咲のマンコを貫くと、ぶしゅつと潮を吹いて絶頂した。

待たせている間のオナニーですっかり出来上がったところに挿入したのですぐに絶頂した美咲、今日も分けた前髪からクールな瞳を覗かせ、アナウンサーバリの美声で喘ぎ声をあげる彼女は耳でも楽しめる逸品だ。

この中でもっともM性の強い美咲は尻を叩き、アナルを乱暴に弄ると膣内の締め付けが激しくなる。

襞が多く絡み付くマンコも痛みを快感に変換して愛液を増し、ぢゅぶぢゅぶと垂れ流す。

「あああああつ！もつと突いてくださいいい！！」

奥を突く度キュンキュン縮まるマンコにぱちゅぱちゅ愛液を撒き散らしながらピストンをするると捲れたマンコが感じているのが分かる。長い髪を振り乱し喘ぐ美咲はバチンツと思いきり尻を叩くと凄まじい締め付けをしながら絶頂した。

「ンアアアアアアッ！いたいのにっ！あああああつ！イックウウウウウツ！気持ちよくてイクウウウウウウツ！！！」

ぶしゅうううと、潮を吹いて絶頂する美咲のマンコにドクドクと中出しを決め、最奥の子宮口を抉じ開けて精液を出した。

一際強く突き込んだら子宮口を押し広げてしまい、子宮姦になってしまった。

開発を進めた彼女は感じてイケるが、開発をしなければ激痛を伴う子宮姦で美咲は再

度の絶頂。

思いきり叫ぶと力なく崩れ落ち、涙を流している。

「次は誰だ？」

その言葉に反応した彼女たちは俺のチンコに突き刺され、深夜になるまで神社でイキ狂った。

ギンギラギンーにち〇こ立つ～～

——自動ドアを抜けてクーラーの効いた建物に入ると、レーザー光線で彩られた噴水の有るエントランス・ホールに出る。

そう、ここはカジノ、東京の夜の代名詞……今夜もここであらゆる業界のVIP達が金を動かす。

そんな場所に、一人場違いな青年がいた、彼は本日突然ここへ現れ、勝ちに勝ちまくり真横にチツプの山を築いている。

彼の名は——

「フハハッ！また俺の勝ちだっ!!」

彼の名は遠山キンジ、しがない武偵高生だ。

はい、どうも皆さん、スーパーキングジです。

今俺は仕事でカジノ警備に来ている、他にも仲間が居るが、そいつらの紹介はまた何れ、今は俺のターンなのだ。

客に紛れて潜り込んだ俺は、本来なら偽のチップを店から用意されていたのだが、勝った分の金が入らないのは勿体ないので自腹で用意した、その額なんと一千万。

今はディーラーに変装したレキに絡んでいたどこぞの社長をルーレットで負かして、大金をゲットしている。

この短時間で稼いだのは既に10億を越えた、高レート勝負に挑み続け、ルーレットならばこの超人的な動体視力でタイミングを見切り、ポーカーならば敵の心理を完全に読み取りズタバロに、俺の横には大量のチップの山が。

常に全額ぶちこんだ勝負は凄まじい金を俺にもたらす。

視界の隅にアリアが居たりするが、パトラが現れるまで放置、それに襲われても……こちらには仕込みがある。

というかそろそろ——来たな！

窓を突き破って大きな……ジャッカル頭の砂人形、アヌビスを模して造られた『砂礫の魔女』パトラの手下達が現れる。

フハハッ！我がベレッタの錆びにしてくれる！

「お前らっ！出番だぞっ！」

大声で叫ぶと今回の任務に参加していた奴等が動きだす。

そのメンバーは、アリア、白雪、レキ、俺だ。

武器を構え、数体のアヌビスを相手に戦闘が始まる。

砂のステルスとは相性の悪い白雪は客の避難に回し、銃を持つ残りは敵勢力を掃討する。

「キンジ！中心を狙って撃ちなさい！」

「あいよっ！」

アヌビスの胸の中心部、そこを撃つと奴等は砂に戻って崩れ落ち、そこから穴の空いたカナブンが、あれが奴等の核だ、それを理解した俺たちは残りも片付けていく、だが、殆どが倒れたことで一体のアヌビスが逃げ出した、その先は海。

「何してるのっ！追うわよ！」

「はいはい……」

追撃をかける気満々のアリアは、俺を呼んで、先程までは本物の店員が使っていた、屋内のプールに浮いている水上バイクを指差す。

これに乗って追撃すれば、原作でアリアが狙撃されパトラにお持ち帰りされる。

だが、俺は敢えてその策をとった。

エンジンをかけ直しそれに跨がる、直ぐにアリアも後ろに乗ったので一気にスタートした。

「ちよっ!?浮き輪まだつけてないわよっ!」

「知るか、そんなものはない!」

泳げないバカは後ろで叫ぶが溺れたくないならしがみついてる。

「キンジイイイイ!!」

「うるさい!」

あーもう、騒がしい。

そうこうしながらもアヌビスに追い付いた俺は銃口を向けたところで、斜め上、向こう岸から反射光が眼に入る……狙撃、その言葉が頭をよぎるが俺は笑う。

「……かかったな。パトラ」

——タアア……ン——

遠く響くライフルの銃声、しかし俺たちには何も起こらず、俺はアヌビスに向けた引き金を引く。

水面を疾走するその背中を撃ち、奴く崩れ落ちた。

「キンジ?今の銃声……」

「大丈夫だ、もう捉えてる」

その時だ、背後から船が近づいてきた、その黄金の船は（知らない人は原作見て）人を乗せている。

看板に立つのは凄まじい怒りを顔に張りつけた美人、パトラだ。

「くうう……！！まさか伏兵が居ようとはっ！！」

「よう、あんたがさっきの狙撃手か？」

「それがどうしたのじゃ！」

「いやあ、まさか陽菜から逃げるとはね」

「なん、じゃと!?!」

おお、伏兵の関係者と気づいたか。

凄まじいな、あの表情、今にもとち狂いそうだ。

「先の忍はお主がけしかけたのか！」

「(づ)名答！」

顔を歪ませて怒るやつに俺は笑い、後ろのエリアは何が起こったのか理解できてない様子。

「やっらい。

「まさか読んでいたのか？」

「やっぱり来たか、兄さん」

パトラの後ろからマイブラザー金一が現れる。

カナから戻っているっぽい。

「確かにお前は強くなったようだな……」

「そう言いながら銃を構えんなよ」

「今から俺とお前の一騎討ちだ、キンジ」

「もう理由は聞かないよ……」

「教えてやる、俺に勝てば『第二の可能性』について」

まったく話の繋がらない事を言っているマイブラザーはパトラの前に出て、いきなり

あの痴女の唇を奪った。

おいおい、HSSに成る為とはいえ何て奴だ。

何て俺は兄に軽蔑の眼差しを向ける。

その間にも向こうの準備は整ったようだ、目で促された俺は奴等の船にエリアを連れて上がり戦いが、始まる！

カナよりは弱い、とはいえHSSになった兄貴は『不可視の弾丸』を俺に放つ。すかさず真横に跳んで躲す俺、振り向き様にベレッタで兄貴の足を狙う。

だが、向こうもさるもの、放たれた弾丸を『不可視の弾丸』で撃ち落とした。

「今度は油断は無しだ」

「当たり前だろ？」

睨み合う俺たち、戦闘の横ではパトラとアリアが見守っている。

「……………」

互いに無言で銃を連射、先手は『不可視の弾丸』を使う金一に奪われるが俺のHSSは60倍のパワーアップだ、例え普通のHSSでは目で終えずとも今の俺には捉えられない。

向こうも『不可視の弾丸』が撃ち落とされて驚いて入るようだが隙は見せない。

互いに円を描くように走り、マストの根本や甲板に何故か置かれている砂金で出来た箱などの遮蔽物を使いながら銃撃戦が続く。

それがどれ程続いただろう。

遂に俺の弾が切れた。向こうを見れば銃を納しているのであちらも同じ。

仕方ないか——

「ここからは殴り合いか……」

「兄弟喧嘩みたいで良くないか？」

俺たちは獣の如き笑みを浮かべ、拳を握る。

ここからは男の勝負だ。

「……ッ!!」

近づいた俺たちは互いの手で握手をし、利き手の右を振りかぶる。

ワンハンドシエイクデスマッチ、今から始まるのはどちらかが倒れるまでのガチンコの殴りあい。

ゴッ!!

互いのパンチが顔面に入る、仰け反ったのは金一、チート強化のHSSを使用中のキンジには純粹に膂力で負けている彼は本能的に其れを察知した。

直ぐ様手を引き2発目をキンジの顔面にぶちこむ。

質でダメなら量の作戦で来るようだ。

それに気づいた俺は今度はこちらからと2発目の重い一撃をくれてやる。

「ッのッー」

「この頑固者ッー」

なにか言う前に3発目を俺はぶちこむ。

そこからは、オリ主らしい戦いが始まった……。

30分後……俺と兄貴は地面に倒れ伏していた。

勝負の結果は引き分け、まさかオリ主が負けるとは……。

「ハアハアハア……」

「ぜえぜえぜえ……」

男の勝負を終えた二人は顔を向けて苦笑いをして兄弟の友情を確かめていたのだが、ここで空気が読めない娘が現れた。

「キヤアあああ!!」

「!?!」

突如甲板に響き渡るアリアの悲鳴、そつちを向けば気絶した彼女がアヌビスに捕まっているのではないか。

「アリア!?!」

「動くなっ! 遠山キンジ」

「なにっ?」

アヌビスの後ろから現れたのはパトラ、そう言えば放置してた!と、俺も思い出す。
「パトラ、血迷ったか……」

「誰が血迷ったじゃと!?金一、妾は負けてはおらぬ!!」

「この痴女め……!!」

「誰が痴女か!!貴様、妾がイ・ウーを手に入れた暁には血祭りに上げてくれる!!」

俺の眩きを耳ざとく拾った痴女はアリアを連れて海に飛び込んだ。

直後にこの船が崩れ出す。

元々砂金で出来たこれはパトラの砂を操るステルスで造られていた、主が消えれば壊れるのは必然。

「クソツッ!あのバカめ!キンジッ!海に飛び込め!逃げるぞっ」

「クソツッ!あの痴女め!兄貴っ!逃げるぞっ」

まったく同じ行動をとった俺たちは海に飛び込んで沈没から逃げる。

クソツッ!あの痴女め!必ずやオリ主が復讐してやる!!

そう固く誓った俺は向こう岸まで兄貴と逃げるのであった。

「ハッ!!……(´)は?」

「キンちゃん!」

飛び起きた俺を迎えたのは白雪、なんか泣きそうになつてるけどごめんさい、何が起きたのか分かりません。

というわけで説明を聞くと、あのあと岸にたどり着いた俺は気絶、それから丸12時間寝ていたようだ。

現在の時刻は朝7時、アリアがさらわれて12時間。

パトラの痴女は何も言っていなかったが、原作と同じで拐うときアリアに呪いをかけたかもしれない、ならばタイムリミットは残りも12時間だ。

其れを想定して動くことにした俺は直ぐ様武藤を呼び、予め整備と修理を頼んでおい
た『オルクス』に向かう。

このオルクス、ジャンヌがここに侵入するのに使った魚雷を改造して造られた潜水艇
で、メチャクチャ速い。

他のメンバーへの説明を理子に任せ俺はもう時間を惜しんで直ぐに行動に出る。

原作とは違って呪われてないから戦力になる、パトラに能力的に強いジャンヌを連れ

ていくことに。

だが、相手のステルスのグレードは25、対するジャンヌは8〜10だ。

しかし、ここで日々のエロ主の恩恵が現れる。

俺に抱かれた女は抱かれれば抱かれるほど能力が上がるのだ。

本人たちは気づいて無いだろうがジャンヌのGは16位に上がっているはず、これで準備は万端、今から始まるのは戦争じゃああああ!!!

アリアにマーカーを仕掛けておいた為、彼女の反応の有る場所、太平洋のど真ん中に向かう。

道中オルクスの中でジャンヌと1発やって英気を養い、俺たちは戦いの地にたどり着いた。

そこは沈没船アンベリール号、兄貴が失踪したときに沈んだ筈の船だ。

その上にはデッカい砂金で出来た天辺だけはガラス製のピラミッドが立てられてお

り、中にはアリアとパトラが居るのだ。

「いくぞ、ジャンヌ！」

「ああ、遠山」

セックス以外では普通に呼ぶジャンヌと慎重に入り口を抜け、なかを進む、途中途中でジャンヌが感嘆の息を漏らすのでそうとう魔女的にはスゴいのだろうこのピラミッド。

そして進むと巨大な扉が現れる。

書いてある象形文字を読むと『王の間』と書いてある。

巨大な扉は触ってもいけないのに開き始めた。

「気を引き締めろよジャンヌ、初戦はお前にパトラを任せるからな」

「了解した、お前の騎士の力を見ておけよ」

強化については教えておいたので自信満々のジャンヌ、今回はともかく直ぐに人を信じるのは止めましょう。

開いた扉を進み……決戦の舞台へ!!

「死ねえええええ!!」

「いきなりか!!」

俺たちが入ったのは何もかもが黄金の痛い空間、奥の玉座にパトラが腰かけ、その階段の下にはスフィンクスと黄金の棺があつてアリアが入っている。

偉そうな前口上をパトラが告げ、カツカツとハイヒールのサンダルを鳴らして階段から降りた瞬間、俺は銃弾をぶちこんだのだ!!

「クツツ!!」

「盾か! ジャンヌ! 後は任せたからな!!」

「ああ、行け、主よ」

格好いいことを言うジャンヌにニヤリと笑いかけた俺はスフィンクスの足下にあるアリアが in してる棺にBダツシユ、その間にもパトラを撃ち続けた。

ある程度近づけばスフィンクスが原作の如く動き出して俺を捉えようとするが……

この瞬間を待っていたんだあ!

「ジャーノン又つ!!」

「食らええええつ!」

進化したジャンヌの放つブリザードがスフィックスを氷づけにして動きを止める。

その間にもアリアを担いで俺は逃げる。

「よっしや!ここからは2対1」

「バカな!何故氷の魔女がここに!?!」

今更気づいた。パトラが呪いをかけた筈のジャンヌの存在に驚くが、ここからは俺たちのターンだ!!

アリアを柱に隠した俺はベレッタを二丁抜き、フルオートで撃ちまくる。

その間にデュランダルの大剣を持って切り込んだジャンヌがパトラを思いきり剣の腹でぶっ叩いた!

「へぶっ!?!」

「よっしっ!!」

間拔けな声をあげて倒れるパトラ、其れを見て俺もガッツポーズ。

直ぐにジャンヌが対ステルスの銀の手錠で拘束してこちらに連れてくる。

「いやあ、あっさり終わったな」

「ふふっ、主の作戦が上手く行ったな」

「……あれ?キンジ?」

盛り上がっているとアリアが起きた。

「おおっ！起きたか」

「ここは？」

「簡単に言えば拐われたお前を私と遠山で助けに来たのだ」

「えっ？えっ？」

混乱するアリア、説明をはしよつたジャンヌだが俺たち悪くないよね？

そんな感じで床に捨てられたパトラに目を向けると。

「!!」

「?どうした、遠山」

そこには砂しかなかったのだ、まさかと玉座の方を向けば……ライフルを構えるパト

ラの姿が!!

ドッ!

「え？」

「遠山!?!」

ドサツ!!

銃声の後、二人の声が聞こえた、俺はゆっくりと倒れ、地面に転がる。

ああ、声が遠い。

そして、眠い……。

そこで俺の意識は途切れた。

覚醒　オリ主キンジ

……あれ？ここはどこだ？　起きた俺の視界に入るのは眼が痛いほど眩しい黄金の空、だんだんと覚醒する身体、聴覚が戻った頃に誰かの声が聞こえる。

「！！」

「！？」

ぬ？今なんか光ったぞ、赤っぽい色がピカーって。

そこまで考えたとき意識が途切れるまでの記憶が脳内に甦る。

ああ、撃たれたんだっけ？　そんなことを考えていると、凄まじいスピードで身体に力が漲って来た。

五感をすべて取り戻したときに感じる額の熱さ、とい　うよりは顔か？　そこまで考えたら体が動き出す。

「——あっ！」

「？」

頭上から聞こえる声、そちらを向けば、カナの眩しいお顔が……。疑問に思い、辺りを見回すと、アリアが薄光ながら倒れている。

ジャンヌは啞然とこちらを見ている。

パトラは気絶してる。

What? え? なにこれ?

「起きたわね、キンジ」

「何が……?」

「撃たれたのよ、掠めただけみたいだけど」

!!!! その瞬間俺の脳細胞がダイヤモンドの輝きを放った。

とにかく熱いお顔を確認、手鏡を四次元ポケットから取り出して見ると。

ワア! 斜めに傷が入って血が垂れてるじゃありませんか。

そこでさっきの記憶と結び付いた。

ああ、原作みたいに撃たれたけど馬鹿みたいな反射神経で躲したのか……超音速のライフル弾を発射後に躲すとは……俺のチートも極まって来たな。

など、益体のない事を考えながら、白雪にもらった治療用の符をベタリと顔面に張り付ける。

見る見る内に傷が塞がる、とにかく生き残ったのだ、俺は。

「遠山、どこか痛いところはないか?」

「うん、もう治療したのに言う言葉じゃないね」

「ひとまず説明するから、寝てなさい」
そこからカナの説明が始まった。

—— 割愛 ——

やはり俺が気絶したあとは原作通りにアリアが緋弾の技をぶっぱしたようだ。

んで、必死に回避したパトラは落っこちて気絶。

俺が死んだと思ったアリアは暴走したそうで、カナが来たら撃っちゃったそうさ。

そんなことをパトラが気絶したせいで崩れ始めたピラ ミッドから脱出中に聞かされた。

あれ？でも俺はアリアとはパートナーとしてしか接してないから暴走するほど仲良くないのになあって思ったけど、まあ、原作効果だろうと納得して逃げるのであった。

さて、今はアンベリール号甲板に出ている俺たち、救助を待つ間はのんびりしましょうとカナが言うけど、実はね、今からがこの戦いの本番なんだ。

「ウソ……!」

(ほらね?)

「キンジ、不味いわ、逃げなさい!」

俺の袖を握って振るカナ、ごめんなさいラスボスが来たようです。

そして、地震が始まる。

海の上だから地震は無いと分かっている、でもそんな感じで揺れるアンベリール号、更にいつのまにか起きていたアリアが海面を指して喚いてる。

だから何が来るか知ってるからね? 皆パニックすぎ。

海面が持ち上がり巨大な潜水艦が現れた、その名は『ボストーク号』、其れを見たカナが恐慌状態で叫んだ。

『教授(プロフェシオン)……やめて! この子たちと——戦わないで!』

俺の前に出ようとするカナを止めようとするが振り払われた、馬鹿め! そんな言葉が脳裏を過ぎる、次の瞬間。

ビシユツ!!

アホカナが、殴られたように跳ね返された。

狙撃、その主は潜水艦の甲板に立つ男。

彼は世界一の名探偵、彼は世界一の男、オリ主キンジが越えるべき最強の敵。

「ウソ……曾お爺様？」

アリアの曾祖父、シャーロック・ホームズ一世その人だ。

いま、オリ主史上最大のバトルが始まろうとしていた。

—— 割愛 ——

「まさか……この僕が破れるとは思っていなかったよ」

「お前！それで逃げんのか！（早く行っちゃまえ！）」

「アリア君、君は最高のパートナーを見つけただよ。だ……僕がやることはもうない。さらばだ、若人たち よ……」

「お前な！ 負けたなら俺に従えよ！（だから早く行け よ！）」

「フツ、確かに最後のパンチは効いたよ、まさか僕と殴りあいでも渡り合うとはね、世界は広い……いつか、僕がもし生きていたら、再戦といこうじゃないか」

「そんな、お爺様！ いっちゃいやあ!! むぎゅ!!」

「バカ！ 発射炎に巻き込まれて死ぬぞ！」

「でも！」

「デモもストもない！（もうやだ！ このこ！）」

「ふふ、若い二人は元気だね、では、さらばだ、『緋弾のアリア』——」

「あつ！」

そうしてシャーロックの乗り込んだICBMが空へと飛んでいく……俺たちの戦いは終わったのだ。

ごめん、読者の皆に説明だけだね？

あのあとシャーロックにホイホイ着いてったバカをストーリーの展開上仕方なく連

れ戻しに奴と戦いにいった俺は、その前に刃向かうアリアを秒殺してシャーロックの場所へ。

開戦すると秘蔵の武偵弾を雨霰と撃ちまくり、直ぐにやつの武器を壊して殴りあいへ持ち込んだ、戦闘力51倍のキンジでやつと食いつくことができ、60倍の俺で互角、凄まじいファイトを繰り広げ、俺の真つ赤な拳に打たれた奴は敗けを認めた、そして俺にエクスカリバー的な名前の剣を、アリアにさっきの二つ名を授けて去っていったのだ。

カナ？カナはね、暴れるから忘心波衝撃を食らわせて 黙らせた、あと、傷を治すために『まんたんのくすり』を飲ませ、他にも色々……グフンな効果のをぶちこんで放置さー！ さあ、俺達も帰るぞっ！

……チユンチユン……

爽やかな木漏れ日の中、俺の一日は始まろうとしている、ここは武偵高の衛生科（ア
ンビュラス）の病室、あの戦いのあと俺はここにぶちこまれた、全治一週間、原作と比
べれば圧倒的に軽傷だが、終業式に出なくていい、単位は調度足りている、夏休みは直
ぐの3コンボが炸裂した。

余りに完璧なスケジュールに俺は歓喜、サッカーが出来なくなったのはあれだけどな
！

「はい、キンちゃん。リングに向けたよ？」

「ああ、濟まないな白雪、いつもありがとう」

「そ、そんな！もつたいないお言葉で御座います！」

「そう言えば……カナはどうしてる？」

そう、カナはあれからずっと寝ている。

我がオリ主絶技がひとつ、忘心波衝撃を頭に食らわせた結果昏睡状態で俺たちに連れ
帰られたのだ。

この技は相手の脳細胞を死滅させ記憶を奪うという某格闘漫画を参考に——と
まあ、そういうわけで上手くいってたらカナは晴れて女としての新たな人生をおくるこ
とになるのだ!!

ん？男じゃなかったっけだと？

ハッ！オリ主を嘗めるな！俺が飲ませた『まんたんのくすり e t c.』には女体化薬があつたのさ。

幸い、遠山金一は死んだことになっている。

これで兄貴も女装の変態ではなく真の美女としての生を……どうだ？この展開、読めなかつただろ？

「カナさんは寝てたよ？そういうえば、キンちゃんの従姉なんだよね？」

「ああ、カナは俺たちと同じ武偵をやっている従姉さ」

「そうだったんだ……」

ここにつれてくるに辺り触りしか皆には話さず、事情を知っていた理子とジャンヌに問い詰められたが暗示で誤魔化した。

だって女体化させた理由がカナともやってみたかった何て言えないじゃん？

ちなみにパトラは失意の中どこかに消えた。

思い人が女になったなんて認めたくなかつたのだろう。さて、カナが起きたら有ること無いこと吹き込んで忠実なメイドさんを作らなければ。

リサとカナでメイドの護衛。

やはり両脇には二人のメイドだよね！

これで正妻と愛人の騎士と奴隷とメイドがそろつた、我が布陣に資格なし！

フハハッ！我が人生は薔薇色じゃあ！！

ごめん、切りが良いから今回は短めで終るよ、次回に期待してくれ！！
じゃあ皆、じゃんけんぽんっ！ウフフフ！

華麗なるスパキン

「んっ……ちゅううっぺチャペチャ……くちゆくちゅ……」

「ふうう……」

いや、久しぶり、キンジだよ……。

今の俺は病院のベッドの上、仰向けで姿勢よく寝ていたが股間からの違和感に目を覚ました。

ビリビリと股間、というよりはチンコに走る心地よい快感、下を向けば黒の艶やかな髪が目に入る。

白雪、かと思ったがどうやら違うようだ。

「おはよう、志乃」

「あ、遠山先輩……んむう……」

「今日の当番は志乃か？」

「んっ……はい、星伽先輩から仰せつかって来ました」

当番、それは入院中の俺の付き添いをする制度だ。

現在9人の我がハーレムだがやはり俺も人間、同時に全てを相手に犯ることは不可能だ。

そこで現れたのが当番制度という魔法の言葉。

初日は白雪、二日目はジャンヌと理子、三日目はライカ、四日目は志乃が来た。

もちろん、俺は順番を知らないため毎日ワクワクしながら眠りにつく。

まだ来てないのは美咲と高天原、カナは寝てるし、最後の一人である風雪は修学旅行まで我慢だ、十年以上も我慢するとか……エロ主の計画における忍耐力の高さは世界一だね。

「じゅるるるっ……ん、じゅるるるっ……んはあ……ちゅううつ」

「上手になったなあ」

俺の寝巻きの浴衣の下を捲ってチンコに奉仕する志乃。

唾えたチンコを口腔の中で、舌を絡めて巻き取るように吸い上げ、時おりカリや裏筋を舐めるのも忘れない、丁寧で積極的なフェラに俺の朝起ちチンコも元気に反応する。

志乃はチンコを責める間に掌で玉袋をゴロゴロ転がしたり、亀頭にキスをして舌で穿ったりしてくるので射精感が高められ、そろそろ出そうになつてきた。

「志乃、もっと吸い上げてくれ」

「じゅるるるるっ……じゅぼ、じゅぼっ……ちゅううつ」

「そろそろ出るぞ」

「はあ……ぢゆううつ、らひてくらはい……じゆるるるるるっ!!」

「くっ!」

暖かい口内で舌を絡めて吸い上げられた俺は勢いよく射精する。

どくどくと出ていく精液を志乃は喉をならして飲んでいく。

僅かに頬を上気させ髪をかき揚げながらこちらを上目使いに見てくる女は満足感を満たしてくれる。

「志乃、気持ちよかったぞ」

「ありがとうございます……んんっ、じゆるるっ」

最後の一滴まで飲み干した志乃は僅かに付着した精液で汚れた俺のチンコを手に取り、再び舐め回す。

周りをペロペロと綺麗にして最後は亀頭にキスをして吸い上げることで残り汁まで片付ける。

慣れたお掃除フェラも気持ちよく、再度ギンギンに反り立つチンコを志乃は物欲しそうな顔で見ている。

「なんだ? 欲しいのか?」

「あ……は、はい」

「じゃあ自分で入れてみる」

「分かりました……」

立ち上がった志乃は、武偵高のセーラー服に下は黒のパンストを履いている。

濡れた瞳でチンコを見ながらパンストを破き、白のショーツをずらして俺の好物に跨がる。

「んっ……あああ！」

「くうーとろとろだ」

フェラだけで濡れてしまったのか既に準備は出来ていた志乃のマンコに俺のチンコがずぶずぶ沈んでいく。

手でキチンと向きを合わせながら腰を下ろした志乃は一番奥までチンコが届くと、快感に身を震わせた。

彼女の美脚を包む黒のパンストの上からさわさわと撫でると、身悶えし、じゅくりと愛液の量が増す。

そして既に滑る膣内へ、しっかりと奥に届くと俺の腹に手をつけて腰を上下させ始めた。

「あっ！んんっ！先輩のが中に入って……ああっ！」

久しぶりのチンコに志乃は快感を得る、俺の忙しかった最近は恐らくオナニーで耐え

ていたのだろう。

その証拠に熱く滑る膣内は嬉しそうに俺のチンコを啜えこみ、溢れる愛液は止まることなく無く滑りを良くする。

キュンキュンと締め付けてくるマンコは気持ちよくて最高だ。

「んっ！あっ！ああっ！私のおまんこが……んんんっ！」

志乃の膣内を行き来する度、カリで膣内を擦り付けるとヌメヌメの襞がチンコに絡み吸い付く。

目の前で揺れるおっぱいを制服越しに掴み、掌でこねるとじわじわとした快感に喘ぎ声をあげる志乃。

ぷちゅぷちゅと子宮口に亀頭がキスをするとそこが気持ちいいのか先程より深く腰を落とす。

快感を求めて自ら深みに嵌まっていく志乃の姿はとても淫靡で、そのマンコは俺のチンコに絡み付いて離さない。

「んんっ！ああっ！あああああっ！奥に届いてる！」

「もつと腰を振るんだ」

「ああっ！……は、いいっ！んあっ！くううう！」

滑り絡み付く膣内はどんどん愛液の量を増し、ボタボタと溢れてくる。

再度の絶頂、更に締めりが良くなるマンコに俺も腰を振ることに対抗する。

時々、子宮口を掴んだ腰を回すことでグリグリと刺激してやれば痛いほどにチンコを締め付けるマンコ、もはや快楽に流された志乃の理性はどこかに行ってしまったのか、俺の上に倒れたまま自分のアナルを弄り始めた。

「あああああつ！お尻とおまんこがいいのお!!先輩、私の嫌らしいおまんこもつと突いてえ!!」

俺の上でイキ狂う志乃は余りの快感に涙を流して嬌声をあげる。

止めどなく溢れる愛液は締まる膣内の滑りをスムーズにし、厭らしく腰を振る志乃にタイミングを合わせると勢いよく何度も奥を突くことになり、俺も限界が来た。

「出すぞつ!!」

「あああああつ！熱いの来たあ！ンアアアアアアアッ!!イクウウウウウウウ!!」

グリツと子宮口を突き上げて勢いよく膣内に精液を吐き出す。

ぎゅつとしがみつく志乃のマンコは凄まじく締め付け、吸い付くマンコは射精を促すようにうねうねと蠢いて凄くきもちいい。

大量の精液を俺が出し終わると志乃は絶頂の余韻でぶるぶると痙攣していた。

「ハアハアハア……んっ、ふう、ふう」

「さあ、次だよ」

「あつーそんな……まっつてくださああああつー！」

息も絶え絶えな志乃を座位で改めて貫くとズブリとマンコに飲み込まれる俺のチンコ、静止の言葉を快感で止められた志乃は俺に抱きついて耐える。

布越しに当たる柔らかな胸に気を良くし、腰のピストンを始めた。

愛液と精液が混ぜかえるマンコを活を入れる様にチンコでかき回すと志乃の絶叫が上がる。

顔を下げて乳首を舌で転がしながらグチグチと突いてやればキュンキュンと絡み付いてとろとろの膣内がチンコに吸い付く。

溢れる愛液を飛び散らせるマンコにパンパンとチンコを突き込み、グチヨグチヨと音を立てながら掻き回す。

「ンアアアアアアアツ!!ゴリゴリするっ!おまんこがあ!!んんんんんっ!」

太い俺のチンコにゴリゴリ膣壁を抉られて志乃は嬌声をあげ、硬く勃起した乳首はカリカリと嘯みつく度感度を増して絶頂する。

止まらぬ快樂に志乃も暴れるが腰が抜けるほどのピストンで更なる快感を与える。

ガクガクと痙攣しながら突かれてイっている志乃、その気持ち良い膣内を抉りながら突き上げ、溢れる愛液を塗りたくったアナルを指でほじると締め付けが増す。

「らめーらめええええ!!お尻があー!あああああつー!ンアアアアアアアツ!!」

「ふふ、ここが良いんだな」

ブンブン頭を振って快感から逃げようと暴れる彼女のアナルを指で貫いてグリグリと掻き回す、前立腺の辺りを刺激すると入れたチンコに何かが当たる感覚が伝わる。

ピストンを続けながら確認すると潮を吹いた様で、ブシユブシユとマンコから溢れて互いの股間がビチャビチャになっていた。

お仕置きにグリングリンと腰を回すことで子宮口を押し込むと背をのけぞらせて絶頂する。

その間もパンパンと突き上げて可愛がり、叫ぶ志乃の痴態を楽しんだ。

「ダメえ!!もうダメなお!!」

「まだダメなのか、じゃあもつと突いてやるよ」

「ちがつ!まつ、ンアアアアアアアツ!!あああああつ!くつ!んああつ!らめえええええ!!」

虐めを楽しみながらばちゅばちゅマンコを突くと志乃がまた絶頂する。

ずらしたショーツはビチャビチャになっている志乃は制服姿で乱れるので犯しているという気持ちが強くなる。

吸い付くマンコの襲も俺を気持ち良くし、ダメと叫ぶ志乃を快感で黙らせる。

感じすぎて呂律の回らぬ志乃は元レズとは思えないくらいチンコで感じていて、締め

付けるマンコは痙攣しているのに貪欲にチンコを呑み込む。

「ふあ、ああああああつ！くああつ！んっ！やあ!!イクツ!!イクのお!!」

「そらっ！イクんだ!!」

「ああつ！あああああつ！イクウウウウウウウウ!!おまんこイクのお!!」

強烈な締め付けを見せるマンコに二度目の射精、どくどくと出しながら最奥の子宮口を擦り、ぷちゅぷちゅした感触を感じながら全てを解き放つ。

たぶん志乃も気持ちよすぎるのだろう、涙を流して嬌声をあげる姿はチンコをたぎらせ、射精の量が増して締まった。

それが終わると最後にビクッ！と一際大きく痙攣した志乃はフツと意識を失って俺の膝の上で座ったまま気絶した。

時計を見るとお昼が来る時間まではまだまだあるのでまだ終わらない。

今日は志乃をとことん犯して彼女が好きだった間宮あかりを完全に頭から追い出すのだ。

そう決めると今度は起こさないように丁寧な腰使いでゆっくりとピストンを始め、的確に性感帯を刺激して志乃を追い詰めるのであった。

太陽少年キンジ

たいよおーーー!!

俺の手元で懐かしのボイスが響く。

ここは武偵高衛生科棟の三階の病室、開け放たれたカーテンと窓から指す太陽の光に俺はGBAを翳しながら懐かしの名作、太陽少年ジ○ンゴをやっている。

「死ねえ！サ○タ!!」

今はボスキヤラの一人、主人公の兄である闇に堕ちた人を太陽銃ガンデル○ルでボコっている。

このゲーム、プレイの際にはタイトルに準じて太陽の光が無いと全然楽しめないのだ。

今は夏だからともかく、買った当時は冬でアホな自分を呪った物だ……。

「さて、これが終わったらロツ○マンエグ○4をクリアしないとな」

もはや俺はカプ○ンの下僕、奴隷だ。

彼らが産み出した数年前の遺産を寮の自室から引っ張りだし遊び倒している。

現在はケータイで攻略サイトを見ながらの効率重視のプレイをしているためそこま
で時間をかけないのが良いところだが。

小学生の自分は何故にこれをやらなかったのか？ そう思うようなクリア後のやりこ
み要素まで楽しんでる。

「よっしや!!死ねえええ!!」

そう、俺が一人でこんな寂しいことをしているのも残りの当番の面子が依頼で来れな
くなつたからなのだ。

まだ来てないのは美咲に陽菜、美咲は何かの仕事のオペレーターに駆り出され。

陽菜は極秘依頼でどこかへ連れていかれた：

その寂しさを紛らわせる為に俺は今日は我慢するのだ、他のお嫁に頼むこともなく!!
しかし、その瞬間俺は閃いた。

「あ、カナが居たじゃん」

そう、カナが居た。

彼女は今は俺の隣の病室で深い眠りにについている。

一応顔を見に行つたがキッチンと女体化していたし、頭を覗けば記憶も綺麗さっぱり消
えていた。

ならばやるならこれからでは？

「よし、行くこう」

どす黒いゲスな笑みを浮かべた俺はキチンとセーブをしてから病室を出る。

さあ、始めよう、初心な娘を俺色に染めちまえprojectを!!

はい、カナの病室にやって来ましたキンジです。

これから早速色々やっちゃおうかと思えます。

真っ白な部屋のベッドに横たわる元兄で、現姉の姿を見る。

白磁の肌にけぶるような長いまつげをそつと伏せ、ゆっくりと呼吸をしているカナ。

女体化に成功した事により、キチンと身体も女のそれになっていて、髪などは長さを調整するのに苦労した。

もちろん胸は美乳仕様だ。

既にこの病室には防音と人払いの結界を施してあるので人が来るのは心配していない。

これからこの体を楽しめるかと思うと既にチンコが立つちまったよ。

「ではまずは……」

最初は記念すべきファーストキスをしてあげようかと思ったが流石にこの状態の間にするとなると加減をしないといけないので、それは目が覚めてからのお楽しみにとっておく。

代わりにまずは胸を揉んだ。

おお、これはいい、柔らかく手から少し余る程度の大きさの胸はフニフニと形を変える。

スベスベの肌はさわさわと撫でるとしっとりした感触で俺の手のひらを迎え、何時までも触っていたい。

ベッドに眠るカナを抱き起こし、背中に回って支える。

脱力した体を受けとめ、前に回した手で胸を揉みながら、女の子らしい甘い匂いをかぐ。

女体化の影響で少し背も小さくなったので調度懐に収まり、そんなカナの胸を俺は執拗に揉みつづける。

20分はそうしていたか、エロ主フェロモンを存分に発散しながら愛撫を続けていると、カナの口から甘い響きが漏れた。

「んっ……」

その声を聞くとむくむくと男の欲求が刺激されチンコが硬くなっていく。

俺は、揉み続けた胸の責めを強くし、等々その乳首に触れる。

エロ主フェロモンを嗅いだせいで硬くなった乳首をコリコリと指で転がすと小さな喘ぎ声を上げるカナ。

「んっ……あつ」

うひひ、姉ってエロいんだね……。

ギンギンになったチンコをカナの背中にパンツ越しに擦り付けてセンズリしながら愛撫を続ける。

コリコリの乳首を責めながら手を下にやり、ゆっくりとショーツを擦る。

「ふうんっ……」

僅かに頬の赤くなったカナ、ショーツに手を這わせると僅かに湿っており、だんだん感じているのが分かった。

しばらくマンコをじわじわと責めているとある程度濡れてきたのでショーツに手を入れて膣に指を入れる。

まだ処女で一度も使われていないカナの膣内はある程度濡れているが丁寧に愛撫で解していく。

「ハアハアハア……ああん……」

入り口付近を丹念に指で解し、くりくり乳首を弄っているとカナの息が荒くなつていく。

可愛い反応に気を良くした俺は少し調子にのつて愛撫してやる。

愛液が少し垂れて俺の手を濡らし、指を締め付ける膣内は準備を整えていく。

胸の責めをやめて、空いた手でカナの手を取り、俺のチンコを扱かせる。

白魚の様な指と掌の柔らかさを楽しみながらゆつくりと扱かせて、亀頭から溢れる先走りがカナの綺麗な手を汚す。

前に回った俺はカナをゆつくりと寝かせ、その唇を奪う、息がつきにくい激しいキスはダメなので、ねっとり舌を絡ませて甘いカナの口内を味わう。

その間も続けていたマンコの愛撫だが、大分ほぐれておりヒクヒクとするマンコに指を出し入れするとたらたらと愛液が垂れる。

「ふうん……あつ、んっ！」

小さな喘ぎ声をBGMにキスを楽しむと、次はマンコにクンニをする。

ピンク色の綺麗な肉ビラを指で開くと愛液がつーつと糸を引き、ひくつく膣内が見える。

そこに舌を這わせて周囲を舐め回せば甘い甘露のごとき愛液の味が口に広がる。

れろれろと舌で舐め、感じて声を漏らすカナのマンコに遂に俺は舌を射し込んだ。舌先を丸めて槍の様にしてマンコに射すと、音を立てて吸い上げる。

「じゅぶぶつ、ぢゅうううつ!!」

「あつ、ふう、んっ!ふうんっ!!」

甘い蜜のような愛液で喉を潤し、青のショーツをずらして丹念にねぶる。

とくとくと愛液を垂らすそこを舌でちゆるちゆる吸い、入り口の部分を弄ぶ。

心なしかカナの喘ぎ声も大きくなり、濡れたことで黒くなつた青のショーツだけの姿は視覚を刺激する。

「ぢゅうううつ!!ふぁ……」

「んっ!んんっ!ああっ!」

最後の吸い上げを終えて皮を被るクリトリスをちよんちよんと舌で突付くとピクツ!と体を震わせてカナがイツた。

「ハアハアハア……んんっ」

荒く息を乱すカナのマンコが絶頂でひくつき、とろとろ愛液で濡れたマンコは凄くエロイ。

そろそろだなど、パンツを脱ぎチンコを構える。

亀頭を入口に念入りに擦り付け愛液をまぶし、狙いを定める。

「じゃあ入れるぞ」

「ハア、んっ！あんっ！」

「ああ！絡みつく！」

ゆつくりとチンコを挿入し沈めていくとヌルリと飲み込まれていく。

愛液で喉を濡れ、充分にほぐれた膣内はゆるゆると蠢き、まるでチンコをマッサージされているかのようだ。

その快感に耐えながら腰を進め、遂に処女膜に届いた。

「あっ！……んんっ」

「……行くぞ」

「ンアッ！……あんっ！んんっ！」

一度そこで止めたあと確認し、最後は勢いよく突き破った。

はりを確認し、血を流すマンコ、しかしその膣内はしっかりチンコを締め付けている。キチンと時間をかけてほぐしたのが幸をそうしたのか、余り痛みはないようだ。

とはいえ媚薬も使わずにやっているから激しいのはダメ、ならばとゆるゆる腰を動かして膣内を堪能する。

ぬめぬめの膣内は愛液で充分に濡れており、動きを邪魔することなくチンコを受け入れる。

膣壁の襲もチンコに絡み付きうねうねと蠢いているから気持ちよく、もう射精しそう
だ。

「あつーあつーあつーあつー！」

「ふう、思いきり突けないのはもどかしいな」

ゆるゆるから少しピストンのスピードを上げて小刻みに腰を動かし、丹念に膣内をチ
ンコで開拓する。

角度を変えながらじつくりと膣内を暴いて行き、処女膜を破った血が止まった時には
カナは息も荒く、チンコでかんじていた。

「あつーあつーあつーああんっ!!」

ぱちゅぱちゅとマンコを竿で掻き回し、楽しむ、血の止まったマンコはキュンキュン
とチンコに絡み付きびったりとした膣内は滑り吸い付いて俺のチンコを離さない。

愛液の量も増し、滑る膣内で俺のチンコを迎えるカナのマンコ。

可愛らしく喘ぐカナも良いな等考えながら最初の1発を膣内に出した。

「くううう!!」

「あつーふう、んっーんんんっー……」

最後までだしてチンコを抜くまで締め付けは衰えない。

キュンキュン締まるマンコに一度めを余さず流し込み、その間も胸を噛んで責めてい

るとびくびくして絶頂するカナ。

それを終えればカナの体をうつ伏せにする。

更に、膝をたたせてやり尻を斜めに突きだした格好に。

その状態で尻を掴んで狙いを定め、チンコを入れる。

「ふうううんっ！」

「おお、ぬるっといったな」

ぬるんつとチンコが飲み込まれ、また熱くぬめぬめの膣内を感じる。

綺麗で形の良い尻を掴んでパンパンと腰を打ち付け、愛液の垂れるマンコを掻き回す。

「ふっ、はああ、んっ！」

「ああ、気持ち良いぜカナ」

汗をかき撫でると滑る肌を手で楽しみながらバックから意識の無い相手を突く、眠るカナを犯していると思えば更にチンコが大きくなって膣をひろげる。

「ふうう！ ああんっ！！」

「声も漏らして、こんな感じてるんだな」

キyunキyunと締め付けてくるマンコをグチュグチュ掻き回せばボタボタシートに愛液が垂れ、汚していく。

滑り心地の良い膣内をしばらくの間ばちゅばちゅと音を立てて往復しているとまたカナがイツた。

先程から緩やかな絶頂に何度も達しているカナのマンコは俺のチンコを優しく包み込み、イク時にきゅつと締め付けるのが一番気持ち良い。

「あつ！あつ！あつ！あつ！」

「ふっ！ふっ！ふっ！ふっ！」

腰の振りと共に声を漏らすカナのマンコは処女を奪われたばかりなのに、もうとろとろですっかり俺のチンコの味を占めたみたいだ。

射精を促すようにうねうねとチンコに蠢いて絡み付き、瑞々しい姿態は肌触りが心地よくて幾ら触つても飽きが来ない。

「ふっ！んんっ！くうん！」

「にしてもすぐに馴染んだな？」

今もうねうねと動く膣内に疑問を覚える。

よく聞く近親者とのセックスは気持ちよすぎて……というやつだろうか？

処女を奪われたばかりのマンコにしては俺のチンコに順応しすぎだ。

気持ちいいから構わないけど。

「ああ、でも本当気持ち良いぜ」

「ふううー！ああんっ！！んくっ！」

激しいセックスも良いがこう言うゆったりねっとりとしたセックスもこれはこれの良いものだ。

カナの膣内は程よい締まりと素晴らしい感度で、軽くチンコで擦ると簡単にイク。

先程からボタボタシートに愛液が垂れ、ビチャビチャになってしまっているから後で変えておかねば。

さて、そろそろだな、射精しそうだ。

「出すぞ」

「あっ！あっ！あっ！ああんっ！！」

奥にスプブと沈め、どくどくと精液で膣壁を叩きつけるとカナがまた絶頂に達した。

最後までしつかりとだし終え、チンコを抜くとぬるんつと抜けて愛液でテラテラ輝くマグナムが現れる。せ絶頂したカナは腰を支えていた膝が崩れ、グテリとうつつ伏せに寝そべった。

「おっと、お掃除だな」

「ハアハアハア……んむっ……んんっ」

カナを仰向けにしてその口にチンコを突っ込む、流石に舌を動かしたりはしてくれないので、角度を変えて口内にチンコを擦り付けて汚れを落とす。

満足すれば口から抜き、そこには綺麗になったチンコが元気に立っていた。

「んんっ……ああっ」

「しばらくは開発しておくか」

これ以上は弱っているカナにはきついので、性感帯の開発に専念することに、それからは日がくれるまで病室に籠り、じつくりと愛撫を続けてカナを何度もイカせるのであった。

止まらないパトスと心中

「んんっ……あっ」

荒く艶やかな息遣い、それと共に淫らな水音が病室に響く。

微かな衣擦れの音に合わせて女の声が聞こえ、何かを叩きつける音も鳴っていた。

とまあそれっぽいことを言ってみたキンジです。

今俺はカナを犯している。

何かこうね、眠姦ってやたらと興奮すんだよね、もちろん近親姦もしかり。

「あっ、ふうん……」

この二日で大分こなれてきたカナの膣内は俺の肉棒を啜えて喜んでいる。

チンコの抽送もスムーズになり、愛液の量もかなりのもの、寝ているためか締め付けも程よく、膣内のうねりも緩やかだ。

おかけで少々刺激が足りなくて射精までが時間をかけて犯らないといけないが、今は開発中なので別に構わない。

「ふっ、ああ……」

しかし、艶々の肌に浮かぶ汗や仄かに朱に染まる頬、綺麗な胸に立つ乳首と引き締まった括れの腰部分等、マジで見えて飽きない。

こんなのんびりとしたセックスも乙なものだと内心考えながら腰を打ち付ける。

パンパンと小刻みに腰を振り、すっかりとチンコに順応した膣内を往復する。

止めどなく溢れる愛液はシーツを濡らし、滑りの良い膣内は柔らかく絡み付いてチンコを啜える。

「ふうん、あつ、んっ！」

「反応がよくて大変結構」

グチュグチュとピストンを続けながら、硬くなった乳首をきゅつと摘まむと小さく嬌声を上げるカナ。

未だ起きないのは脳にダメージを与えたからであろうが、本人の知らぬ内に全てを奪われるなど思ってもいかなかったであろう。

まあ、任務完了の知らせは兄貴のケータイからしておいたけどね。

特殊武偵庁のお偉方も、元イ・ウーの二人を連れていつて説明したら信じるしかなかったようだ。

これで名実ともに兄はこの世から消え、俺の奴隷たるカナだけが残った。

これからは確り可愛がってやるから別に良いだろう。

まあ、病院から出たから矢所先生に怒られたけど。

「ふあつ、くう、んんっ」

「おいおい、またイツタのか?」

ビクツと少しの間痙攣したカナの膣がきゅつと締まったのでそれに気づく、どうもやり過ぎたのか感度が良くなってイキ易い。

寝ているときは反応や感覚が鈍くなるものだが、この状態の時にこれだけイケるなら意識のあるときにやればさぞや良い声で鳴くのだろう。

退院は明日だし、しばらくは様子見で見舞いに来るが早く起きないものか。

「あつ、そろそろ出すぞ」

「ふう、んんっ……ああっ!」

微かな喘ぎ声を出しながら小さく絶頂するカナのマンコにどくどくと精液を流し込む。

程よい感触の膣内に大量の精液を放ったのは本日二回目、五時間やってこれだ、カナは2桁はイっているのにな。

「ハアハアハア……」

「さあて、もう一頑張りだ」

「んんっ……ふうん」

再びばちゆばちゆと音を立てて腰を振る俺に合わせてカナの口から声が漏れる。

気持ちの良い膣内をじつくりと味わい、チンコを往復させる。

正常位で覆い被さるように動いているから顔がすぐ近くに見える。

その顔が快楽に蕩けているのは見間違いでは無いだろう。

それを確信している俺は、これからの原作の作戦を建てながら快楽を享受するのであった。

「遂に帰って来たぜ！マイルーム！」

朝早くに退院してさっさと部屋に戻った俺は早速ソファに倒れる。

ふかふかのその感触を懐かしみながら、プリントで渡されている、強襲科の訓練のス

ケジュールを頭に叩き込み、鈍った体を早く元に戻す予定を考える。

そしてすぐに考えをまとめた後、昼寝に突入。

やはり寝る子は育つらしいので身長が178の俺はよく寝ます。

ていうか昨日カナと頑張りすぎて疲れた、だからもう一眠りだ。

そんな言い訳をしながら再度眠りについた。

翌日、久しぶりの強襲科の訓練、参上した俺に周りの皆も声をかけてくれる。

やはり友達が多いのは良いことだと思いつつながら、挑んでくる戦闘スキーマの面々をズタゴロにして周囲に転がす。

なぜか蘭豹が挑んできたのでHSSを使用する破目になったが余裕で勝利、やはり俺はシャーロックとの極限の戦闘を経て進化したのだ、これからはNewスーパーキングの時代なのだ。

等、訳のわからないことを考えながら訓練を消化する。

もちろん、蘭豹を倒して事実上東京武偵高強襲科最強の名を手に入れた俺に挑むものは数多く、その全てを制して笑顔で帰宅した。

さて、今日もたくさんやりましょう!!

「はあ、んっ……じゆるるう!」

ベッドに腰かける俺の前に跪く白雪が俺のチンコを啜える。

まずは周りを綺麗にするため、裏筋やカリをねぶる様に舐め、全体を湿らせたら大きく口を開けてチンコを飲み込む。

舌を絡ませ口内にチンコを飲み込みながら音をたててフェラを続ける白雪。

黒い下着にガーターを着けた姿は色っぽく、フェラをしながらオナニーをしてマンコを弄っていた。

「ふうん……じゆるるっ、じゆるっ、じゅうううっ！」

「くはあ、白雪、最高だ」

うねる口内は熱く、亀頭に舌を這わされ先走りを吸い取られる度にビリビリと快感が走る。

そして、追加で柔らかな美巨乳に挟まれて扱かれ、吸い付く柔肌の気持ちよさを味わうことに。

「くあー！」

「ふうんむっ……じゆるるっ、らひてえ……ぢゅうううっ！はやふう……」

「うわ、エロ」

早くと射精を促す白雪の姿に言い知れぬエロさを感じとり、目を点にしてしまう。

巻ついてチンコ全体を刺激する舌の気持ちよさは言うに及ばず。

亀頭やカりに裏筋、玉袋まで手で優しく揉まれて快楽が止まることはない。

ビクビクするチンコに気づいた白雪の吸い上げが激しくなり、遂に射精した。

「くっ！出すぞー！」

「んうっ！ふう、ゴクツゴクツ……ふあ……ペチャペチャ……」

「ふう、気持ちよかった」

大量の精液を口内に流し込むと、嬉しそうな顔の白雪がゴクゴクと飲み干し、それが

終われば汚れたチンコを唾えて掃除する。

残り汁や周りの液も舐めとり、綺麗になったチンコが反りたっている。

そして、目の前には早く入れて欲しそうな白雪が。

彼女をベッドに上げて足を開かせ、マンコに顔を近づけた。

「あ……キンちゃん？ンアアツ!？」

「じゅぶぶぶつ！ぢゆうううつ!!」

「んっ！あっ！ふああ!!」

濡れそぼる白雪の淫乱マンコに吸い付いて舌を差し込み、膣内を蹂躪すると、溜まっていた愛液が溢れてくるのでココココと飲み、顔を離して指を挿入する。

「ああ！指があ！ンンンンッ!」

オナニーである程度ほぐれていた膣内をグチュグチュと指で掻き回し、弱点のGスポットを徹底的に責める。

空いた手は上に伸ばし、勃起した乳首を摘まめば膣内の締まりが増す。

「ああああああっ！そこ、はっ!?!ンンンンッ!」

高速で掻き回し、愛液を飛び散らす。

濡れたマンコは指で責められ、上は乳首を、クリトリスには吸い付かれて歯で扱かれる。

一斉攻撃を受けた白雪は持たず、直ぐに絶頂した。

「ああ！ああっ！んああああああっ！イクう！イクのお！おまんこでイクのお!!」

「ふふふ、派手にイッたな」

びゅー、と潮を吹いて達した白雪はビクビク身体を跳ねさせ、実に気持ち良さそうにイッた。

潮吹きが止まるとひくつくマンコはだらだらと愛液を垂らしている。

腕で顔を隠している白雪に近づき狙いを定めた俺は、イキなり一番奥までチンコで貫いた。

「ハア……ンンンンッ!?ああああああっ!」

「またイッたのか?」

ガツンと突き込んだマンコは締まりが格段に良くなり、しばらく痙攣している。

滑るその膣内を蹂躪するために勢いよく腰を振り始める俺。

グチュグチュとチンコで掻き回すと激しく嬌声を上げて感じる白雪。

その膣内は俺のチンコの形を覚えてピツタリと締め付け、絡み付く大量の褻が射精を促すようにうねうねと蠢く。

吸い付きも強く良く濡れた膣内は最高の快感を俺達に味あわせる。

「おちんちんがつ、来てるう！ああっ！深いい!」

「くう、締まるっ！」

「ンアアアアアアアアアッ！キンちゃんのおちんちん!!もっとおまんこ突いてえ!!」
くく、良いこと言うじゃないか、流星は白雪、嫁の鏡だな。

その声に答えてやる。

角度を変えてチンコを突いた俺は反り立つチンコのカリでゴリゴリと膣壁を抉り、
キュンキュン締まるマンコを掻き回す。

ガーターソックスを着けた美女が股を開き、ずらした下着をビチャビチャに濡らして
喘ぐ姿は征服欲を満たしてくれる。

すべすべの美肌を包むガーターは触り心地も良くてやっぱり白い肌に映える。く度
に白雪は感じ、締まるマンコはだらだらと愛液を垂らしてシーツを濡らす。

その両脇に手を突いてパンパンと勢いよく腰を振れば、愛液が空気を含んで泡立ちマ
ンコの中がかき混ぜられる。

嫌らしい音を立てるマンコは嬉しそうに愛液を増やして反応する。

「ンアアアアアアアアアッ！キンちゃん！キンちゃんっ!!白雪のおまんこをもっと突い
てください!!」

「白雪っ！」

「ああああああっ！良いの！おまんこ良いのお!!」

「くっ、出るー！」

綺麗な瞳から涙を流して感じる白雪に興奮した俺は、勢いよく膣内に精液を放つ。

最奥の子宮口をゴリゴリと押し開き、亀頭から走る快感に身を任せて白雪の絶頂を感じる。

締め付けるマンコは更に精液を出せとうねり、チンコを抜く。

それに堪らず第2射を出した俺は白雪と二度連続で絶頂した。

かなりの体力を使ったので横に倒れてしまう。

「ハアハアハア……キンちゃん、次は私が動くね」

「良いけど、大丈夫か？」

「うんー！」

そう言った白雪は身体を入れ換えて、上になり、そのまま動き出した。

「あつー！ああんっ！！奥に届いてるー！」

「おお……」

白雪が腰を上下する度大きな胸が揺れ、それに吸い寄せられる様に手が延びる。

形の良い胸を掌で弄び、柔らかな感触を味わいながら揉みしだく。

感度の良い胸は軽く揉まれると小さく絶頂するほどで、上でも下でも俺を楽しませてくれる。

白雪は俺の腹に手を突いてパンパンと自ら腰を振るので動かなくて良いのは楽だ。

「どうだ？ 気持ち良いか？」

「うん！ すごく良いの！ 私のおまんこ掻き回されて感じてるのっ!!」

素直な白雪は快楽に従い言葉を述べる。

その淫らな腰使いはチンコを激しく扱き、自らも嬌声を上げて感じている。

そのままたぎる熱を押さええずに俺は白雪の膣内に精液を放った。

「あああああああっ！ 熱いのが出てる！ ンアアアアアアアアアアアッ!!!」

激しく感じる白雪はあっさりと絶頂して、背をのけぞらせて嬌声をあげた。

どくどくと溢れる精液が止まるのを待たずに俺は身体を起こし、対面座位でセックス

を続ける。

「ンアアアアアアアアアアッ！ 未だ出てるのにい！ くらうううっ！ あああっんああっ！」

「もつとイクんだ、白雪」

抱き締めた身体の柔らかな感触を楽しみ、胸に当たる乳首が擦れるのかピクピク感じている白雪の腰を掴んで動かす。

俺の背に腕を回して倒れるのを我慢していた白雪は突然の快感に意識をとられ、淫らな嬌声をあげた。

「あああああああっ！ イクウウウウウウウッ！」

密着して動きにくい難しい体勢だがストロークを上手く使ったので子宮口をゴリゴリと擦って膣内に出すとその快感で白雪がまた絶頂した。

「ハアハアハア……もう、無理だよ」

「じゃあ次だな」

「えっ、まっ、ンアアアアアアアッ!!」

待つてと言いつ終る前に白雪を持ち上げて駅弁スタイルでセックスを始める。

こちららも腰を動かし、持ち上げた白雪のマンコを強く強く叩く。

溢れた、色々な液体の混ざった白濁としたそれがシートに零れ、感じすぎている白雪のマンコの締め付けを無視して腰を振る。

「あああああああっ！もうだめえ！突かないでっ！」

「ふうう!!」

「ああっ！ンアアアアアアアアッ！イクウウウウウッ！」

絶頂する白雪は一瞬気を失ったのか身体の力が抜ける、しかしガツンと奥を突くと意識を戻されてすさまじい快感に弄ばれる。

「こひがつ、こひが溶けるのっ！」

「んんう!!」

俺も凄まじい快感を味わいながら、腰が蕩けそうなのを我慢して射精まで耐える。

既に呂律が回らない白雪は何とか俺にしがみついて気をやりそうになるのを耐えていた。

「ああああああつ！イクウウウウウウツ！イクウウウウウウツ！ンアアアアアアアアアアツ！！」

「最後だ、白雪！出さぞつ！！」

「ンアアアアアアアアツ！出てるう！熱いのが出てるのお！！」

ビュルビュルと最後の1発を白雪の蕩ける子宮口に出した俺はゆっくりとベッドに倒れた、俺に抱きついている白雪は仰向けの俺の上になり、肩を越すように顔をベッドにつけて荒い息をついている。

「はあ、気持ち良かったよ、白雪」

「うん、キンちゃん。私も、凄く気持ち良かったよ」

未だ膣内にはいったままのチンコからは熱い感覚が走り、すさまじい快感に未だ痙攣していた。

そのまま舌を絡めてキスをして、繋がったまま俺たちは眠りに落ちた。

いやあ、昨日は燃え上がった。

久しぶりの白雪とのセックスはスゲエ良かったですよ。

朝になって風呂に入った俺たちは朝食を食べて再びベッドに。

夕方までセックス漬けで白雪を虐め抜くと、白雪は気絶した、最後は電マをショーツに入れて、乳首をローターで責めたままベッドに縛り付けて放置した。

明日の朝もイキなり挿入してよがり狂わせてやるぜ!!

巫つ女巫女にしてやんよ！

「ンアアアアアアアアッ！イクツ、イクウ！おまんこ良いのお!!」

「またイクのか白雪」

今、目の前の白雪は俺のチンコでマンコを貫かれ絶頂を続けている。

一晩所か既に三日はやり続けているがやはり飽きの来ない素晴らしいマンコだ。

そんなん白雪の横には理子やジャンヌ、美咲が白濁液まみれで転がっている。

全員これでもかと犯し抜いてイカせたら最後には氣をやって動かなくやった。

こんなところでも絶頂に慣れるかがわかるのだ。

「ダメエーおまんこ溶けちゃうの！んああ！擦らないで！」

ひたすら抽送を繰り返し、膣内を徹底的に蹂躪する。

何度も繰り返して擦られ続けた膣内は焼けるように熱く、カリでゴリゴリと削る様に責めれば断続的に潮を吹いて収縮する。

既に三日で30回は膣内に出しているが、溢れかえる精液がシートをぐちゃぐちゃにしていた。

凄まじい締め付けを失わない白雪の名器はうねうねとチンコを締め付けて啞え、これだけやられているのに未だ感じている。

だが、俺もさすがに疲れた。

そのため、これで最後と腰の振りを速くする。

「あああああああつ！熱い、熱いのお！おまんこ溶けちゃうの!!」

「ツ!!出るぞ!」

「ンアアアアアアアアアアツ!!イク、イクう!ンアアアアアアアアアアツ!!」

止めに最奥の子宮口に口づける様に龟头を押し付け精液を放った。

最高の絶頂を味わいながら、シーツを握りしめて痙攣する白雪。

絡み付く褻が射精を促し、うねるので更に量が増す。

長い長い射精を終えた俺は白雪の横に倒れる。

さすがに疲れた。

「ハアハアハア……もう、だ、め……」

「ああ、気絶したか」

最後に呟いた白雪はガクリと意識を失った。

白い肌を朱に染めて汗で煌めく彼女は軽く触れるとビクビクと反応する。

やはり未だ敏感なのだろう。

これで起こすのは可哀想だから俺も寝ることにした。

さて、そろそろ夏休みも中盤、明日は何をして楽しんだものか。

まあ、粉雪早く来るらしいから準備はしておかないとな！

夏は良いね、この凄まじい日差しに脳が焼かれていく気すらする。

なんて、訳のわからないことを考えつつ強襲科の訓練を続ける。

続々と現れる猛者たちを次々と振り伏せ、時には吹き飛ばし、時には切り裂いて、男
ばっかの体育館を駆け抜ける。

総合訓練とか言う割には皆俺を狙っている気がするのだ。

おかしい、だが仕方ない。

何故なら体育館のステージの上で指揮を執る蘭豹が俺を狙え、殺せと叫んでいるから
だ。

マジで疲れた。

「死ねやあ！キンジィー……ぐぼっ!？」

「武藤ー!」

「いや、何で武藤がいるんだよ」

何故か強襲科のメンバーに混ざっている武藤、最近白雪の事を話してから何故かこんな感じに……キスの味を教えたのが悪かったのか?

「キンジイイイ!!」

「お前はゾンビか!?!」

ヤバイよこいつ、何で倒しても倒しても立ち上がるんだよ!?

とりあえず蹴りを入れて距離をとる。

しかし周りには男子の群れ……このままでは……。

「ならばー!」

「む?……なんやとお!?!」

「秘技!・煙玉!」

陽菜仕込みのえせ忍術で姿をくらまし、即座に逃走!

「くそお!・遠山あ!!」

「あばよ!・とつつあん!」

三世の如く、我逃走!フハハハ!

「あ、危なかった……」

何であそこまで執拗に追いかけてくるのやら、訳が分からないがとにかくしつこく、そして体力を削られた。

「まあ、振りきれたけど」

何とか巻いて、寮に戻ったのが夕方、疲れを振りきり、階段を登る。

そして廊下に出た時、視界に特徴的な姿が映った。

「え……」

「あ、遠山さまですか」

あれ？粉雪じゃん、何でももう居るの？早くね？

等いろいろとかんがえたが、玄関の前に佇む巫女装束の少女は粉雪だった。

ああ、白雪がないから……逃げられてしまうかも。

そこまで考えたおれは、ついやっちゃったんだ♪

「ん……あ、え?」

「起きたか」

目を覚ました粉雪は目の前にいる俺の顔を見て呆けている。

それも仕方がないこと、何せ突然気を失ってからの状況だからな。

そんな姿を見ながら気付けにピストンを早める。

「え?あ、んんっ!」

「くくっ、処女を失ったばかりの癖にもうこんなに感じてるのか」

「んんっ!あつ、うそ?え?」

「嘘じゃないよ」

突然の事態に思考が追い付いていないのだろう。

「微かな喘ぎ声を漏らしながら自分の状況を確認した粉雪は、今自分が犯されていると

いうことに漸く気づいた。

「うそ、いや、こんなのって……あつ！」

「さて、目を覚ましたなら楽しめよ」

「いやー！ふざけないでください！」

先ほど感じているといったが、それでも未だ気丈に振る舞う粉雪、実際は感覚を鈍らせて話しやすくしてるだけなんだが、それを解除するところなるのだ。

「貴方は最低です！お姉様に言いつけ——ひいつ！」

「ん？白雪がどうした？」

「ツ!!お姉様に……んんっ！言いつけて——ンアアアアアアアッ!!」

以外に粘るので一気に術を解くと、寝ている間に散々犯した分の快感が一気に粉雪を襲った。

媚薬やらなんやらを仕込み、十分にほぐした後ずつと犯したのだ、直ぐにチンコを啜えたマンコは快楽に飲まれ、たぶん数回分の絶頂が粉雪を襲った。

「あああああああつ！んんんんっ！ああつ！」

「へえ、もういったのか、流石は淫乱だな」

「ちがつ！んんんんっ！私は淫乱なんかじゃ！」

「嘘をつけ、大方性欲をもて余して普段から自慰に耽っていたんだろ？じゃないとちよつと愛撫しただけで俺のものを啜え込むことができるか」

「それは!んっ!くあああああ!」

「凶星を疲れて困惑する粉雪、実際は記憶を覗いたら見つかったネタを使ってるだけだ
が。」

「まあそんなことはどうでもいい」

「んんっ!やめっ!止めてえ!」

「たっぷり可愛がつてやるからな」

会話を打ち切り、腰を振るのに集中する。

先ほど処女を失ったマンコは中々の締め付けで、熟成が足りないのか襲の数
が少なく、うねりや絡み付きが足りないがそれを補って余りある。

意識を取り戻してからそれが顕著になり、痛いくらいの締まりで俺のチンコを拒む
ので逆に扶けるようにゴリゴリと押し込む。

愛液の量だけは十分な上に媚薬と俺のテクで性感帯を的確に責めているので粉雪は
堪らなそうに声をあげる。

「いやあ、いやあ!!お姉様!」

「残念ながら白雪は今日は来ないよ」

「んんっ!そんなあ、ああああああつ!」

「またいつたか」

固くシコる乳首をきゅつと摘まむと嬌声をあげて身体を跳ねる粉雪、未成熟な、未だ育ちきつていない胸は念入りに揉みほぐしてあげたので良い感度に仕上がっている。

パンパンと腰を打ち付け、暴れる粉雪をいなしながら性感帯を責め続けていると、何度も絶頂を繰り返し、次第に喘ぎ声以外が聞こえなくなる。

「んんっ！やっ、あああああああつ！んあ！んんんんっ！」

ボタボタ垂れる愛液は止まることがなく、シートに染みを作る。

汗ばんだ肌に舌を這わせれば微弱な快感に身を震わせ、強く腰を打ち付けると潮を吹きながら絶頂を繰り返す。

それをどれくらい続けただろうか、イカセ過ぎて粉雪の意識が朦朧とし始めた頃、彼女は自分から腰を振り始めた。

「ほお、これはこれは」

「んんっ！やあ！やめてえ……んんっ！」

俺はただ挿入しているだけなのに、己で快感を得ようと動いていることにまるで気づかない。

既に身体は堕ちたと言うわけだ。

ならばあとは精神を崩して快樂の虜にしてやる。

「口では何とでも言えるんだな？」

「はあ、んっ、なに……を？」

「気づいてなかったのか？さっきから俺はなにもしてないぞ」

「え……あつ」

「自分から腰を振って、嫌らしいやつだな」

指摘してやると漸く自分から腰を振っているのに気づく粉雪。

その腰使いはいやらしく、中々の腕前だ。

「そんな……私が、こんなにはしたくないこと……」

「実際はしてるけどな」

「んっ、うそ、嘘です、これは夢です！」

「残念ながら現実なんだよ……ね！」

「ツ!!んんんっ!!ンアアアアアアアアアツ!!」

パアンと腰を打ち付けると潮を吹き、痙攣する粉雪。

更にピストンを早めて何度も絶頂させてやる。

「んああつ!やあ!いやあ!!もう、止めてえ！」

「くくっ、大丈夫だ、どんなにはしたなくてもこれは俺しか知らないんだ好きだけ乱れろ」

「やつ——んむっ!んちゆううう、んむっ、んんっ！」

舌を絡めるキスをすれば、拒む姿勢を見せながらも実際は自分で舌を絡めて唾液を飲み干す。

コクコク喉を鳴らして、積極的にキスに応じているくせに未だ拒んでいるつもりの粉雪。

少々強情だが今晚じっくりと弄んで、俺のチンコを忘れられなくしてやる。

決して昔会ったときに不潔です！とか言われた私怨ではない、ないつたらないのである。

「ああっ！あああああああっ！」

「ほらっ、イクんだ！」

「やつ、ああっ！あああああああっ！ンアアアアアアアアアアッ!!!」

ピンッと背をそらして絶頂した粉雪は激しく痙攣して潮を吹く。

その処女マンコに実は初めての中だしを決めてやる。

墮ちるまで耐えた分だけあって大量のそれは瞬く間に粉雪の中まで汚し、快樂でそれあげる。

もはや絶叫をあげることしかできない彼女はそのままくたりと気をやった。

「あああ……ああ」

「気絶したか、んじゃ、次にいくかね」

俺は粉雪を抱き上げ風呂場へ向かう、これからは明日の迎えが来る時間まで徹底的に犯し抜いて、俺を見るだけで発情する体にしてやる。

別に戦闘員としては数えていない粉雪は性奴隷の中の性奴隷として俺に尽くすのだ

!

ガツハツハツハ!

快樂の虜

「ああつ、良いのおおまんこが気持ち良い……」

湯気の籠る風呂場に淫らな声が響き渡り、か細い喘ぎ声に俺の逸物の硬度が上がる。

対面座位で向き合い、俺の上で腰を振る粉雪の顔はすっかり蕩けきっていた。

ぴちやぴちやとお湯が跳ねる中、俺の首に腕を回した粉雪は、固くしこる乳首を俺の胸板に擦り付け快樂を貪る。

「良い穴だ、俺の物を奥まで咥え込んで、そんなに気持ち良いか？ん？」

「やあ、良いのお、遠山さまのおちんこ気持ち良いのお……」

ドＳスイッチの入った俺は二流ＡＶの男優のようなセリフで粉雪を言葉責めにし、それに答える粉雪は完全に俺の性奴隷と化していた。

よく閉まる幼さを残すまんこを突き、子宮口付近を亀頭でグリグリと刺激すると切なげに声を上げる。

コリコリした感触を胸とちんこに感じながら首筋に吸い付き身体を弄んだ。

「遠山さまあ、き、キスしてえ」

舌を出しておねだりする粉雪に應えて唇を奪う、舌を差し込むと積極的に吸い付き口内を舐め回してくる。

「ふんん……ん、んむっ、ンンンンンッ！」

「おおおっ……」

更に下の口も上の口も繋がった状態で抽送を激しくするとぐもった声を出して粉雪は絶頂した。

キュンと締め付けるまんこへ本日何度目か分からないが精を放った。

小さな膣は搾り取るようにグツと締まるので中々射精が終わらなかつた。

「ふあっ、熱いのがきたあ」

「ふう、良かったよ、粉雪」

「ああっ、そんな、もったいないお言葉です」

すっかりと従順になった粉雪は頭を撫でながら誉めると顔を赤くして俺の胸にしがみついた。

最初の態度からここまで落とすのに数時間かかったがそろそろ良いだろうと思い、ちんこを膣内から引き抜く。

その際の刺激で粉雪がまた嬌声を上げたが絶頂するほどではない。

そして、栓が抜けた事により粉雪の膣内から溢れた精子が湯の中を漂う。

それを見た彼女が残念そうにこちらを見たので尻穴に指を差し込んでやる。

目を開いてびっくりとした粉雪だがその刺激で膣が閉まったのでもう漏れでる事は無い。

「さあ、綺麗にしてくれ」

「はい、失礼します……んむっ」

湯と体液でテラテラ光る逸物で粉雪の唇をつつくと礼儀正しく返事をしてそれに吸い付いた。

竿に舌を這わせて丁寧に舐めあげ、笠の舌や根元までを綺麗にする。

美少女が熱っぽく潤んだ瞳でこちらを見上げて奉仕する姿を見ると征服欲が満たされる。

膣内に出すたびに仕込んだ奉仕は今日が初めてだと言うのに中々のものだった。

やはり姉と同じで性的な事に関してはセンスがあるのだろう。

頭を撫でてやると嬉しそうに目を細め、舌使いを激しくする。

そんな彼女にそろそろ我慢が出来なくなってきた。

「くっ、出すぞっ」

「んんっ、んむっ、じゅぶぶっ」

どくどくと大量の精を放つと、溢れ出そうになるのを健気に抑え、粉雪はすべて飲み

干した。

最後に亀頭を吸い上げて残り汁を吸い出した粉雪は口を放し、上目使いにこちらを見る。

「どうですかと言いたげなその行動に俺は満足して誉めてやった。」

「良かったよ、お陰でスツキリした」

「そんな、有り難いです」

「さて、そろそろ上がるぞ」

「は、はい」

フラフラと湯船から立ち上がる粉雪を抱き上げ、風呂から上がった。

「流石に疲れたので今日はもう寝る、粉雪に腕枕をして抱きしめ、柔らかな感触を楽しみながら俺は眠りに落ちていった。」